

第18回冬季デフリンピック競技大会 日本選手団参加報告書



公益財団法人 日本障がい者スポーツ協会
一般財団法人 全日本ろうあ連盟

秋篠宮同妃両殿下ご接見



長谷川派遣副委員長による挨拶

結団式



成田空港にて結団式

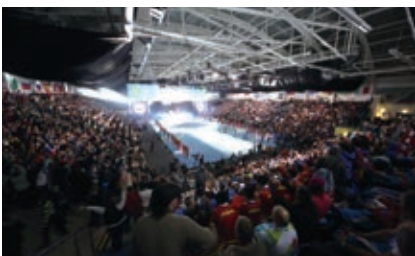


文科省・厚労省からの激励を受け
決意表明する高嶋主将と花島旗手

開会式



開会式前に在ロシア日本国大使館の牧野秀樹領事部長より
激励のあいさつを頂きました



会場は多くの市民の参加で満員



日本選手団の入場



ICSD ワレーリィ・ルフレチェフ会長（中央左）とロシアろうスポーツ委員会 アレクサンドル・ロマンツォフ会長（中央右）



聖火点灯



民族舞踊などのアトラクション



大会マスコット

アルペンスキー競技



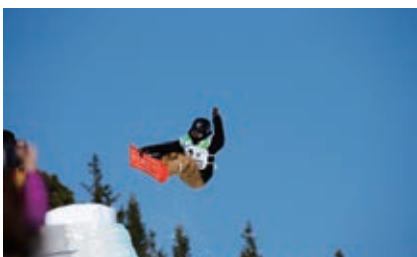
マグニトゴルスクでの歓迎セレモニー



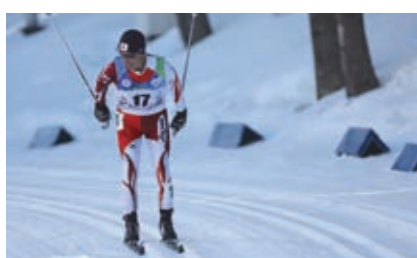
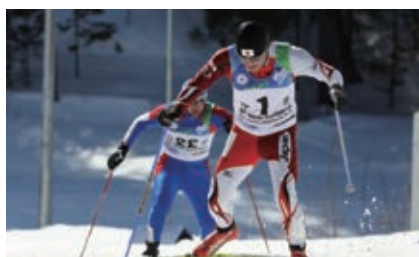
スノーボード競技アルペンスノーボード種目



スノーボード競技ハーフパイプ種目



クロスカンントリー競技



カーリング競技



本部



毎晩開かれていた
本部ミーティング



選手やスタッフからの
相談に対応する本部スタッフ



立石医師による診療

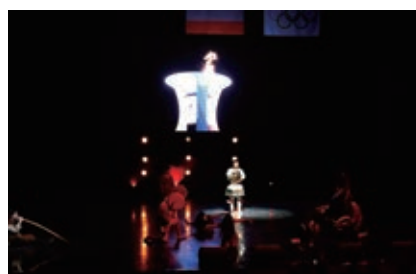
閉会式



ウルガクラシック劇場に 1000 人以上の観衆が集う



ICSD 会長より国際手話でデフリンピックの素晴らしさと発展を願うあいさつ



様々なアトラクションの後、聖火の消灯でフィナーレを迎える

解団式



太田団長より解団のあいさつ



高嶋主将より今大会を振り返っての反省と次回大会に向けた抱負のあいさつ



メダル受賞者

目 次

1. 日本選手団参加報告書の発刊について（お礼）	1
2. 第18回冬季デフリンピック競技大会及び日本選手団の概要	2
3. 日本選手団名簿	3
4. 成績一覧	
①メダリスト一覧	5
②国別メダル獲得成績一覧	6
③各競技成績一覧	7
5. 日本選手団団員報告	
①本部役員・スタッフ	9
②アルペンスキー競技チーム	28
③アルペンスノーボード競技チーム	34
④スノーボードハーフパイプ競技チーム	41
⑤クロスカントリー競技チーム	46
⑥カーリング競技男子チーム	49
6. 参考資料	
①主なスケジュール	57
②日本選手団必携マニュアル	58
③日本選手団の編成にかかる指針	73
④選手推薦等申請用紙	73
⑤健康調査票等	80
⑥聴力検査票	81
⑦ソーシャルメディアガイドライン	83
⑧デフリンピック開催地一覧	87

第18回冬季デフリンピック競技大会 日本選手団報告書の発刊について（お礼）

一般財団法人全日本ろうあ連盟理事長
デフリンピック派遣委員会委員長
石野富志三郎

第18回冬季デフリンピック競技大会がロシア連邦のハンティ・マンシースク市およびマグニトゴルスク市にて2015年3月28日から4月5日の9日間にわたり開催され、日本からは選手・スタッフ合わせて48名を派遣いたしました。冬季デフリンピック競技大会は4年前の同大会（スロバキア・ハイタトラス市、2011年2月）が開催直前で中止となったため、実に8年ぶりの開催となります。

出発前には秋篠宮同妃両殿下および佳子内親王殿下との御接見で温かい励ましのお言葉を賜り、選手1人1人が日の丸を背負って世界の舞台に立つ責任を改めて認識し、より一層気を引き締め、日本に明るいニュースを届けるとの強い思いで試合に臨みました。

その結果、選手にとってはおよそ8年間もの空白があるのにも関わらず、過去最高記録を上回る5個のメダル（金3個、銀1個、銅1個）を獲得することができました。このようなすばらしい報告が皆様にできることを心から嬉しく感じています。

前大会の中止は、選手やスタッフ、競技団体の競技活動に少なからず大きな影響を及ぼしました。聴覚障害者スポーツに対する理解はまだ十分ではなく、その影響は非常に厳しいものでしたが、その逆境にも負けず、選手たちは日々の練習や合宿を積み重ねてまいりました。彼らがこの世界の舞台にて持てる最大の力を発揮できたのは、選手たちの並みならぬ忍耐と修練の賜物です。

ご支援を賜りました文部科学省をはじめ、宮内庁、厚生労働省、公益財団法人日本障がい者スポーツ協会、日本パラリンピック委員会、デフリンピック応援プロジェクトチーム、全国手話通訳問題研究会、国立障害者リハビリテーションセンター、メディカルサポートの皆様、関係各団体、そして選手やスタッフを快く大会へ送り出してくださった各学校・各企業等、選手・スタッフを日頃から陰で支えてくださった各競技団体のスタッフたち、日本選手団を各方面で支えていただいた加盟団体をはじめ皆様方にこの場をお借りし厚くお礼申し上げます。今後とも変わらぬご支援・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

第18回冬季デフリンピック競技大会概要

- 1 大会名称 第18回冬季デフリンピック競技大会
- 2 開催期間 2015年3月28日（土）開会式
～4月5日（日）閉会式 【9日間】
- 1) 渡航日程 2015年3月24日（火）～4月7日（火）【15日間】
- 2) 結団式 3月24日（火）
- 3) 解団式 4月6日（月）
- 3 開催国・都市 ロシア連邦／ハンティ・マンシースク、マグニトゴルスク
- 4 運営主体 ・国際ろう者スポーツ委員会
(International Committee of Sports for the Deaf)
・第18回冬季デフリンピック組織委員会
(The 18th Winter Deaflympics Organizing Committee)
- 5 参加国・地域数 27か国
- 6 参加人数 選手336名・役員スタッフ348名
- 7 実施競技 アルペンスキー、クロスカントリースキー、スノーボード、カーリング、
アイスホッケー（5競技）
※アンダーラインは日本選手が参加した競技（4競技）
- 8 日本選手団
- | | |
|------|---------------|
| 選 手 | 22名 |
| 役 員 | 10名 |
| 本部役員 | 16名 |
| 合 計 | 48名（現地スタッフ2名） |

（派遣役員）

団 長：一般財団法人全日本ろうあ連盟理事・スポーツ委員会委員長 太田陽介
 総監督：一般財団法人全日本ろうあ連盟スポーツ委員会国際事業部長 栗野達人
 総 務：一般財団法人全日本ろうあ連盟スポーツ委員会国際事業部 大杉 豊

主 将 アルペンスノーボード 高嶋弘貴
 旗 手 スノーボードハーフパイプ 花島良子

9 公式行事

結団式 2015年3月24日（火）成田空港第1ターミナル待合室
 開会式 2015年3月28日（土）Tennis Training Center
 閉会式 2015年4月5日（日）Ugra-Classic
 解団式 2015年4月6日（月）シェレメティボ空港ホテルノボテル

10 競技別参加者一覧

競技名	選手	役員	総数
アルペンスキー	3	4	7
アルペンスノーボード	5	3	8
スノーボードハーフパイプ	6	1	7
クロスカントリー	3	1	4
男子カーリング	5	1	6
事務局		16	16
総数	22	26	48

第18回冬季デフリンピック競技大会 日本選手団

通し	No		スタッフ or選手	肩書き及び 出場希望競技種目	名前（漢字）	名前（よみがな）	ろう 健聴	性別	年齢 (2015/ 3/1現在)	所属協会（高校生は学校名を記載）
1	1	アルペンスキー	スタッフ	アルペン代表	田中 照也	たなか てるや	ろう	男	41	公益社団法人東京聴覚障害者総合支援機構 東京都聴覚障害者連盟
2	2	アルペンスキー	スタッフ	監督兼コーチ、通訳	西 裕之	にし ひろゆき	健聴	男	38	学校法人名古屋電気学園
3	3	アルペンスキー	スタッフ	サービスマン	永田 憲市郎	ながた けんいちろう	健聴	男	47	有限会社エタニティフィールド
4	4	アルペンスキー	スタッフ	庶務兼通訳	豊島 清美	とよしま きよみ	ろう	女	45	社団法人茨城県聴覚障害者協会
5	5	アルペンスキー	選手	滑降、スーパー大回転 大回転、回転、スーパーコンビ	中村 晃大	なかむら こうだい	ろう	男	23	社会福祉法人長野県聴覚障害者協会
6	6	アルペンスキー	選手	スーパー大回転、大回転 回転、スーパーコンビ	北城 大地	きたじょう だいち	ろう	男	21	一般社団法人青森県ろうあ協会
7	7	アルペンスキー	選手	大回転、回転	小林 育実	こばやし いくみ	ろう	女	22	一般社団法人山形県聴覚障害者協会
8	1	アルペンスノーボード	スタッフ	監督	土師 比佐夫	はじ ひさお	ろう	男	57	公益社団法人東京聴覚障害者総合支援機構 東京都聴覚障害者連盟
9	2	アルペンスノーボード	スタッフ	コーチ	鶴岡 剣太郎	つるおか けんたろう	健聴	男	40	株式会社STEP
10	3	アルペンスノーボード	スタッフ	アスレティック トレーナー	津賀 裕喜	つが ゆうき	健聴	男	26	学校法人帝京平成大学
11	4	アルペンスノーボード	選手	回転、大回転	原田 上	はらだ のぼる	ろう	男	38	一般社団法人栃木県聴覚障害者協会
12	5	アルペンスノーボード	選手	回転、大回転	星 雄一	ほし ゆういち	ろう	男	47	一般社団法人福島県聴覚障害者協会
13	6	アルペンスノーボード	選手	回転、大回転	高嶋 弘貴	たかしま ひろき	ろう	男	31	神奈川県聴覚障害者連盟
14	7	アルペンスノーボード	選手	回転、大回転	星 奈々	ほし なな	ろう	女	34	一般社団法人福島県聴覚障害者協会
15	8	アルペンスノーボード	選手	回転、大回転	手塚 久野	てづか ひさの	ろう	女	37	一般社団法人栃木県聴覚障害者協会
16	1	ハーフパイプ	スタッフ	監督	南雲 利仁	なぐも としひと	健聴	男	40	ロジマリ
17	2	ハーフパイプ	選手	ハーフパイプ	奥田 和夫	おくだ かずお	ろう	男	46	社団法人山梨県聴覚障害者協会
18	3	ハーフパイプ	選手	ハーフパイプ	花島 良子	はなしま りょうこ	ろう	女	35	神奈川県聴覚障害者連盟
19	4	ハーフパイプ	選手	ハーフパイプ	津久井 康友	つくい やすとも	ろう	男	36	一般社団法人群馬県聴覚障害者連盟
20	5	ハーフパイプ	選手	ハーフパイプ	大川 摩耶子	おおかわ まやこ	ろう	女	27	社団法人茨城県聴覚障害者協会
21	6	ハーフパイプ	選手	ハーフパイプ	岡本 信彦	おかもと のぶひこ	ろう	男	36	公益社団法人東京聴覚障害者総合支援機構 東京都聴覚障害者連盟
22	7	ハーフパイプ	選手	ハーフパイプ	森 仁秀	もり きみひで	ろう	男	34	公益社団法人東京聴覚障害者総合支援機構 東京都聴覚障害者連盟
23	1	クロスカントリー	スタッフ	コーチ	若井 陽介	わかい ようすけ	健聴	男	28	東京都多摩障害者センター
24	2	クロスカントリー	選手	クラシカル、フリー	山本 智美	やまもと ともみ	ろう	女	39	公益社団法人静岡県聴覚障害者協会
25	3	クロスカントリー	選手	クラシカル、フリー	田崎 富士夫	たざき ふじお	ろう	男	51	公益社団法人東京聴覚障害者総合支援機構 東京都聴覚障害者連盟
26	4	クロスカントリー	選手	クラシカル、フリー	戸津 勝由	とつ かつよし	ろう	男	64	一般社団法人山形県聴覚障害者協会

通し	No		スタッフ or選手	肩書き及び 出場希望競技種目	名前（漢字）	名前（よみがな）	ろう 健聴	性別	年齢 (2015/ 3/1現在)	所属協会（高校生は学校名を記載）
27	1	カーリング	スタッフ	トレーナー兼通訳	宮原 麻衣子	みやはら まいこ	健聴	女	45	十和田市立中央病院
28	2	カーリング	選手	団体戦	荒谷 淳一	あらや じゅんいち	ろう	男	60	一般社団法人青森県ろうあ協会
29	3	カーリング	選手	団体戦	山上 勝美	やまがみ かつみ	ろう	男	65	一般社団法人青森県ろうあ協会
30	4	カーリング	選手	団体戦	米田 義光	よねた よしみつ	ろう	男	48	一般社団法人青森県ろうあ協会
31	5	カーリング	選手	団体戦	荒谷 飛翔	あらや ひしょう	ろう	男	22	社団法人愛知県聴覚障害者協会
32	6	カーリング	選手	団体戦	中村 鉄哉	なかむら てつや	ろう	男	56	一般社団法人青森県ろうあ協会
33	1	本部	スタッフ	団長	太田 陽介	おおた ようすけ	ろう	男	56	一般財団法人 全日本ろうあ連盟 理事
34	2	本部	スタッフ	総監督	栗野 達人	あわの たつひと	ろう	男	58	一般財団法人 全日本ろうあ連盟スポーツ委員会
35	3	本部	スタッフ	総務	大杉 豊	おおすぎ ゆたか	ろう	男	52	一般財団法人 全日本ろうあ連盟スポーツ委員会
36	4	本部	スタッフ	医師	立石 智彦	たていし ともひこ	健聴	男	47	社会福祉法人同愛記念病院
37	5	本部	スタッフ	医師	清水 雅樹	しみず まさき	健聴	男	38	特定医療法人慶友会
38	6	本部	スタッフ	看護師	會田 人美	あいた ひとみ	健聴	女	50	国立障害者リハビリテーション センター
39	7	本部	スタッフ	広報	岸田 修	きしだ しゅう	ろう	男	40	公益社団法人東京聴覚障害者総合支援機構 東京都聴覚障害者連盟
40	8	本部	スタッフ	広報	狩野 功	かりの いさお	ろう	男	45	社団法人埼玉県聴覚障害者協会
41	9	本部	スタッフ	手話通訳	梅本 悦子	うめもと えつこ	健聴	女	66	一般社団法人全国手話問題研究会
42	10	本部	スタッフ	手話通訳	茂木 郁実	もてぎ いくみ	健聴	女	27	国立大学法人筑波大学 大学院
44	11	本部	スタッフ	露語通訳	日向寺 康雄	ひゅうがじ やすお	健聴	男	57	国際情報通信社「ロシア・セヴォドニーヤ」 日本セクション
43	12	本部	スタッフ	総務スタッフ	後藤 啓二	ごとう けいじ	ろう	男	38	一般財団法人 全日本ろうあ連盟職員
45	13	本部	スタッフ	移動	林 孝雄	はやし たかお	健聴	男	65	株式会社グロリアツアーズ
46	14	本部	スタッフ	移動	白坂 篤志	しらさか あつし	健聴	男	37	株式会社グロリアツアーズ
47	15	本部	スタッフ	移動（手話通訳）	内田 美春	うちだ みはる	健聴	女	50	株式会社グロリアツアーズ
48	16	本部	スタッフ	移動（手話通訳）	瀬戸 博美	せと ひろみ	健聴	女	54	株式会社グロリアツアーズ

成績一覽

日本選手団 メダリスト・入賞者一覧

金メダル

種目	選手名	記録	備考
スノーボードパラレル大回転	原田上	トーナメント方式	13 名出場
スノーボードパラレル回転	原田上	トーナメント方式	11 名出場
スノーボードハーフパイプ	花島良子	83.3	8 名出場

銀メダル

種目	選手名	記録	備考
スノーボードハーフパイプ	大川摩耶子	69.7	8 名出場

銅メダル

種目	選手名	記録	備考
スノーボードハーフパイプ	津久井康友	81.0	13 名出場

入賞

種目	選手名	順位	記録	備考
アルペンスキー複合	中村晃大	6 位入賞	2:08.97	24 名出場
アルペンスキー大回転	中村晃大	6 位入賞	2:20.08	37 名出場
アルペンスキー大回転	北城大地	7 位入賞	2:22.42	37 名出場
アルペンスキー大回転	小林育実	8 位入賞	2:43.86	13 名出場
アルペンスキー回転	中村晃大	4 位入賞	1:15.41	35 名出場
アルペンスキー回転	小林育実	6 位入賞	1:34.40	13 名出場
スノーボードパラレル大回転	高嶋弘貴	4 位入賞	トーナメント方式	13 名出場
スノーボードパラレル大回転	星雄一	7 位入賞	76.23	13 名出場
スノーボードパラレル大回転	星奈々	4 位入賞	トーナメント方式	9 名出場
スノーボードパラレル大回転	手塚久野	8 位入賞	100.26	9 名出場
スノーボードパラレル回転	高嶋弘貴	7 位入賞	87.92	11 名出場
スノーボードパラレル回転	星雄一	8 位入賞	89.12	11 名出場
スノーボードパラレル回転	星奈々	6 位入賞	96.39	9 名出場
スノーボードパラレル回転	手塚久野	7 位入賞	96.98	9 名出場
スノーボードハーフパイプ	奥田和夫	5 位入賞	68.0	13 名出場
男子カーリング競技	荒谷淳一 山上勝美 米田義光 荒谷飛翔 中村鉄哉	5 位入賞		9 チーム出場

国別参加者数・メダル獲得ランキング

順位	国名	選手数		役員数	総数	金	銀	銅	計
		男	女						
1	ロシア	52	23	81	157	12	6	12	30
2	チェコ	6	2	12	20	6	1	0	7
3	アメリカ	24	4	17	49	3	3	2	8
4	イタリア	6	1	11	18	3	2	0	5
5	日本	16	6	28	50	3	1	1	5
6	スイス	8	0	11	20	1	3	0	4
7	フランス	3	0	4	7	1	1	3	5
8	中国	13	9	14	36	1	1	2	4
9	フィンランド	21	1	14	36	1	1	0	2
10	ウクライナ	10	10	19	39	0	5	3	8
11	オーストリア	4	3	9	16	0	4	5	9
12	カナダ	27	6	29	62	0	2	1	3
13	ノルウェー	2	1	8	11	0	1	0	1
14	スロベニア	0	1	5	6	0	0	1	1
14	ドイツ	5	0	7	13	0	0	1	1
16	エストニア	1	0	2	3	0	0	0	0
16	クロアチア	0	5	5	10	0	0	0	0
16	アルメニア	0	1	2	3	0	0	0	0
16	カザフスタン	20	0	5	24	0	0	0	0
16	スロバキア	2	5	6	13	0	0	0	0
16	スペイン	2	0	4	7	0	0	0	0
16	トルコ	5	0	7	13	0	0	0	0
16	ポーランド	3	1	7	11	0	0	0	0
16	パキスタン	1	0	5	7	0	0	0	0
16	韓国	7	7	29	43	0	0	0	0
16	モンゴル	1	0	3	4	0	0	0	0
16	ハンガリー	5	6	4	14	0	0	0	0
総数		244	92	348	684	31	31	31	

競技別成績

【アルペンスキー】

NO.	選手名	種目	出場 選手数	記録（タイム）			成 績
				1 本目	2 本目	合計タイム	
1	中村 晃大	滑降（男子）	26			1:22.05	16 位
		スーパー大回転（男子）	29			1:26.17	11 位
		複合（男子）	24			2:08.97	6 位
		大回転（男子）	37	1:10.29	1:09.79	2:20.08	6 位
		回転（男子）	35	35.29	40.12	1:15.41	4 位
2	北城 大地	スーパー大回転（男子）	29			1:30.12	23 位
		複合（男子）	24			2:12.32	9 位
		大回転（男子）	37	1:11.59	1:10.83	2:22.42	7 位
		回転（男子）	35				失格
3	小林 育実	大回転（女子）	13	1:23.99	1:19.87	2:43.86	8 位
		回転（女子）	13	44.52	49.88	1:34.40	6 位

【アルペンスノーボード】

NO.	選手名	種目	出場 選手数	記録（タイム）			成 績
				青（旗門）	赤（旗門）	合計タイム	
1	原田 上	パラレル大回転（男子）	13				1 位
		パラレル回転（男子）	11				1 位
2	高嶋 弘貴	パラレル大回転（男子）	13				4 位
		パラレル回転（男子）	11	46.55	41.37	87.92	7 位
3	星 雄一	パラレル大回転（男子）	13	39.54	36.69	76.23	7 位
		パラレル回転（男子）	11	42.83	46.29	89.12	8 位
4	手塚 久野	パラレル大回転（女子）	9	43.40	56.86	100.26	8 位
		パラレル回転（女子）	9	48.76	48.22	96.98	7 位
5	星 奈々	パラレル大回転（女子）	9				4 位
		パラレル回転（女子）	9	46.89	49.50	96.39	6 位

※1～4位はタイムなし

【スノーボードハーフパイプ】

NO.	選手名	種目	出場 選手数	記録（ポイント）			成 績
				1 回目	2 回目	ベストスコア	
1	奥田 和夫	ハーフパイプ男子	13	68,0	23,0	68,0	5 位
2	津久井 康友	ハーフパイプ男子	13	81,0	56,3	81,0	3 位
3	岡本 信彦	ハーフパイプ男子	13	58,3	42,3	58,3	9 位
4	森 仁秀	ハーフパイプ男子	13	55,0	38,7	55,0	10 位
5	花島 良子	ハーフパイプ女子	8	83,3	79,7	83,3	1 位
6	大川 摩耶子	ハーフパイプ女子	8	69,7	56,7	69,7	2 位

【クロスカントリースキー】

NO.	選手名	種目	出場 選手数	記録（タイム）				成 績
				クラシカル	ビット	フリー	合計タイム	
1	田崎 富士夫	10km+10km スキーアスロン男子	19	31:50.0	38.5	46:04.3	1:18:32.8	14 位
NO.	選手名	種目	出場 選手数	記録				成 績
				タイム				
1	田崎 富士夫	1.5km 個人スプリント 男子（フリー）	25	4:22.90				予選 19 位
2	戸津 勝由	1.5km 個人スプリント 男子（フリー）	25	4:34.09				予選 20 位
3	山本智美	1.5km 個人スプリント 女子（フリー）	15	5:30.53				予選 13 位
NO.	選手名	種目		記録				成 績
				1 周目	2 周目		合計タイム	
1	田崎 富士夫	15km マススタート （クラシカル） 男子	22	19:57.05	41:17.08		1:02:42.3	16 位
2	戸津 勝由	15km マススタート （クラシカル） 男子	22	21:26.0	43:51.0		1:07:32.6	20 位
3	山本智美	10km マススタート （クラシカル） 女子	14	24:29.8			50:43.8	13 位
NO.	選手名	種目		記録				成 績
				1 周目	2 周目	3 周目	結果	
1	田崎 富士夫	2 × 1.5km(クラシカル) チームスプリント 男子	6	5:36.4	16:33.4	27:31.7	32:52.0	6 位
	戸津 勝由			10:35.5	21:43.4	32:52.0		

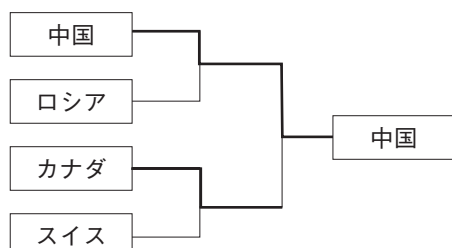
【カーリング】

	カナダ	ハンガリー	日本	スイス	ウクライナ	ロシア	アメリカ	中国	韓国	結果	順位
カナダ		6－2	8－0	10－2	8－2	6－8	7－2	4－5	9－3	6勝2敗	2
ハンガリー	2－6		6－7	6－9	10－7	4－8	5－10	3－8	8－9	1勝7敗	9
日本	0－8	7－6		9－10	6－7	9－8	6－4	5－6	6－1	4勝4敗	5
スイス	2－10	9－6	10－9		9－3	8－5	9－4	8－9	8－7	6勝2敗	3
ウクライナ	2－8	7－10	7－6	3－9		3－7	7－5	2－7	9－5	3勝5敗	6
ロシア	8－6	8－4	8－9	5－8	7－3		10－5	8－10	5－9	4勝4敗	4
アメリカ	2－7	10－5	4－6	4－9	5－7	5－10		6－7	13－5	2勝6敗	7
中国	5－4	8－3	6－5	9－8	7－2	10－8	7－6		5－4	8勝	1
韓国	3－9	9－8	1－6	7－8	5－9	9－5	5－13	4－5		2勝6敗	8

※上位 4 チームが準決勝進出

※プレーオフ：日本 6－7 ロシア ロシアが準決勝進出

【決勝トーナメント】



【最終結果】

1	中国	5	日本
2	カナダ	6	ウクライナ
3	ロシア	7	アメリカ
4	スイス	8	韓国

報告

①はじめに

第18回冬季デフリンピック競技大会（ハンティ・マンシースク、マグニトゴルスク）は、3月28日から4月5日まで、ロシア連邦で9日間にわたって5競技の熱戦が繰り広げられました。1949年にオーストリアで第1回として開催してから今回で18回目を迎える、障害者の国際的な冬季スポーツとして歴史的に一番古い大会であり、ろう者の手によって運営される最高峰の大会です。今回は27ヶ国から336名の選手が参加し過去最大の規模となり、日本からは選手団48名（選手22名、団長、総監督、コーチ、医療関係者、手話通訳者などのスタッフ26名）が参加しました。

秋篠宮同妃両殿下、佳子内親王殿下の御接見や記者会見の際には、今までの成績を超えたメダル5個以上を獲得する目標を達成したいと日本選手団としての抱負を述べ、強豪な選手が揃うヨーロッパ勢へ挑みました。

②大会開催・運営について

2013年7月に国際ろう者スポーツ委員会(ICSD)の役員選挙が行われ役員体制がほぼ一新しました。新しく会長に就任したロシアのワレーリイ・ルフレジェフ氏が、限られた時間の中でロシア政府などの関係団体へ積極的に働きかけ、強力な支援を得て第18回冬季デフリンピック競技大会の自国開催にこぎつけたことに対して敬意を表したいと思います。開催地はモスクワよりかなり離れており、移動などの問題がありましたが、国際大会を行うには十分な設備の競技場があり、ホテルから各競技会場への輸送体制も確立されていました。会場がハンティ・マンシースクとマグニトゴルスクに分散していたので、日本選手団本部も2つ作り、何があっても対応できる体制を整えました。ハンティ・マンシースクでは選手の負担を減らすために運転手付きのレンタカーを手配し、選手、スタッフを競技場への送迎や、日本語の堪能なロシア人に選手団のサポートをしてもらったことが大いに役に立ちました。

今回の冬季デフリンピック競技大会はソチの冬季オリンピック・パラリンピックの開催運営を生かしているかのように競技場の周辺整備が十分に整えられ、特にセキュリティが厳しくホテルや各競技会場の出入口に置かれている金属探知器やX線検査装置による手荷物検査が徹底されていました。また、競技エリアと観客エリアは明確に区別され、競技の安全性を維持できる状態でした。開催地の政府関係や行政などからの全面的な協力を得て大会を運営でき

たことが開催成功につながったと言えます。

③現地の本部設置、運営について

日本選手団の本部設置については、2014年12月に下見の派遣で確認したホテルを第一立候補としてお願いしましたが、組織委員会から各国の選手数によってホテルが割りあてられると説明を受け、結局は全各国チームが組織委員会が決定したホテルに決定しました。しかしながら本部や選手の部屋は組織委員会の手違いで予約の取れてはならずホテルの担当に粘り強く交渉しましたが、現地本部の部屋はツイン部屋を利用する事になりました。前述のように、競技会場が分散していたので、アルペンスキーチームは競技場の環境に慣れるためにモスクワから直接競技会場のあるマグニトゴルスクに向かい、本部も設けました。現地本部から選手、スタッフへの連絡体制を確立するために、第22回夏季デフリンピック競技大会の経験を生かして報告、連絡、相談という「ほうれんそう運動」を徹底し、ホワイトボードなど活用して情報提供および情報共有に努めました。現地本部の部屋は11階建ての8階であり、他の日本選手、スタッフ、医療関係などの部屋と同じフロアであったため、選手の生活安全管理や連絡利便などの面で良い環境でした。また、帯同の医者1人が第22回夏季デフリンピック競技大会でも滞同している経験から、聴覚障害者に対する理解があり、手話通訳などの手段に慣れており、医療業務がスムーズにできました。今後の大会にも派遣スタッフとして連続して引き受けて下さればと思います。

広報体制は、それぞれの会場にカメラマンを1人ずつ配置し、写真データを本部に送り、日本代表団公式サイトおよびFacebookで日本に対して選手たちの活躍の情報を発信できるように取り組みました。

④各競技の成績について

熱戦の結果、メダル獲得数は金3個、銀1個、銅1個、計5個となり、8年前の前大会より1個超となり、念願の目標(メダル獲得数5個以上)を達成でき、国別メダルランキング順位は5位となりました。

競技別では、スノーボードで5個となっています。特に、原田選手が大会3連覇の金メダルを獲得したことは世界を驚かせました。花島選手が女子ハーフパイプ競技に臨み、80点を超える得点で金メダルを獲得、他の選手も2位、3位に食い込み、日本勢が上位を占めていました。アルペンスキーの男子回転は、僅かに0.18秒の差で惜しくも銅メダルを逃す接戦を成し遂げるほど、世界のトップレベルに肉薄しており他の選手も全員が入賞しました。クロスカントリースキー競技は、競技が盛んなヨーロッパ

勢と体格の違いもあり世界の壁が厚く入賞すら厳しい状況でしたが、あきらめず完走できました。初出場である男子カーリングは、初戦から5連勝が続き、メダルに手が届きそうになりましたが、規則違反により5勝目を取り消されてしまいました。その後決勝トーナメントの進出を目指すロシアとのプレーオフで惜しくも敗戦し、5位に入賞しました。その失敗をバネにし、次回大会へ向けてさらに飛躍していることを確信しています。

また大会期間中に在ロシア日本国大使館の牧野領事部長をはじめ、2人の駐在職員が応援に駆けつけてくださいました。

メダル獲得の世界勢をみますと、強豪ロシアがトップとなり、2位はチェコ、3位はアメリカ、4位はイタリア、5位は日本で、アジア勢では日本がトップであり、世界各国から大きな評価を得ています。今後も国際大会などに選手やスタッフを積極的に派遣し、その技量を高めていくことが重要です。

次回大会の開催国はいくつかの国が立候補しています。日本からはICSDに対してスポーツアスリートとしての最高な競技環境を提供すべきという基本的な方針に沿って開催国を決めてほしいと積極的に働きかけていきます。今後とも聴覚障害者スポーツへのご支援とご理解をお願いいたします。

最後に代表選手団をご支援くださった宮内庁をはじめ、外務省、文部科学省、厚生労働省、日本障がい者スポーツ協会パラリンピック委員会、企業、デフリンピック応援プロジェクトチーム、手話関係団体、全国の加盟団体に心から深く感謝申し上げます。

総監督 栗野 達人

①目的

2007年アメリカ・ソルトレイクで開催された第16回冬季デフリンピック競技大会の日本選手団メダル獲得数を超える成績をあげることを目的としました。

②選手選考と目標

下記の日本選手団の編成にかかる指針による選手候補の基準を条件として一般社団法人日本ろう者スキー協会各競技チームからの推薦をもとに、全日本ろうあ連盟デフリンピック派遣委員会にて、過去の実績を重視しつつ、将来の展望もあわせて、22名の選手を選考しました。

★代表選手推薦の手順

- ・2014年3月 各競技団体より推薦選手リスト提出

- ・2014年5月 全日本ろうあ連盟スポーツ委員会にて代表候補選手決定
- ・2014年11月 全日本ろうあ連盟デフリンピック派遣委員会にて代表選手決定
- ・2015年1月 最終エントリー

★代表選手推薦基準について

参考資料「日本選手団の編成にかかる指針」にて基準を定めました。

★メダル数目標

現地入りする前に日本選手団として目標を下記の通り定め、大会に挑みました。

『前回の第16回冬季デフリンピック（ソルトレイク）のメダル金3個・銅1個の成績を超える金3個、銀1個、銅1個と合計5個以上のメダル獲得』

③競技成績一覧

各競技成績詳細は成績一覧参照。

日本が獲得したメダルは金3銀1銅1計5個で過去最高獲得数となり目標を達成しました。
(メダル獲得ランキングは27か国中5位)

④成績と評価

詳細は各競技チーム監督報告参照。

8年前の前大会と比較してみても全体的に成績が上がりました。日本獲得メダル数は、過去最高になり、大いに評価できます。

男子カーリング競技は初出場で初戦から5連勝続きと好調でしたが、規則違反で5勝目を取消され5位となりました。非常に悔しい思いをしましたが、規則違反について日本選手団で徹底的な確認と指導が足りなかったと反省しています。

冬季デフリンピック競技大会の中で一番歴史が長く一番ハイレベルで難しいと言われたアルペンスキー競技も日本選手が技術が向上し、特に回転種目では日本選手がメダルまでわずか0.18秒差でメダルをのがしたものの、全員が入賞する好成績を残しました。

クロスカントリースキー競技では、惜しくも入賞できなかったのですが、特に強豪国と言われているロシアの地で、最後まで諦めず日本の粘り強い根気を見せました。

⑤チーム体制と各スタッフの役割

大杉総務と共に5競技チーム、総務チーム、医療チームを指揮下に置き円滑な組織運営を心がけました。

◆総監督：栗野 達人

競技試合・練習に関する範囲

◆総務：大杉 豊

移動・ホテル・生活等、競技以外の派遣団運営に関する範囲

◆各競技監督

アルペンスキー	田中 照也
アルペンスノボ	土師 比佐夫
ハーフパイプ	南雲 利仁
クロスカントリー	若井 陽介
カーリング	米田 義光

◆医療チーム

医 師	立石 智彦
医 師	清水 雅樹
看護師	會田 人美

◆総務チーム

広 報	岸田 修
広 報	狩野 功
事務局員（総務）	後藤 啓二
事務局員（露語通訳）	日向寺康雄
手話通訳	梅本 悦子
手話通訳	茂木 郁実
事務局員（宿泊・輸送）	林 孝雄
事務局員（宿泊・輸送）	白坂 篤志
事務局員（宿泊・輸送）	内田 美春
事務局員（宿泊・輸送）	瀬戸 博美

⑥競技スケジュール

詳細は各競技チーム監督報告を参照してください。

今回は競技会場がハンティ・マンシースクとマグニトゴルスクの2か所に分散していました。

マグニトゴルスクで競技が行われるアルペンスキーチームだけは大会バーンで練習が必要な為、ハンティ・マンシースクへは寄らず、マグニトゴルスクへ直行しました。

◆ハンティ・マンシースク（3月25日～3月29日）

- 【3月24日】日本選手団結団式・成田空港出発
- 【3月25日】本部設置、IDカード手続き
- 【3月26日】本部打ち合わせ・大会会場下見
- 【3月27日】公開練習・大会会場下見
- 【3月28日】公開練習・開会式
- 【3月29日】朝早くマグニトゴルスクへ出発

◆マグニトゴルスク（3月29日～4月3日）

- 【3月29日】地元歓迎セレモニー・本部打ち合わせ
- 【3月30日】公開練習・大会会場下見
- 【3月31日】公開練習・大会会場下見
- 【4月3日】ハンティ・マンシースクへ出発

◆ハンティ・マンシースク（4月3日～4月6日）

- 【4月3日】夜にホテル着

【4月5日】閉会式

【4月6日】モスクワで解団式

【4月7日】成田空港へ帰国・取材対応

⑦大会の競技運営などの報告

ハンティ・マンシースクではホテルの部屋の予約が間違っていたり、公開練習日の一部がなくなっている等のトラブルもありましたが、総務チームの対応で無事に進められました。特に競技会場で行われる公開練習が大事なため、毎朝、公開練習の時間と場所に変更あったりしないか、非常に神経を使いました。

大会前までは準備不足や組織委員会と現地スタッフの間でのコミュニケーション不足など見られましたが、競技が始まると環境が整えられ過去の冬季デフリンピックと比較しても最高のレベルとなりました。

マグニトゴルスクでは、アルペンスキー会場が素晴らしく、宿泊所の選手村、現地のボランティアなど、オリンピック並の環境になっていました。ただ、ハンティ・マンシースクからマグニトゴルスクへ移動する際に、他国選手のスキー板が届かず、試合開始が2日ほど遅れるというハプニングが発生しました。

各競技チームの練習中に怪我が発生したと連絡を受けた時は、本部医療チームの医師が治療し、怪我の状況により出場可能かも判断をしてもらいました。そのおかげで全選手達が体調万全で挑める環境となったと思います。

日本への情報発信の為に、毎日各競技監督と連絡を取り合いながら、現地で各競技の記録を確認し、大杉総務とも常に連絡をとりあって情報収集に尽くしました。

⑧競技規則の適用（問題点など）

詳細は各競技チーム監督報告を参照してください。

冬季デフリンピック競技大会はFIS（国際スキー連盟）規則に基づいて運営されますが、各競技の出場人数、競技レベルなどの事情でTD会議にて競技ルールがわずかに変更された事もありました。

日本は最初からFIS規則に基づく事を前提とし、各競技監督達にもFIS規則で日本代表選手達の育成に尽力いただいております、問題なく適応できていました。

⑨大会参加までの準備状況

8年前の第16回冬季デフリンピック競技大会が終わってから、この8年間、各競技チームの強化に関わって指導し、選手達の声を聞いて、今回の第18回冬季デフリンピック競技大会に向けた準備と対策に尽くしました。

4年前の第17回冬季デフリンピック競技大会が
間際で中止となったため、選手の中にはモチベ
ーションが下がり選手活動を止めるという人も多
くいました。その上、2014年2月の全国ろうあ
者冬季体育大会も豪雪で競技中止になってしま
い、日本選手達の悔しさは大変なものであった
と思います。4年前、日本選手団総監督だった
私はスロバキア大会現地で中止宣言を聞き、
大きなショックを受けました。悔し涙を流し
た選手達の顔を忘れられず、何とか無念を晴
らしてあげることはできないかと考えていま
した。

今回は2014年12月12日～20日に現地の
下見を行い、ロシア組織委員会に確実に開催
されるかどうかを何度も確認しました。ソチ
冬季オリンピックを去年行ったばかりであ
り問題ないとの回答を得て、安心して準備を
進めました。

また、在ロシア日本国大使館とも連絡をとり、
万が一の事態に備えることにしました。しか
しウクライナ情勢悪化による不安もあり、選
手たちは『本当に開催されるのか』と不安を
かかえながら現地入りしました。結果とし
て無事に開催され、盛大に終わる事が出来
ました。今回の冬季デフリンピック競技大
会開催を引き受けてくださったロシアろう
者スポーツ委員会に大変感謝しております。

さて、大会に向けた具体的な準備としては、
2014年に日本代表团総監督の任命を受けて
から、本格的に各競技チームとの連帯と強化
などに尽くしました。

まず日本代表团ユニフォームについて前
回の反省点などを全選手達から聞いた上で、
よりよいユニフォームで日本代表团らしい
物にしたいと考えました。今回の競技会場
が極寒地帯で最高マイナス30度と情報があ
ったので、耐寒性のあるウェアを選び、選
手とスタッフが暖かく着られる様にしまし
た。日本パラリンピック委員会の協力でオ
リンピックロゴの「JAPAN」入りのユニフ
ォームが出来上がり、日本選手団全員に配
布しました。またデフリンピック啓発と資
金作りの一つとして日本選手団ピンバッ
ジとハンドタオル各1000部を皆さんのご
協力のおかげで完売することができ、派遣
資金に充てる事が出来ました。



ハンドタオル



ピンバッジ

また日本パラリンピック委員会を通して文部科学

省からの助成で、各競技チームを集めて研修会を
下記の内容で実施しました。

- ・「ロシアの生活文化と手話」資料
- ・ロシア手話テキスト
- ・下見の報告資料
- ・渡航にあたっての注意（旅行会社）
- ・派遣期間中、選手・スタッフが毎日チェックする
セルフメディカルチェックおよび予防手段（医師）
- ・ドーピングコントロール（医師）
- ・プロテスト（抗議）の手順（事務局）
- ・選手団SNSガイドライン（事務局）

大会前に各競技チームにコンディショニング等、
指導をおこないました。

⑩反省・まとめなど

今大会期間中、毎日、各競技チームおよび監督達
とメールおよび手話通訳を通して電話で連絡を取り
合いましたが、時々電波障害で不通になり皆さんに
負担をかけてしまいました。それでも太田団長、大
杉総務、総務チームと医療チームそして各競技チ
ームと共に協力しあいながら進める事ができ大いに助
かりました。

冬季デフリンピック競技大会は国際ろう者スポ
ーツ委員会と加盟国の努力で開催されています。そ
のため大会運営や競技試合運営に対して加盟国から
意見・要望などが積極的に出されています。我が国
の選手団も以前と比べても積極的に国際手話などで
コミュニケーション取り、現地対応、競技運営に対
して抗議、意見を出せる様になり大いに成長してい
ると思います。

3大会連続して日本選手団総監督を担当した経験
から今回の日本選手団本部および各競技チーム体制
は、どの国よりもすばらしく、世界でトップレベル
になっていると思われます。日本選手団本部および
各競技チームスタッフのほとんどがデフリンピック
・アジア太平洋ろう者競技大会・オリンピック・
パラリンピックなど大会経験者なので現地で何か問
題発生しても即対応出来る力量を持っていました。

医療チームも最近の夏季デフリンピック、アジア
太平洋ろう者競技大会でお世話になった医師だった
ので、選手達の様子把握、コミュニケーションもス
ムーズに出来、日本選手達も安心して競技に挑める
事が出来ました。

また、広報は夏季デフリンピックを経験したプロ
並みのカメラマンを入れました。迫力ある写真を使
って速報ニュースにて発表し、デフリンピックの
知名度向上だけでなく、選手のモチベーション向上
にもつなげました。

日本選手団において今回特筆すべきことは、各競

技チームのチューンナップおよびスキー板とスノー板とブーツの修理がすぐに出来る体制ができていたことです。デフリンピックの最後の競技種目であったアルペンスキー回転競技で、競技スタート地点で、選手がスタートするギリギリの時間まで丹念にスタートワックスを塗りこみ、エッジ調整などをやっていたのは日本チームだけでした。だからこそ日本選手のタイムも大きく伸びたのだと思います。チューンナップ技術も8年前と比べて大きく進歩しています。最新技術も常に取り入れた体制にしないと世界には勝てません。今後の派遣には専門サービスマンを入れるべきですし検討していきたいと思います。今回は各競技チームも今までで最高のチームサポート体制を取っていたので、ここまで成果を出した事を大いに評価して頂けると自信を持って言えます。

今大会では4年間の無念を晴らして過去最大のメダル数を獲得出来たので、最後には日本選手団全員でうれし泣きしました。選手達の笑顔を取り戻してあげたいという気持ちで一杯だったので、最後にやっと選手達および皆さんの笑顔を見れて本当にうれしく、努力してきたがいがあったと非常に感動し、今回の大会に対して深い感銘を感じました。

ここまで頑張れたのは宮内庁をはじめ、外務省、文部科学省、厚生労働省、日本障がい者スポーツ協会パラリンピック委員会、企業、デフリンピック応援プロジェクトチーム、手話関係団体、全国の加盟団体から色々のご支援を頂いたおかげであり深く感謝しております。本当にありがとうございました。

総務 大杉 豊

はじめに

2009年の台北夏季デフリンピック競技大会日本選手団派遣報告書の総務報告では、「スポーツ活動を通したろう者のエンパワメント」というテーマを設定して、他の団員とともに日本選手団の運営にあたったことを報告しています。その後個人的な事情による6年間のブランクを経て再び総務として日本選手団の運営に関わる機会をいただけたことに対し、この場を借りてみなさんに心よりお礼の気持ちを申し上げます。

今回も与えられた総務の基本的な役割を「日本選手団の組織全体に関する事務を取り扱う中で、縦の指示系統と横の連携関係を円滑につなぎ、より生産的なものにすること」と認識するとともに、国際情勢や現地事情を踏まえたりリスク管理も意識して業務にあたりました。以下、時系列に特記事項を記述し

ます。

出発前

- ・開催国ロシアに関わる国際情勢が良好とは言えない状況にあったため、外務省欧州局に情報の提供を依頼する一方、モスクワの放送局に勤務する日向寺氏からも情報の提供を受けて、最悪派遣でなくなる状況も想定して、準備を進めました。
- ・怪我をした時や体調を崩した時は必ず本部に報告を入れることを選手団全員に指示しました。

出発時（3月24日）

- ・出発直前に体調を崩した選手への対応。成田空港で帯同医師が診察、伝染性のない罹患であったため大事に至りませんでした。伝染性が認められた時は、出発見合わせ、機内隔離などの対応が必要になります。念のためにマスクを全員分用意しましたが、着用するには至りませんでした。出発直前に罹患したらすぐに病院で診察を受けるよう、選手への指導が必要です。

現地入り（3月25日）

- ・ホテルのチェックイン時に、日本から組織委員会に出したリクエストと違う内容で予約されていることが判明、組織委員会とホテルそれぞれの言い分が違うこともあり、部屋の確保に難航。予定していた部屋数を確保できないことが分かったため、シングル部屋を予定していた本部スタッフは全員をツイン部屋に変更。選手・競技スタッフの一部もツイン部屋に変更しましたが、競技の異なる人が一緒になるとか、手話が出来ないきこえる人ときこえない人が一緒になってコミュニケーションに困るなど問題が発生しました。さらに後日マグニトゴルスクから移動してくる選手・競技スタッフの部屋がない状況であることが緊急に解決すべき課題となりました。
- ・アクレセーターでアクレカードの受け取り、参加費、年会費、メディア登録料などの請求書と領収証、振込手続き書の準備がなかったために、団員を廊下で2時間ほど待たせる結果となりました。選手の疲労を考えると、アクレカードを受け取る時間が分かった時点で改めて集合をかけるなどの判断が必要でした。なお、アクレカード発行手続きはICSD事務局になるので、ICSD正会員の全日本ろうあ連盟スポーツ委員会が事前に連絡したメールや送金手続き書類など全てを持参して、アクレセーターですぐに開示できる準備が必要です。
- ・ホテル部屋に日本選手団の本部を設置。長時間の移動で疲れているスタッフが多く、本部設置に時間がかかりました。部屋のレイアウト、電源の確保、スケジュールの貼り出しを最優先しました。
- ・本部ミーティング18:00～。

3月26日

- ・日本選手団専用車の運用開始。運転手を含めて18名定員。
- ・団長、総監督、事務局員が競技会場をすべて回って各競技の準備状況を確認する。同時に各競技チームの練習時間と場所の確保を支援する。総務は本部待機。
- ・本部ミーティング20：00～。

3月27日

- ・太田団長がICSD総会に出席。
- ・クロスカントリースキーチームからTD会議への国際手話通訳協力の依頼があり、今後は各競技チームで対応できるようにすることを指導した上で、国際手話の可能な事務局員を派遣しました。
- ・チームリーダー会議があることの情報が本部に伝わっていませんでした。ハンティ・マンシースクの組織委員会で用意された日本チーム付きのボランティアが情報を伝えてこなかったのが原因でした。現地に着いてすぐに組織委員会との連絡体制の確認をしておくことが重要です。ICSDと組織委員会側では、Webサイトの更新が出来ていないなどの課題がありました。
- ・栗野総監督から各チームに競技での抗議の手順を説明。これは出発前に各競技チームで確認しておくべき内容です。ほかにもソーシャルメディア方針なども各チームで確認ができていませんでした。
- ・本部ミーティング20：00～。

3月28日

- ・二人の広報担当（カメラマン）から競技終了後に届く写真を翌朝選定し、テキストを作成してFacebookにアップしました。
- ・朝食時間帯に本部及び各競技チームの一日の予定を再確認し、日本選手団専用車の運行スケジュールを立てて、スケッチブックに英語で書いたものをロシア語通訳者に渡し、ロシア語通訳者が専用車に必ず同乗してロシア人の運転手とのコミュニケーションを図る方法としました。
- ・組織委員会が用意した日本語の話せるボランティアのアイダン・クバーチェワさんと役割分担について打合せ、組織委員会からの連絡はロシア語通訳者2名両方に電話で伝えることを確認しました。
- ・本部ミーティング20：00～。

3月29日

- ・本部3名がマグニトゴルスクへ出発。飛行機の席数が不足している情報があったが、3人は無事に直行便で出発できました。
- ・スノーボードチームで練習中に板が損傷した件は、ロシア語通訳者をスノーボードチームにつけて対応、ICSD技術委員と大会競技委員が公式練

習での設備点検不足による過失を認め、すぐに修理対応してくれました。

- ・28日に日本選手団を激励してくださった在ロシア日本国大使館の牧野秀樹領事とシュリコヴァ・タチアナ通訳とともにクロスカントリースキー競技試合とカーリング競技試合を応援してくださいました。
- ・ミーティングを15：00に開催。一日前半の動きを確認して後半の予定を調整できる面でこの時刻での開催は有効でした。
- ・インターネット通信環境は問題なく写真や動画の送受信もうまく行えました。これは今回、本部としてレンタルしたWifiルータ10台の内2台を大容量500MB/日、他8台は134MB/日としたためです。通信速度は基本3G高速通信だが、場所によっては2Gとなることもありました。Facebook用の写真は1枚1～3MB、動画は1分半で58MB。
- ・本部ミーティング15：00～。

3月30日

- ・選手2名が聴力検査の呼び出しを受けました。担当者からの連絡が本部に直接来なかった理由を調べたところ、各国選手団向けのメールボックスが出来ていることが判明しました。この情報が各国に伝えられていないことも分かり、以降定期的にチェックすることを本部全員に指示しました。
- ・日本選手団はアルペンスノーボードチームとハーフパイプチームに分かれています。ICSD側では二つをあわせて一つの競技と認識しているために、情報のやり取りに支障が出ています。今後各大会での競技区分に対応できる競技チーム編成が必要です。
- ・金メダルの原田選手に対してアンチドーピング検査ありました。付き添いは一人まで認められるため、日本選手団帯同医師の付き添いが認められました。
- ・原田選手の競技用靴が破損した件で、ロシア語通訳者が対応しました。
- ・写真ニュースの形で発信するFacebookが日本選手団の日本向け広報で大きな力を発揮しました。日本の報道機関にこのFacebookがあることを知らせよう、事務局員に指示しました。
- ・メダル受賞があったため、ウェブページへのメダル数の掲示やカバー写真の差し替えをウェブサイト管理者に指示しました。
- ・本部ミーティング17：00～17：30。

3月31日

- ・Facebook発信について事務局員に申し送った事項
▷全体的なテーマ

- ◇ チーム内外のサポート（チームワーク・組織）の重要さを伝える。
- ◇ 輝きを見せている選手とチームはタイミングを計らってインパクトの強い写真を出す。
- ◇ 練習で滑る時の写真は掲載しない。あとで試合時の写真とごちゃごちゃにならないように。
- ▷カメラマンとのコミュニケーション
 - ◇ 競技全体の状況を見ながらカメラマンに掲載したい内容を伝えるなどコミュニケーションを取る。
 - ◇ 重いバッグを背負っての移動になるので。車の手配などきちんと考える。
- ▷メダルを取った選手・チームには必ずインタビューをして掲載する。その時は監督にも伝える。
- ▷メダル数のカウントがあった時はウェブサイト管理者に伝える。
- ▷カバー写真に掲載したらよい写真があったら、そのFacebookのURLと見出しをウェブサイト管理者に伝える。
- ・日本選手団専用車の運行スケジュール作成についてについて事務局員に申し送った事項
 - ▷作成方法
 - ◇ 9：00～17：00の時間内で考える。時間延長は認めない。
 - ◇ まずは団長、総監督、ドクター、広報の移動にあわせて予定を作成する。
 - ◇ 次に各競技の担当者とコミュニケーションを取って細かい調整をする。
 - ▷各競技
 - ◇ カーリング：午前と夜二試合ある時にホテルで休憩を取る場合の送迎。
 - ◇ スノーボード：予選と決勝時に車を会場に待機させる。（事故発生に備える）
 - ◇ クロスカントリースキー：とくになし。
 - ◇ アルペンスキー：合流後確認すること。
 - ▷同乗者
 - ◇ ロシア語通訳者を必ず助手席に乗せること。
- ・総務の役割について事務局員に申し送った事項
 - ▷何か問題が発生した時は、役割分担を確認した上でしかるべき担当から指示を出すようにすること。
- ・ドーピング検査実施証明書については、連盟スポーツ委員会に医科学委員会がないので、選手本人に最低6週間の保管をお願いする。
- ・14：45 競技会場にいた帯同医師より電話連絡あり。公開練習で岡本選手が足を負傷、救急車で病院に向かったとのこと。本部緊急ミーティング

で状況把握を行う。病院の場所、動けるスタッフの確認後待機。

- ・15：23 病院に付き添った帯同医師より電話あり、選手のメディカルシートをロシア語通訳者に持たせ、手話通訳者と一緒に本部の車で病院に行かせる。
- ・15：40帯同医師よりの連絡で、レントゲンの結果骨に異常はなしで入院の必要はないとのこと。
- ・16：10 ホテル帰着、本部を通常体制に戻す。
- ・本部ミーティング 17：00～17：20。
 - ▷怪我発生時の動き方の確認
 - ▷原田選手の競技靴に関する対応の確認
 - ▷ホテル部屋問題の進捗状況

4月1日

- ・原田選手の競技靴の修理完了。
- ・ホテルの問題は未解決、夕方に大会組織委員会会長と交渉するもうまく折り合わず、近くにある他のホテルに部屋の予約を入れる方向を確認しました。
- ・ボランティアなど協力してくれる現地の方々には日本土産のチョコレート菓子KitKatが好評でした。
- ・本部ミーティング 17：30～18：00。
 - ▷医療チームより、日本選手団専用車は必要に応じて選手運送を優先させてほしいとの要望あり。競技終了時間と大会運行バスの時間が合わない場合に限って選手運送を優先させることを確認。
- ・今回ロシア語通訳者が2名いることで大変助かっています。一人は会議通訳レベルで医療・ドーピング検査・込み入った内容の協議に対応、もう一人は日常会話通訳レベルで、選手団専用車への同乗や簡潔な用事に対応しました。
- ・日本選手団広報担当が撮影する写真の著作権と、所属協会や職場などの広報での使用に関する方針を選手団全員に説明しました。

4月2日

- ・医療チームの要望を受けて、日本選手団専用車の運転手と交渉、昼に休憩時間を入れることで、夜間に必要な時があれば来てくれることを確認しました。
- ・団長より、日本のカーリングチームに関してカナダからICSDに抗議が出されたことの報告がありました。内容は選手が競技場で補聴器を装着していたというもので、カーリングチーム監督に、選手が試合前の公式練習中に補聴器を装着しており、TDに注意を受けてはしなかったことを確認しました。規則ではTDから注意を受けた時点で試合は没収となり0－8となることが定められています。カーリングチームはこの規則を読んでいませんでした。選手とチームに競技会場で補聴器装着

が認められないことを何度でも周知して行く努力が必要と思われます。

- ・ホテル部屋の問題が解決し、マグニトゴルスク組の部屋が確保されました。

4月3日

- ・個人的な事情で選手団を離れ先に帰国の途につきました。
- ・残る日程については、総務の実務的な部分を事務局員が引き継ぎ、指示的な部分は団長が受け持つ方法で進められました。

おわりに

縦の指示系統と横の連携関係を円滑につなぎ、より生産的なものにするという総務の役割を無事に果たすことが出来たのは、決して私ひとりの力ではありません。それぞれの立場で経験値にもとづいた意見を出すスタッフ一人ひとりとコミュニケーションを丁寧に図ることが出来たことが大きな理由であり、だからこそ生きた情報を持って日本選手団内を縦横無尽に動き回ることが出来ました。各競技チームをまとめるろう者のリーダーが育ってきたことも、日本選手団全体のレベルアップにつながっており、選手がベストのコンディションで競技試合に臨むことが出来たように思います。「スポーツ活動を通したろう者のエンパワメント」の重要性をあらためて認識する大会であったことを強調して、本報告を終えます。

医師 立石 智彦

2013年の夏季大会に続く2回目のデフリンピック帯同でした。サポートさせていただいた感謝の辞を述べさせていただきます。本部ドクターは2名で立石智彦・清水雅樹、看護師の曾田人美で担当させていただきました。今回はハンティ・マンシースクとマグニトゴルスクに場所が分かれるということもあって整形外科2名で帯同、立石はハンティ・マンシースクを担当しました。トレーナー帯同はありませんでした。

【大会前準備】

11月にメディカルチェックのアンケート・診断書に目を通して、ドーピングコントロールについては国際医療福祉大学三田病院の草野修輔先生にもお手伝いいただきました。AED(自動体外式除細動器)を2台(各会場)レンタルし現地へ持って行かせていただきました。幸い用いるような事案はなかったので良かったです。2月中旬からメディカルのメー

リングリストも作成し、準備状況や現地情報について共有しながら準備を進めました。携帯薬の準備に関してはスポーツファーマシストの早瀬久美氏にお手伝いいただきましたので清水先生から報告していただきます。現地情報は外務省・厚生労働省のホームページからと、在ロシア日本国大使館医務官の宮村和夫先生にご連絡させていただき、「インフルエンザの発生状況、乾燥に対する予防情報、後方病院の確保状況などたくさんの情報をいただきました。また、現地に入った時にも直接お電話いただき“何かあれば携帯電話で連絡ください”とサポートしていただき本当に心強く思いました。

【移動】

出国前日に感冒の選手がおり出発の朝成田で空港内クリニックにて受診しましたが、感冒の診断のみで全員で無事出国できました。行き帰りともにモスクワでのトランジットがあり、片道20時間を越える移動になりました。帰りはモスクワで8時間くらいの待ち時間でホテルの貸室を取っていただき解団式をしながら食事もとれたことは体調管理上よかったです。時差は4時間であったために、特にコンディショニング的には大きな問題にはならなかったと思います。

【ロシア入国後】

ホテルは食事もバイキング形式でした。極寒の地域で冬であり生野菜などがあるか心配されましたが、しっかりと用意していただいております。やや単調な食事ではありましたが、シベリアの環境ではかなり良い食事を出していただいております。

入国の日は-21℃であり、寒冷環境でどうなるかと思いましたが大会が進むにしたがって気温は上がり0℃越えの日もありました。ただ湿度が低く湿潤環境に慣れた日本人にとっては、のどを痛める選手・スタッフも見られました。(簡易の加湿器などをもっと積極的に持ってくるように話しておけばよかったのかもしれません)

【大会期間中】

スノーボードハーフパイプで前日練習中に着地で足関節捻挫を起こした選手がでて、救急搬送されました。幸い練習場に帯同ドクターが待機してたので、バックボードでの搬送～救急車に乗って病院対応できました。現地メディカルスタッフの方も非常に搬送もスムーズで、病院でも約1時間弱でレントゲン・診察も終わることができました。

優勝選手・チームのみでしたが、ドーピングコントロールが行われ原田選手が対象となりました。検

査会場（アイスホッケー場）へ実行委員会の車で搬送していただきましたが、金メダル3個だったので3回付き添い、滞りなく終わりました。

【大会を終えて】

帰国後、3名がB型インフルエンザを発症したことがわかり、潜伏期間を考えると閉会式前後での感染が疑われました。予防注射の励行・検査キット・治療薬も準備はしていましたが、大会期間中に発症・蔓延せずに良かったと本当に思いました。

8年ぶりの冬季デフリンピックでしたが、今後反省点を検討しながら、経験を蓄積し継続してメディカルサポートができるようなサポートが必要と感じました。

医師 清水 雅樹

本稿では医療品事前準備およびマグニトゴルスクにおける活動の報告をさせていただきます。メディカルチーム総括およびハンティ・マンシースクにおける活動に関しては、立石医師の報告を参照いただければ幸いです。

【医療品準備】

薬剤師の早瀬氏に協力を依頼し、出発5週間前より物品準備を開始しました。医療品の内容については、第22回夏季デフリンピック競技大会において携行した医療品の内容をベースとしましたが、冬季大会であることを考慮し、①インフルエンザ対策（抗インフルエンザウィルス薬、インフルエンザ検査キット）②凍傷対策（ワセリン、ヒルトイド軟膏）の2点については医薬品の増量・追加を行いました。また、AEDに関してはフクダ電子東京販売株式会社様の協力の下、2台をレンタルして遠征に臨むことが出来ました。今回は2ヶ所の分散開催という特殊な開催形態であったため、出発前の時点で医薬品は2つにわけてパッキングをして頂きましたが、そのおかげで遠征期間における医薬品の管理が簡便かつスムーズに行うことができ、メディカルチームとしてはストレスなく医療活動を行うことが出来ました。前述した医薬品の手配や管理、出発前のパッキングなどの事前準備のみならず、会期中の医薬品確認におきましても早瀬氏には多大な御尽力を賜り、誠にありがとうございました。報告書のお借りする形とはなりますが、メディカルスタッフ一同より、心からの感謝を申し上げます。

【医療報告（マグニトゴルスク）】

最高気温0～-5℃、最低気温-10～-15℃、湿度が20～30%という、日本より低温低湿、フリーズドライな環境での生活となりましたので、上気道炎や咽頭炎といった内科的疾患の予防がポイントとなりました。反省点としては、大会会期終盤に感冒様症状を訴える選手・スタッフが増えてしまったことや、帰国後にインフルエンザ感染者が発生してしまったことが挙げられます。マグニトゴルスクの選手村においては移動前日あたりから各国の選手・スタッフに咳をする人が増えつつあり、日本選手団でも3名が感冒様症状を訴えていました。必要最低限の感染予防処置（手洗い・うがい・マスク着用・部屋の乾燥予防）は当然徹底されておりましたが、他国選手団は咳を頻繁にしている人も、マスクは殆どの人が着用しておらず、周囲の環境としては感染が蔓延しやすい状況であったと考えます。私自身もそういった状況に気づくのが遅れてしまった部分もあり、もう少し早いタイミングで別の対応ができていればと、反省しております。

また、今回の遠征ではアルペンチームおよび本部スタッフ合わせて9名がシェレメチェボ空港にて本隊と別れてマグニトゴルスク入りし、現地でトレーニングを行っていたのですが、3月25日から29日までの5日間はメディカルスタッフが不在という状況でした。幸いにもその期間における外傷や疾病の発生はなく、結果的には大きな問題とはならなかったのですが、今になって振り返るとかなりリスクが大きい状況であったと思います。行動計画立案の時点でこういったリスクを予見し、選手の安全およびパフォーマンスを再優先として行動計画を修正すべきであったと思います。

最後になりましたが、このように遠征帯同の機会を与えて頂きました全日本ろうあ連盟スポーツ委員会の皆様、本遠征における計画の立案から現場での各種対応において、それぞれの専門分野でご協力を頂いた本部スタッフの皆様、そして何より世界を相手に全力で戦った各競技団体の選手の皆様に、心からの感謝を申し上げます。この貴重な経験を今後の医師としての日常診療に活かすとともに、今後ともろうあ者のスポーツ参加に関心を持ち、そのサポート活動に積極的に参加していく所存でございます。

看護師 會田 人美

①団体内の担当

医療チーム：看護師

②目的

日本選手団のホテルおよび競技場における体調不良者などへの看護業務（健康管理、打撲・皮膚の損傷に対する処置など）、服薬管理、24時間の日常生活管理、心理的ケアなどを医師と共に行いました。

日本選手団は、競技場の関係か、らハンティ・マンシースク（アルペンスキー以外）とマグニトゴルスク（アルペンスキー）の2か所に分かれて滞在しました。飛行機で2時間以上の距離があるため、医師1名看護師1名が団員の多いハンティ・マンシースクに、医師1名がマグニトゴルスクに同行しました。

③業務内容

予定していたメディカルルームが確保されておらず、医師の部屋を使用し、対応にあたりました。

＜診察内容＞

発熱・頭痛・咽頭痛・咳嗽・腹痛・気分不快・下痢・脱水・口内炎・湿疹(かゆみ)・捻挫・脱臼・打撲 等

＜主な処置＞

投薬・注射・創処置・テーピング 等

＜生活指導＞

食事・水分補給・加湿・手洗い・うがい 等

＜団員健康データ管理＞

大きな怪我等の対応時に備え、団員の身体情報を競技場に持参したり、急遽病院受診が必要になった選手の身体情報を病院に届ける準備を行いました。

＜薬剤・処置用品管理＞

現地到着直後に、日本から持参した薬剤・処置用品の数量の確認をしました。（滞在場所が2か所に分かれるため、荷物も団員の数を考慮し2つに分けて準備）

また、使用した薬剤をその都度記録に残し、最終日には、使用数と残数の確認と整理整頓を医師と共に行いました。

④まとめ

ロシアは、気温だけでなく湿度も室内では20%台と低く、体調の維持・管理が難しい状況でした。また、日本以外の諸外国は、マスクをする習慣がなく、感染防止あるいは感染拡大防止のためには、マスク着用は重要且つ有効でした。

医師から丁寧な説明がされていても、服薬量や時間を間違えてしまう選手がおり、服薬方法を書き示すなど、視覚的情報提供手段を用いることも検討する必要があります。

一度メディカルルームで対応した団員には、定期的に声をかけ症状の変化を確認しましたが、コミュニケーション手段が限られていたため、十分な状況把握ができたかが不安なところであり、自身の課題

でもあります。が、大会期間中、大きな怪我や病気なく過ごせたことは何よりでした。

全体としては、本部からの情報発信方法が統一されていないことがあり、必要な情報を得ることが難しいときがありました。周知方法や掲示場所を変更した場合は、そのこと自体も伝達しないと、全体に伝わらないのではないかと感じました。団体生活の中での情報伝達は、統一した見解で判断をし行動をとるためには、とても重要なことだと考えます。

4年前の大会が直前で中止になったことから、今回にける選手・スタッフの思いは特別なものであったと思います。目標にしていた5個のメダル獲得は、本当に喜ばしいことであり、同じ日本人として誇りに思います。本大会の選手団の一員として素晴らしい時間を共有する機会をくださった全日本ろうあ連盟の皆様に感謝いたします。

広報 岸田 修

第18回冬季デフリンピック競技大会において、ソルトレーク冬季デフリンピック2007、台北夏季デフリンピック2009に引き継ぎ、3度目の広報スタッフ（カメラ撮影）の業務を引き受けました。デフリンピックの撮影が6年振りとなり、台北夏季デフリンピックの経験を活かしたおかげで、体制や本部スタッフ業務をスムーズに進めることができ、また、色々提案も出すことも出来ました。今回のデフリンピックの会場が2ヶ所あり、アルペンスキー競技会場がかなり離れていたため、カメラマン2人体制とし、私はハンティ・マンシースクで、狩野氏がアルペンはスキー競技会場のマグニトゴルスクで撮影しました。

【使用した機材】

- ・ CANON EOS-1D X × 2台
- ・ EF70-200mm F2.8L USM（一眼レフ用交換レンズ）
- ・ EF16-35mm F4L IS USM
- ・ EF200-400mm F4L IS USM エクステンダー 1.4×（キヤノン銀座様より無償貸出）
- ・ スピードライト580EX II（フラッシュ用）
- ・ 三脚
- ・ 一脚
- ・ ノートパソコン
- ・ 画像処理ソフト（Photoshop Lightroom 5）
- ・ 外部HDD 1TB
- ・ 撮影記録形式 RAW ファイル（画像処理ソフトを使い、JPG ファイルに変換）

【現地の状況確認】

- ・各競技の会場・場所の確認
- ・メディアにおけるルールの確認

【現地における1日の行動】

本部スタッフ部屋で各競技の試合情報集め → 日本選手団車で各競技会場へ移動 → 各競技会場で撮影 → 日本選手団車でホテルへ移動。

写真データを外部HDDにコピーし、10枚くらい厳選した写真を画像処理ソフトでリサイズし、著作権マークを貼付、総務担当へ写真データ送信。

総務担当が写真を最終厳選し、文面と一緒にスポーツ委員会Facebookページにアップロード。

【まとめ・反省】

以前にデフリンピック、世界ろう選手権大会のカメラ撮影を経験していたのでスムーズに進めることができ、良いアングルで撮影出来たと思っております。会場がロシアだったこともあって現地における寒さ対策などをアルペンスキーワールドカップなど撮影されているプロカメラマンに色々アドバイスをもらい、現地で困らないよう準備をしたのですが、本来なら寒いはずのところが開催中に春並みの気温になったので、快適に撮影することが出来ました。

カメラ機材は、ロシアへの移動を考慮し、超望遠レンズ（単レンズ）をそれぞれ持っていくと荷物が増える為、プロカメラマンの三浦宏之氏と一緒にキヤノンと交渉し、スムーズ対応の超望遠レンズを無償で借りることが出来たことを深く感謝しております。

私はハンティ・マンシースクエリアの担当でアルペンスノーボード、ハーフパイプ、カーリング、クロカン中心で撮影。幸いにホテルから会場までそれほど離れておらず、競技時間の合間（休憩時間など）に30分以内でホテルへ戻ることが出来、撮影した写真をアップし、Facebookでの速報を出すことが出来たのが良かったと思っています。また、日本と現地時間が4時間くらいしかなかったので、速報を多くの日本人がリアルタイムで閲覧してくれたのは良かったです。

ハイスペックのノートPCとHDDを用意したおかげで作業も早く終わらせることが出来ました。今回のデフリンピックでは過去最高のメダルを獲得し、それぞれの選手たちの良い写真を撮ることができました。カメラマンが2人だったので過去大会と比べ、負担が軽かったです。

次のデフリンピックでも更なる良い写真が撮れるよう今後も高度な技術を磨きたいと思っております。

広報 狩野 功

主な業務内容

- ・写真撮影
- ・日本選手団チームの試合スケジュールチェック
- ・試合会場の撮影ポイントチェック
- ・写真データ整理（データ形式変換現像）
- ・写真データのクレジット表記対応
- ・写真データを総務本部へ提出
- ・集合写真のセッティング
- ・総務本部のサポート

主に使用した機材・備品

Canon EOS 5DmarkⅢ 2機
EF600mm
EF300mm
EF70-200mm
EF12-24mm
一脚
ノートPC
HDD（500GB）
WiFiルーター（本部手配）
スキーセット
雪山用ブーツ
アイゼン（雪山用12本爪）
チョモランマ（防寒対策ウェア）
雪山用サーモスポトル

【反省・今後の課題】

これまでフリーカメラマンとして撮影していましたが、今回はじめて日本選手団組織の一員として活動させていただきました。このような貴重な機会をいただきましたことに改めて感謝いたします。この経験を活かし、今後の日本選手団広報として日々邁進していければと思っています。

デフリンピックというロケーションでの撮影ノウハウはある程度把握は出来ていたので撮影自体に関して問題はなかったのですが、フォーカスポイントセレクトに悪戦苦闘しました。

特に私はアルペンスキーをメインに撮影担当させていただきました。

メイン会場であるハンティ・マンシースクからアルペンスキー会場のマグニトゴルスクまでのスキー用具移送トラブルによる影響により、アルペンスキー競技のスケジュール変更に伴い、入念な撮影ポイントチェックが出来なかったのですが、「なんとかしてもやりきる！」という気持ちで行ったことが今回の1番大きな自信に繋がれたと思います。

でもこれは当然ながら、カメラマンとしての撮影

スキルでの範囲です。

一方、日本選手団広報一員として、満足に貢献は出来なかったかと思います。特に広報としてのマニュアルが存在しないことにためらいながら、終わってしまったことが悔やまれます。「広報」の役割はなになのか、そして、広報一員として「どこからどこまでどのように何をすべきなのか」と再認識させられました。

「デフリンピックの認知度を高める」という終着点に変わりはないのですが、一方的な情報発信活動ではなく、「パブリック・リレーションズ」つまり、戦略的コミュニケーションのプロセスとして、「広報」に対し、双方向のコミュニケーションを取り計らいながら、色んな展開へとアクションを起こすべきではないか？と思いました。

ソーシャルメディアが普及している現代においては、「双方向」だけではすまされない時代になってきたと思います。

また、コミュニケーションが「マルチディメンショナル」となった今日においては、より複雑化した情報流通において、選手、サポーターの声に耳を傾け、必要に応じて、スモールPDCA（＊１）サイクルこそ広報能力を高めるのも広報業務一環としてなされるものだと思います。日本選手団本部、及び広報組織が一方的にストーリーを伝えていくのではなく、現場監督、広報一員、選手らがストーリーテラーとなって、情報伝達していく仕組みづくりも必要となってきているのではないかと思います。そして記事の取り組みについても今後のデフリンピック認知度を高めるために、ノウハウを築いていくべきだと思います。

1. 視点（この試合をどう評価しようか。どういう形で取り上げるか。）
2. 勝負のポイント（勝者、敗者の背景）
3. エピソード（どれだけ努力してきたのか。）
4. 技術解説（スポーツ面である以上、何故勝てたのか。）
5. プロフィール（経歴、どういうところでプレーしてきたのか。）
6. 記録（当然ながらスポーツは記録で成り立っている所以データ反映も非常に大事。）

更なる機能向上、発展を期待するとともに、日本選手団の益々の活躍をお祈り申し上げます。

（＊１）PDCA＝計画Plan 活動Do 確認Check 改善Action

手話通訳 梅本 悦子

競技会場がハンティ・マンシースクとマグニトゴルスクの2会場に分かれ、手話通訳者はそれぞれに設置。本部はハンティ・マンシースクに置かれました。

①主な職務

通訳体制は、本部付き手話通訳2名、移動手話通訳2名（内1名がマグニトゴルスク）、ロシア語 - 日本語通訳3名（内1名がマグニトゴルスク）。本部手話通訳者は本部に関する通訳、移動通訳者は旅行代理店に関する通訳と棲み分けをしました。

●本部での通訳：毎日7：00～20：00。基本的に午前・午後に分け、交代で担当。待機は緊急対応ができるようにホテル自室で休憩を兼ねる。18：00からの通訳は、疲労の状態などを考慮しながら交代で対応した。

内容は来室者、団長・総務等同行で各競技場への外出、全体ミーティング、事務局ミーティング、電話通訳など。

●動画の日本語翻訳：太田団長挨拶、メダリストインタビューなど

●医療スタッフへの通訳：医務室および病院での通訳

●選手に同行：スノボー板の損傷、スノボーブーツの修理

●ロシア語通訳者と本部スタッフとの通訳

●ホテルフロントでの通訳：部屋のカギ、資料コピーなど

●総務チームの補佐：日程表の作成など

②まとめと反省

<よかった点>

2月に行われた事前説明会で本部スタッフと顔合わせができました。一方、当日参加できなかった監督、コーチ、選手の皆さんとは成田空港で初めて会うので、顔と名前が一致しないという不安をかかえての出発でした。特にマグニトゴルスクで競技をしていたアルペンスキーチームのメンバーは最後まで顔と名前が一致せず、失礼があったと思います。

通訳者は半日交代で業務を行うため、交代時間の少し前に口頭での引き継ぎを行いました。通訳内容や選手の状態、試合の状況など情報を共有し、自身の担当時間の通訳に活かせることはよかったと思います。

ホテルでは、さまざまなトラブルが発生しました。同室者のスケジュールが同じとは限らないため、1人がカギを持ち出してしまうとマスターキーであけてもらわなければなりません。何度かフロントで交

涉したが、英語ができる人がいないとロシア語通訳者の方をお願いしなければなりません。シャワーヘッドの角度を変えようとして破損してしまったり、エレベーターが故障して日本のろう選手が閉じ込められるということもありました。

また、ある選手のスノーブーツにヒビが入り、大怪我になる危険があるため新品購入を試みましたがハンティ・マンシースク近辺には店がないことが判明。ボランティアとして活動していたロシア青年の好意で車を出してもらい、地元の修理専門店に行きました。選手本人も納得がいく手作業での修理で、最後に「金メダルを取ってください」と激励してくれたり、多くの人の暖かさに感激しました。全体に英語が通じないことが多く、ロシア語通訳者にお世話になりましたが、手話通訳者は多少の英語と国際手話は必要と思います。

＜改善が必要な点＞

出発までに報告書やルールブックで学習しましたが、やはり不十分でした。特に競技種類の手話表現は事前にきちんと調べると同時に、通訳者間での確認が必要と思いました。

本部スタッフと各チームには携帯電話が支給されていましたが通訳者にはなく、医師からの緊急連絡や通訳者同士の連絡などで不便を感じるがありました。通訳者にも1台あったほうがいいのかと思います。

また、待機時間は自室で休憩といっても、現実的には拘束時間となり本当の休養にはならず、ホテル内にずっといることで精神的ストレスもかなり感じました。そのため徐々に疲労が蓄積していったことは否めません。本部スタッフの疲れも相当だろうと考えます。予算の関係もありますが、スタッフの増員を含めて長期間の業務を健康に遂行できるための方策を検討する必要があると思います。

最後に、貴重な経験をさせていただき、お礼を申し上げます。デフリンピックを初め、スポーツ分野でのますますの活躍を願っています。

手話通訳 茂木 郁実

①団体内の担当とその内容

本部手話通訳として、医師や旅行会社などの健聴スタッフと、本部役員や選手との通訳を中心に、2名で以下の内容を担当しました。

- 1) 出国前：結団式における通訳。
- 2) 到着時：チェックイン時に、ホテルスタッフと本部役員、旅行会社のやりとりを通訳。
- 3) 大会準備期間中：大会組織委員会とのやりとり

は基本的に本部役員が国際手話で行い、本部役員が状況を旅行会社の方や現地通訳者へ伝える際に手話通訳に入った。

- 4) 大会期間中：1名は本部待機とし、来訪者や電話への対応、メディカルルームから要請があれば適宜出向いて通訳を行う。もう1名は本部役員が競技会場へ出る際に同行し、出かけない場合には部屋で休憩兼待機とした。
- 5) 帰国前：解団式における通訳。
- 6) 帰国後：成田空港ロビーにて、手話ニュースの取材があり、通訳対応。

大会期間中は、本部が開いている時間が7:00～20:00だったため、その間を基本的には午前・午後で分担して本部待機していました。毎朝7:00にその日の行動予定が本部から示されるため、それに合わせてその日の通訳の分担を決めるという流れでした。また、毎日夕方～夜に本部会議が開かれ、そこでの手話通訳も行いました。本部会議や、選手スタッフを集めた全体連絡の際には、2人で聞き取り通訳・読み取り通訳と役割を完全に分けて対応しました。

②反省、まとめなど

1) 反省点

それぞれの競技種目の用語や略語など、事前の学習では押さえられていないところがあり、通訳の際に聞き返してしまうことがありました。特に、競技に関する手話表現を日本語に変えられないことがあり、事前の学習だけではなく、選手やコーチなどとコミュニケーションをとりながら競技に関する用語を把握する必要性を感じました。

2) 本部スタッフ間の情報共有

本部スタッフの間での情報共有がなされていない場面が何度もありました。本部での決定事項や、各所から本部にあがってきた情報など、本部に詰めているスタッフには口頭で連絡されましたが、その場にはいないスタッフなどへは連絡がなされず、結果として小さな混乱が頻繁に生じていました。手話通訳という立場上、さまざまな話し合いや打ち合わせに同席するため、新たな連絡事項や変更事項などを知る機会が多かったのですが、それが本部スタッフ全員に共有されていない状況が見えました。また、本部ML、LINEグループなどを使ってもやりとりが行われていましたが、手話通訳も含め携帯やパソコンを持っていない本部スタッフもあり、それらの情報はあまり共有されておらず、通訳しながら何の話かわからず戸惑うこともよくありました。本部内での情報共有の徹底については今後改善が必要と思われます。

3) 手話通訳の業務分担について

今回、本部スタッフ2名のほか、旅行会社付きの手話通訳の方が2名おり、お互いの業務内容の線引きが曖昧でした。特に、旅行会社の方と本部スタッフがホテルスタッフとやりとりをする際などに、どちらが通訳を担当するのか迷い、すばやく対応できない場面などもありました。それぞれの役割分担について、適宜確認するとともに、それを本部スタッフや競技チームにも示していくことでよりスムーズに動けたかと思います。

4) まとめ

今回は、準備期間中に特に様々なトラブルがあり、それに合わせて手話通訳も急遽呼び出されて通訳対応することが多くありました。しかし、競技開始後は現地のやり方にも慣れ、現地ボランティアの方々や日本側のスタッフのみなさんと交流しながら活動することが出来ました。競技チームごとに行動していたため、選手のみなさんと直接やりとりをする機会は多くありませんでしたが、素晴らしい成績をおさめられたことが本当に嬉しいです。金メダルの瞬間に立ち会うこともでき、貴重な体験をさせていただきました。ありがとうございました。

露語通訳 日向寺 康雄

代表団では、ロシア語通訳をやらせて頂きました。スポーツ委員会の大杉氏から、初めてこの話があったのは昨夏でしたが、不思議な人の縁を感じます。彼とは、もう30年以上も前に大学で知り合い、一緒にソ連時代のロシアを旅行しました。私は彼の尽力で、全日本ろうあ連盟の後藤文化部長（当時）、岐阜や大阪、千葉のろう者演劇人と知り合い、自分の専門を生かして世界初のプロのデフシアター、モスクワ・パントマイム劇場を調べるようになり、それが一つの大きなきっかけとなって今の職場（ロシア国営放送・通信社）で働くことになったのです。ロシアで働くのは私の夢でしたから、その扉を開いてくれたのは日本のろう者の皆さんです。

そしてもう一つ、大げさかもしれませんが、人智を越えた巡り合わせを感じたのは、ロマンツォフ氏がデフリンピック組織委員会の責任者になっていた事でした。彼は、1992年2月に連盟と日ロ交流協会の招きで来日公演したデフマイムグループ「ゼルカラ」のメンバーでした。あの時はソ連邦崩壊直後で、日本中のろう者の方々から温かい励ましと1トンを超える人道援助物資を頂いて、一行は帰国したのでした（日向寺は通訳として同行）。ロシアのろう者は、あの時の感動を決して忘れていません。ソ

連時代聴覚障害者は、社会的に又法律的に比較的保証され優遇されていたのですが、体制崩壊と共に、事態は一変、不安と混沌の中に放り出されました。失業者が増え、若者の間では麻薬の蔓延も深刻でした。彼らのこの20年間の苦労には、弁舌に尽くしがたいものがあります（マフィアに殺害された協会幹部もいました）。そんなことを思い起こすと、今回全ロシアろう者協会がデフリンピック開催を引き受けたのは、自分達の再生のチャンスを試す、特別の意味があったのだなとつくづく思います。日本の皆さんは、ロシア式の段取りにイライラし、東京から連絡しても答えがほとんど返ってこず、最後までハラハラドキドキの連続だったと思います。一方ロシアはロシアで、ウクライナ情勢悪化により、日本が本当に参加してくれるのかどうか心配していました。とにかくデフリンピックが無事開催でき、成功し本当に良かったです。日本の選手の皆さんが現地インタビューで「ハンティ・マンシースクで冬季大会を引き受けてくれてアリガトウ」と感謝し、ボランティアの働きを高く評価してくれた事は、ロシアのろう者を心から喜ばせ、彼らが自信を取り戻す大きな助けとなりました。ロマンツォフ氏は日頃から「いつか日本のろう者に恩返しをしたい」と言っていましたから、その何分の一かは実現できたのではないのでしょうか。

今から30年以上も前に、アイデアと活力にあふれたろう者の若者の勇氣あるイニシアチブから始まった日口のろう者の交流が、いろいろな人を巻き込み、豊かな広がりを持って発展拡大し、今回のようなレベルにまで高まり深まった事は喜ばしい限りです。それを実際目の当たりにし、特派員としてロシアのニュースサイトでそれを報道できた事は、ジャーナリスト冥利に尽きます。「人間同士のコミュニケーションとは、相互理解とは何か」を常に真剣に考えている人達だからこそ、政治家や外交官でもなしえない事もやっつけまえるのかもしれませんが。

デフリンピックが終わって、初めての日曜日はロシア正教の復活大祭でした。私はロマンツォフ氏達と「ハリストスとデフリンピックの復活」を祝いウオッカで何杯も乾杯しました。当然「スノーボードのサムライ（原田選手）」にも乾杯したのですが、その時ロマンツォフ氏がいたずらっぽく笑って「日本代表団には他にもサムライがいた」と述べ、皆でグロリアの林社長の健康のために特別に乾杯した事を、最後に付け加えたいと思います。

日口のろう者交流の相互信頼に基づいた良き伝統が、今後も受け継がれ、ますます花開きますように。

①団体内の担当とその内容

今大会において、準備段階では本部役員スタッフと各競技チームとの窓口として日本代表団の編成や調整、事前の情報収集・伝達や各種事務手続き等の連絡、予算編成などを中心にあたりました。現地においては引き続き本部役員スタッフと各競技チームをつなぐ窓口として日本代表団が円滑に運営されるよう務めながら日々発生する組織委員会や輸送・宿泊などの諸問題に対応しました。

準備段階では主に、①日本選手団の編成、②日本代表選手およびスタッフを任命するにあたってのメディカルチェック、使用薬物チェック、聴力検査、ICSD加盟団体会員資格の有無、職場宛協力依頼文書発送等の書類手続き、③事前研修会実施、④日本選手団の発表、公式サイト・Facebookの立ち上げ、⑤現地での情報収集および各競技チームへの情報提供、⑥ユニフォームのサイズ確認・発注、⑦秋篠宮同妃両殿下御接見および記者会見、結団式の実施、⑧事前調査の派遣および大会組織委員会への日本からの要望の伝達、⑨在ロシア日本国大使館との情報共有などにあたりました。

準備段階では各競技チームも代表窓口を設けて連絡やり取りがスムーズになるよう協力していただきました。窓口を務めた各競技チームのスタッフ全員がろう者であったため、連絡手段はメールが主な方法になりました。監督やコーチなど専門家は健聴者がほとんどですが、各競技チームをまとめるスタッフはろう者自らが担当し、団長をはじめ本部役員も全員がろう者であったので、ろう者を中心とした日本代表団が編成されました。世界各国のチームも同様の体制であり、ろう者自らがチームを編成して運営しています。これがデフリンピックに参加する団体として特筆すべき大きな特徴です。準備段階からも、ろう者の特性に合わせて説明や情報はできるだけ簡略にポイントのみ、重要な話は面談する場を設けるように調整しました。

現地では主に、①選手・スタッフのチェックイン業務、②本部部屋の設立・運営、③本部専用車の調整、④本部スタッフの調整、⑤各競技チームの予定確認、⑥大会組織委員会からの情報や配布物の収集、⑦本部スタッフ・各競技チームへの情報伝達などにあたりました。

今回、各競技チームへの情報伝達や情報共有は各競技チームからの希望によりLINEのグループ機能を使いました。このSNSを使った情報伝達は確かに速やかで非常に効率的でしたが、本部スタッフにはLINEを使用していない者が多く、本部スタッフへ

の情報伝達は主に電話や掲示板、本部ミーティングによるものでした。そのため、各競技チームへの情報伝達と比べるとすれ違いや遅れが生じたことが反省点にあげられます。毎晩、本部ミーティングを開催したので、本部スタッフの間に大きな情報量の差が生じることはありませんでしたが、もっと効率的な方法を今後の課題としたいと思います。

現地では大会組織委員会から日本代表選手団専用のスタッフをつけてくれたため、大会組織委員会からの情報伝達がこれまでの大会と比べてもスムーズでした。また、現地通訳者の日向寺氏および橋本氏が間に立って通訳のみならず、様々な情報の収集や伝達に務めてくださったのには非常に助けられました。現地の通訳者には、現地語の通訳だけでなくお互いの文化や習慣の差異を熟知したうえでの橋渡しができる人材が求められることを痛感しました。日向寺氏が折に触れてロシアの歴史や文化を教えてくれたおかげで、大会開催地のロシアのことがより身近に感じられるようになったのは個人的にも大きな財産となりました。

②反省、まとめなど

総務として優先すべきことは、選手・スタッフに試合や練習に集中できる環境を整える、およびそれらを維持することです。今回、ユニフォームのワッペン誤植のためのユニフォーム回収をお願いしたことや、ホテルの部屋がツイン部屋しか手配されなかったこと、年度を跨ぐ会計処理のために明確な会計報告ができなかったことなどで選手・スタッフにご迷惑をおかけすることがあり痛切に反省しております。

それにも関わらず、そのたびに各チームのスタッフがフォローしていただき誠に感謝申し上げます。基本的なことですが、総務として各チームのスタッフと連絡やり取りするうえで「情報の正確な伝達」「迅速かつ柔軟性のある明確な対応」のように真摯な姿勢を心掛けていくことが重要であることを痛感しました。

本報告書では派遣した日本代表団員に関わる範囲のみの報告ですが、実際は団員として派遣されないながらも各選手を長期にわたって支えた各チームのスタッフはもちろん、携行薬物を調達してくださった薬剤師の早瀬氏、総務業務の面で支えてくださった文科省や日本障がい者スポーツ協会の皆様、選手・スタッフを心あたたく送り出すべくご支援くださった全日本ろうあ連盟加盟団体の皆様、その他ご支援くださった皆様に厚くお礼申し上げます。

移動（手話通訳） 内田 美春

日本選手団のあらゆる移動や現地での環境を整えるなど、選手と競技スタッフが試合に集中できるようにするための整備、またそれに関わる手話通訳、一般の情報保障、などが主な任務でした。

今大会は会場が2か所に分かれており、私はアルペンスキー競技のメイン開催地となったマグニトゴルスクへ同行する担当となりました。

現地での主な通訳の仕事としては、毎晩の本部ミーティング、TD会議、アルペンスキーチームへの同行、メディア対応、現地大使館員と選手との歓談等がありました。

デフリンピックでの手話通訳は、その狭義での通訳の職務のみでは務まらないと感じており、前回ブルガリアで初めてデフリンピックでの手話通訳を経験した時はその役割の把握に悩みました。

冬季と夏季の違いもあるかもしれませんが、今回2回目となった経験を通して理解したことは、毎回、場所や組織など条件が全く異なる環境で開催される大会で、とにかくその時々状況に合わせられる柔軟性を備えた手話通訳者像が求められるということです。

音声外国語や国際手話の基本的な重要性はもちろんですが、時に通訳以外にも行動力や判断力、体力も必要となります。また、今回の場合はスキーを持参したことも正解でした。

今までデフリンピックでの手話通訳者像についてはあまり語られていないと思います。

今後は、できれば大会期間中に手話通訳者が集い個々の活動の反省や疑問、課題について話し合いをする時間を数回でも作り、積み重ね、引き継いでいくことによって、限られた人員の中で日本選手団としての機能に貢献するためにも、何か形作りをしていくきっかけにできるのではないかと考えました。

加えて、手話通訳者同士の連携も大切であると思いますので、出発前のお互いの関係作りや必要な情報の収集、共有など、本番でのよりよいパフォーマンスにつなげるために事前に行動できることは何なのか、考える機会にもなれば、さらに意義深く今後のためにも役立つのではないかと思います。

また今回、幸運なことに現地で他国の通訳者と話をする機会に恵まれ、新鮮な気持ちになりました。今後は、私たちも交流を通して他国の通訳者状況を知り学ぶ貴重な機会にできたらいいな、と希望を感じた発見でした。

今後もデフ・スポーツがさらに発展することを願いつつ、今回このような貴重な機会を与えていただ

き、皆さまのご支援を得ながら経験を重ねられたことに感謝いたします。

移動（手話通訳） 瀬戸 博美

①団体内の担当とその内容

本部スタッフ（移動の手話通訳）グロリアツアーズ林氏の手話通訳を担当しました。

3月24日（火）～3月25日（水）

成田空港チェックカウンターでのサポートと手話通訳をしました。林氏のモスクワ空港での説明、ハンティ・マンシークス、ホテルフロントでの説明の手話通訳をしました。

ハンティ・マンシークス滞在中の基本的な担当スケジュールは以下になりました。

朝食時（7:30）、昼食時（12:00）、夕食時（18:30）に、林氏と1日3回は日程の確認を行い、緊急時は携帯電話にて連絡を取ることに決め、部屋にて待機していました。また、本部にて毎朝、本部の車の配車スケジュールを確認しました。夕方の本部ミーティング時では、林氏の報告の手話通訳を担当しました。

基本的なスケジュール以外では、

3月29日（日）6:00

マグニトゴルスクへ移動、日本国大使館員高橋様、清水先生、栗野氏、狩野氏と空港へ移動し、カウンターでのサポートと手話通訳をしました。

4月3日（金）5:45

日本へ帰国する大杉氏と空港へ移動し、カウンターでのサポートと手話通訳をしました。

4月3日（金）22:30

マグニトゴルスクからハンティ・マンシークスへ移動するアルペンスキーチームをホテルにて迎え、カウンターでのサポートと手話通訳をしました。

4月6日（月）から4月7日（火）ロシアから日本モスクワのホテルにて解団式後にグロリアツアーズ白坂氏より説明の手話通訳をしました。

出国手続きにて、3名のチケット再発行のため、林氏、白坂氏に同行してモスクワ空港カウンターにて手話通訳をしました。

成田空港到着後、ターンテーブルの荷物が日本選手団全員に渡るまで、待機と手話通訳をしました。

②反省・まとめ

4月3日（金）アルペンスキーチームなどマグニトゴルスク組を林氏、ロシア通訳エレナ氏と一緒に空港まで迎えに行く予定でしたが、急な時間変更があり、行けませんでした。その結果、空港ではなく

ホテルにてお迎えしてからサポートと手話通訳を務めました。

ホテルに到着したアルペンスキーチームの方々からは、ハンティ・マンシークスのホテルのルール（スキーの持ち込みは出来ない等）の質問攻めにありました。林氏、白坂氏に対応をお願いし、手話通訳に務めました。

ハンティ・マンシークスに滞在2日間は初めての担当ということもあり、動きかたに戸惑いがありました。本部からアドバイスをいただき、大変動きがスムーズになりました。

当初イメージしていました手話通訳の業務内容よりも、荷物の上げ下ろし、ホテルチェックイン時のクレーム、組織委員会との交渉など、貴重な経験をさせていただき、今後の通訳活動に幅が広がると思いました。

最後に2つ感じたことがありました。

1つは、情報に関する事で、現地の組織委員会からのインフォメーションボードの掲示板に貼ってあるもの、ロシア通訳のエレナの情報、現地ボランティアのアイダンの情報、3つの情報が短時間で変更が多々あり、混乱につながったことがありました。もう少し統一が必要だったと思いました。

2つ目は、それにも関係することですが、出発前のMLの活用ができればよかったかなと思いました。私は、家のPCのアドレスにしてあり、現地にてMLのやりとりがあった情報を知りませんでした。

15日間で、本部スタッフの皆様、選手の皆様に色々とお世話になりました。ありがとうございました。

移動 林 孝雄・白坂 篤志

■選手団内での担当と主な業務内容

担当：本部スタッフ 輸送

内容：主に以下7点となります。

- ①選手団の航空券や宿泊の予約調整業務
- ②空港でのチェックインサポート
- ③航空機に積み込む荷物の管理・調整
- ④現地での移動手段の手配
- ⑤大会のトランスポートサービスの確認
- ⑥宿泊施設のトラブル対処
- ⑦結団式・解団式の会場手配

■それぞれの業務内容の反省や改善点

①選手団の航空券や宿泊の予約調整業務について

航空券の予約については、渡航人数が50名弱と前回の夏季大会と比較すると小規模だったため、特に混乱もなく行うことができました。一方、ホテル

の予約では、ホテル到着後に、後日到着する人の分が数室不足するというトラブルが発生し選手団の皆様にご迷惑をかけてしまいました。原因は、予約を依頼した大会実行委員会とホテル側でうまく調整できていなかったとのことでした。その後、ホテル側と粘り強い交渉の結果、不足分の部屋を用意することができたのですが、交渉が成功したのは、事前に大会側と書面で確認を行っていたことが一因ではないかと思います。書面で残しておいたことで交渉もスムーズに行うことができました。このような事態は特に海外では間々起こりうる事態ですので、今後の大会でも書面のやり取りは忘れずに行いたいと思います。

②空港でのチェックインサポート

今回、目的地であるハンティ・マンシークスまではモスクワを経由しなければならず、またモスクワで再チェックインが必要でした。そのため、選手団本体は帰国までに計4回のチェックインを行う必要がありましたが、こちらは特に問題なくスムーズに行えたのではないかと思います。

③航空機に積み込む荷物の管理・調整

冬季の種目はスキー板などの用具を大量に持ち込むため、飛行機の積載に十分な配慮が必要でした。特にロシア国内線は機材が小さく、一度に積み込みできないことも考えられましたが、選手団の皆様には荷物を最小限にまとめていただいていたため、積み残しは発生せずに済みました。ただ、実行委員会が用意したマグニトゴルスクのチャーター便だけは一部荷物が積めず、積み残しは陸路での輸送となりました。原因は、実行委員会が飛行機を用意する際、荷物まではきちんと把握せず手配してしまったからようです。今後は、こちらからも大会実行委員会へ荷物を含めた管理を行うよう助言していければよいかなと思いました。

④現地での移動手段の手配

特に問題なく行えたのではないかと思います。

⑤大会のトランスポートサービスの確認

大会側のシャトルバスはきちんと機能しており、概ねストレスなく利用できたのではないかと存じます。なお、トランスポートサービスの確認や利用には、ボランティアスタッフの協力が不可欠でした。このような大会ではボランティアスタッフとの信頼関係が重要であると再認識しました。

⑥宿泊施設のトラブル対処

ハンティ・マンシースク：宿泊したホテルでは、部屋の備品の欠損・破損が多く見られ、そのようなトラブルを発生都度対処しました。今後の大会でもホテルでのトラブルはつきものではないかと思いますので、本部スタッフにはトラブル対処専属要員を配置されることをお勧めいたします。

マグニトゴルスク：トラブルはなく、またホテルスタッフのサービスもよく、快適に滞在できました。

⑦結団式・解団式の会場手配

どちらの式典も問題なく手配できたのではないかと思います。

露語通訳 橋本 康寿

(現地スタッフとして活動)

担当：ロシア語通訳、ロシア手話通訳、日本手話通訳

ロシア人⇄日本人の交渉時に通訳、ロシア人ろう者⇄日本人の間での通訳、日本人スタッフ⇄ろう者選手の間での通訳

(例) 空港係員、現地大会組織委員、宿舎管理人、警察官、ボランティア、スキー場責任者とのやり取りの際の通訳、TD会議の時の通訳、ロシアろう者との交流の際の通訳などなど

【気づいた点】

ロシア側の役員責任者などの情報が事前にあると良かったと思います。

例えば、地元側組織委員会のメンバー表（名前、携帯番号）などがあると、情報が欲しい時にだれにアプローチすればよいかわかり、動き易くなると思います。

〔対処法〕現地の人とコミュニケーションをとり、だれが実際の責任者なのか情報収集し、対応しました。ただし責任者が多忙のために補佐者に権限を任せていることもあるので、その際には、補佐者にまず確認をとり、その方が問題を扱いきれないときに責任者へ話をもっていくようにすることも必要でした。

【食事に関して】

滞在期間前半（3月29日の朝食まで）は、地元の客と一緒に食堂を使用していました。

そこでは、地元の人が食べているのと同じ日替わりメニューで、変化に富んでいました。メニューがロシア語のみだったため、文字だけではわからないこともあったので、現物を見せてもらってその中か

ら選んだりしました。

後半（3月29日以降）は、選手村の食堂を使用しましたが、メニューはウインナー、ベーコンなど国際的なものになりなじみやすかった反面、味的には毎日同じようなものの繰り返しになっていました。〔対処法〕それでもある程度の選択肢はあったので、積極的に違うメニューを試すか、調味料を持参し味を加えてみることもできるかと思えます。

【英語について】

ロシア側の各部署の責任者クラスは、多少英語ができましたが、それ以下のレベルのスタッフはほとんど英語ができませんでした。

例えば、宿舎の営業統括マネージャー、スキー場の管理者、ボランティアの英語通訳スタッフなどは、英語ができましたが、その他のボランティアスタッフ、警備にあっていた警察官、宿舎の管理人さんなどはほぼまったく英語ができませんでした。

【電話について】

私に貸与されていたプリペイド携帯電話につけられていた電話番号が、ハンティ・マンシースクの番号だったため、マグニトゴルスクで使用すると市外通話扱いとなり、割高となってしまいました。

【情報収集について】

ハンティ・マンシースクについての情報は、デフリンピック公式サイト上に英語・ロシア語の情報が割とたくさんありましたが、マグニトゴルスクの情報は少なかったです。デフリンピック公式サイトには、宿舎・スキー場情報は「バンノエ」としかでておらず、市内から宿舎までの距離や、宿舎からスキー場までの距離など、基本的な情報がない状態でした。ロシア語で丹念に検索して、やっと宿舎とスキー場の公式サイトをみつけることができました。そのサイトはロシア語版のみのサイトでした。

〔反省点〕ロシア語で、早くから情報収集をしておけたらよかったと思います。今回は、早めに現地入りしていたため、事前情報がなくても、現地のスタッフに問い合わせし情報収集できたので、助かりました。

【ロシア語通訳者として気づいた点】

競技に関するロシア語を事前に調べておけばよかったかと思いますが、現地で実際にどの単語が使われているのか、辞書だけではわからないことも多いので、事前調査だけでは、やはり限界があります。

〔対処法〕現地の人とコミュニケーションをとりな

がら専門用語などをチェックし対応しました。ロシア語の電子辞書を持参し、逐一チェックしました。

【その他】

- ・ いろいろな役職のロシア人とコミュニケーションすることにより、プールの情報、サウナの情報、市内観光や選手村エリア内での演劇などの情報、さらに、どこの国の選手団で病人が出た、といった情報を公式・非公式に得ることができました。
- ・ グロリアツアーズの白坂さんと、通訳者の内田さんが、アルペンチームのことをよくご存知で、開会式以降選手たちの緊張が高まっていくときに、どのように接したらよいのか、教えてくださったので、助かりました。
- ・ TD会議のとき、責任者がドイツ語で話しをした時に、通訳の内田さんがドイツ語→日本語へ通訳し、それを私が日本手話へ通訳するというコンビネーションプレーができたので良かったです。
- ・ 健聴のロシア人と選手が交流する時、ロシア語⇔日本手話で直接通訳ができたので、時間を節約しスムーズなコミュニケーションのお役に立てたと思います。

【最後に】

普段、目にすることの無い、本格的なスポーツの世界を間近に見させていただいたり、ろう者の社会参加のため、色々な方が色々な形で関わっていることも目の当たりにすることができ、大変勉強になり、また励みとなりました。

今回、デフリンピックに関わらせていただき、大変光栄に思っております。選手の皆様、チームの皆様、全日本ろうあ連盟の皆様に感謝しております。

アルペンスキー

総括代表 田中 照也

デフリンピック（Deaflympics）とは4年に1度、世界規模で行われる聴覚障害者のための国際総合競技大会であり、今回の冬季デフリンピック競技大会は2007年のアメリカ・ソルトレークデフリンピックから実に8年振りの大会で（前回2011年中止）、選手とチームスタッフはこのデフリンピックに懸ける想いが非常に強かったと思います。

大会当日まで選手の技術やモチベーション低下を防ぐ為にはどうしたら良いか？日々熟考した結果、ヨーロッパ地区で開催されている海外デフスキー大会、デフ世界選手権（ワールドカップ）に参加できるよう、私自身が選手時代に仲間であったヨーロッパ地区のデフTDに連絡・交渉し、2012年のヨーロッパデフスキー大会から毎年参加出来るようになりました。選手にとっては競技力やモチベーションの向上、また国際大会の経験値を上げられる大きなターニングポイントとなったのではないかと思います。

選手は、2012～2014年度に毎年のようにそれぞれの大会に参加し、国際大会経験を積んで海外強豪選手と互角に戦えるレベルの実力をつけると共に、国際大会で高いモチベーションを保つ意識付けを行いました。

その成果は、第18回冬季デフリンピック競技大会（於：マグニトゴルスク&ハンティ・マンシースク）での成績として表れました、GS種目で、史上初のトリプル入賞という偉業を成し遂げ、また男子選手のSL種目は、4位入賞が出来、本当に心から感動いたしました。

メダル圏内の3位とのタイム差が「0.18秒」差という僅差の結果を真摯に受け止めてチーム一丸となって、次の新しいステップへ一歩一歩進めれば良いと思います。

全種目合計6個の入賞が出来たのは、国内大会で高いレベルにあるSAJ（全日本スキー連盟）・FIS（国際スキー連盟）主催の公認レースに積極的に参加したことにより、選手達は国際大会への意識付けを図ったことも大きな要因の1つになりました。

その他に、国内強化合宿で素晴らしい環境づくりをサポートをして下さった北海道小樽市朝里川温泉スキー場の関係者、岐阜県高山市ほおのき平スキー場の関係者、大阪府の四條畷学園大学の関係者の大きな力がなかったら良い成績は得られなかったと思っています。

そういう周りの温かいサポートがあってこそ、チーム一丸となって大会へ向けてメダル獲得及び入

賞という高い目標と自信を持って臨むことができました。

しかし、世界のレベルは年々確実に上がっています。勝ち上がる、メダルを狙うという気持ちが今まで以上に必要になってくると私は強く言いたいです。そして、そういうモチベーションで取り組む選手を増やすためにも、スポーツに意味を見出せる環境をつくっていかねばいけないと感じております。

8年間のさまざまな試行錯誤と努力が1つの成果となりましたが、受け取る「報酬」はあまりにも少ないと思われます。それは、賞金やインセンティブという話ではありません。彼らが世界の強豪と互角に戦い、メダル獲得又は入賞したとしても、それ以前にデフリンピックという大会自体、どれほどの人が知っているのでしょうか。世界でも日本国内でも、デフリンピックの知名度そのものが決定的に低いです。

日本での知名度を上げる為にHP、アルペンチームブログ、地方新聞等でデフリンピックのPRをする努力をしておりますが、現状のやり方ではなかなか進歩しないと感じられました。「どうしたらデフリンピックの知名度を上げられるのか？」、IT技術（情報技術）を活用したPR活動をする、また国や全日本ろうあ連盟も含め、我々協会チームと一緒に知恵を出し合うなど、社会貢献を含めた障害者スポーツの発展と向上を力を合わせて真剣に考える必要があると思います。

最後に、まだまだ知名度の低いデフリンピックのため、企業スポンサーの確保はまだ先の話であり、私自身も含め、デフリンピックに加わって頂いたチームスタッフ達は大会遠征費用の全額自己負担または一部自己負担を強いられています。いわばボランティアです。私が現役時の仲間が現在各国のチームスタッフしているので情報交換をした所、国が選手とスタッフが大会に集中できるよう手厚いサポートを行っていると聞きました。特に競技用スキー板は高額で、競技種目によって数を揃える必要があり負担軽減を図る為、各メーカーのスポンサーがある国もある程世界の障害者スポーツは進んでいます。日本経済を取りまく現在の状況が今後も続くようであれば、次回も最高の環境下で取り組むのはとても難しいのではないかと感じられます。その為には、みなさまの知恵と力を合わせて世界の国に遅れを取らないよう良い方向性に持てたらと思っています。

今回、アルペンチームを纏める立場として、現役時の経験を生かし、常に選手の目線で考え、最高の環境と最高のパフォーマンスを発揮する為の環境作り（スキーサポート、荷物サポート、コンディショ

ントレーニングサポート、日本米を活用した食事サポート等）に全力を注ぎました。その結果、選手も、大会に集中でき最高の成績を収めたのではないかと考えております。

第18回デフリンピック競技大会は、皆様の温かいサポートのおかげで選手達は最高の成績を収めることができました。

本当に心から感謝申し上げます。

監督・コーチ・手話通訳 西 裕之

①選手の育成・推薦について

今回の参加選手（3人）については、約6年前からコーチングを実施しています。3人ともに当時は10代と若くまだまだ荒削りな部分が多く見られたため、前回のスロバキアデフリンピックに向けて、まずは土台となる基本を徹底的に擦りこませました。ただ、彼らの年間活動の全てを見ていた訳ではありませんので、合宿や大会にて私が指導した内容を、彼らが地元を持ち帰り各自がトレーニングを実施し、それをまた次の合宿で確認しフィードバックすることの繰り返しでした。

アルペンスキーチーム代表の田中氏と年間スケジュールを考案し、トレーナーの川崎氏とも相談したうえで、年に1度は体力測定を実施しました。選手にもその報告を必ず行い、選手が自分のトレーニングや身体づくりと常に向き合えるよう工夫して実施しました。

雪上トレーニングについては、レベルの高い健聴者と合同でのトレーニングを実施し、世界で戦える滑りや行動を意識させてきたほか、健聴者の大きな大会でフォアランナー（前走）を経験させるなどしてきました。それらの様々な経験から、大舞台で発揮できる力を養いました。

選手の推薦については、国内大会や世界大会での結果を踏まえたのはもちろんですが、選手が技術的に世界で通用するレベルにあるか、メダルを狙えるか、入賞圏内であるかを重視しました。その他、練習態度や普段の生活態度など、日本代表選手としてふさわしい行動・生活をしているかも推薦材料としています。

②成績に対する評価

今回は、回転種目（SL）で中村選手が4位とメダルまであと一步まで迫ったほか、出場3選手が全員入賞することができました。この成績だけを見ると、ここ数年の世界大会の中では非常に良い成績と言えます。しかしながら、最終目標はメダル獲得だっ

ただけに、あと一步届かなかったのは非常に悔しい結果であったとも言えます。

今回の3選手の中で、メダルに最も近いと考えていたのが、男子の中村選手・北城選手でした。ただ、実際のところのレベルにおいては、世界のトップ3に入るのは厳しい状況でした。過去の世界選手権やヨーロッパカップでのメダリストの滑りを見て、レベルの差があることは分かっていました。しかし、そんな中でも、中村選手がメダルまで0.18秒まで迫ったことは非常に評価できると思います。中村選手は自分の実力をしっかりとコントロールし、全ての種目において安定した成績を残せたと思います。これは、技術的だけではなく、メンタルの強さや、メダルを獲るために自分が何をすべきかということをも自分なりにしっかりと考えて行動していたからだと思います。

中村選手が4位になったSL種目ですが、会場がマグニトゴルスクからハンティ・マンシースクに移動となり、斜面難易度が簡単になり、雪面状況はハードからソフトに変わりました。ソフトな雪面は日本選手が慣れている雪質であり、コース難易度も下がったため、日本選手にはチャンスでした。それを受けて、1本目からフルアタックで攻め、1本目でメダル圏内に食らいつき、全選手にプレッシャーのかかる2本目の勝負という作戦で挑みました。作戦どおり、ヨーロッパの選手が抑え気味で滑っていたのもあって、中村選手は1本目に3位につけ、メダル争いを出来る位置で2本目を迎えることができました。2本目はプレッシャーのかかる中、少し滑りが固くなってしまいましたが、そんな中でもまずまずのタイムで滑れたのではないかと考えています。

結果として、中村選手はメダルまで0.18秒と非常に惜しかった訳ですが、1本目5位の選手が2本目までジャンプアップしていることや、その選手とは2本目だけで約2秒も負けていること、固くなって攻められなかったことなどを考えると、もう1段階レベルアップしなければメダル獲得は簡単ではないと思います。

北城選手も1本目の途中までは良い滑りでしたが、ゴール前の失敗がひびき出遅れることになってしまいました。2本目は焦りも出たのか、転倒してしまいました。北城選手は1本目のスタート順に恵まれず、第1グループでの最終滑走（25人中25番目）のクジをひいてしまったことが非常に悔やまれます。ソフトな雪面は、1番目と25番目では大きく状況が変わり、不利な状況でのスタートとなってしまいました。スタート順が早かったら、違う結果になり、中村・北城両選手がメダルに絡んだ戦いを

していたと思います。

デフリンピックやデフ世界選手権のメダリスト達は、日本の健聴者でいうと国内のFISレースでも上位に食い込むレベルです。技術系ではありますが、そのレベルの選手達と対等に戦えたことは、特に中村選手にとっては自信に繋がったのではないかと思います。中村・北城の2選手については、今後のトレーニングや大会において技術向上と経験を積み、更に上のレベルに上がることで、世界大会でも堂々とメダル争いができる選手になれると思います。

女子の小林選手については、今回、入賞は出来ましたが、技術的には世界のトップからまだまだ離されています。基本からもう一度やり直し、今回の悔しさを4年後に晴らしてほしいと思います。

メダル獲得の目標は達成できませんでしたが、今の彼らの全力の力でぶつかり、全選手が入賞できたことは素晴らしい結果だと思っています。

③チーム（コーチ）体制と各コーチの役割

今回のアルペンチームは、田中代表の下、監督である私、永田サービスマン、豊島庶務と各役割をしっかりと果たしたと考えています。代表の田中氏は、チーム全体の纏め役として出発前から帰国まで、あらゆることに気を配り、チームが良い成績を出せるよう常に考えていました。永田サービスマンは、板のメンテナンスはもちろんですが、レースに臨むにあたってのスキーの扱いや、雪面状況に応じたアドバイスなど、1／100秒でもタイムが速くなるよう常に考えて行動してくれました。豊島庶務は、選手を食事面からサポートしてくれた他、雑務もこなし、大会期間がスムーズに過ごせるよう努力してくれました。

コーチングに関しては、監督である私を中心に行いました。ここにきての技術向上は難しいので、自分の持っている技術を120%発揮できるよう、精神面や技術面から指導しました。また、ヨーロッパ各国コーチ陣との情報交換や合同でのトレーニング実施など、日本チームが常に優位な状態で活動できるよう気を配り、チームの動きを進めました。

今回のデフリンピックでは、アルペンスキー経験のある清水ドクターがアルペンスキーチームに帯同してくれていたため、レース前の身体づくりや、レース後のケアなど、選手にとってはプラスになることが多く、非常に有益であったと思います。

④競技スケジュール

(TD会議や公式練習なども含むチームとしての動き)

今回のデフリンピックは、アルペン会場が最終種目のみ別会場で開催されるという珍しいケースでし

た。しかも移動には飛行機が必要という非常に大変な大会でした。開会式に出ると、最初のレース前日に会場入りになってしまうというスケジュールを受け、日本チーム（アルペンスキーチーム）は、開会式には参加せず、余裕をもって会場入りしトレーニングなどをこなし、大会に臨むという形をとりました。結果としては、この選択は非常に良かったと思います。日本チーム以外の国は、移動の疲れや荷物が届かないトラブルに翻弄されていました。日本チームは落ち着いて初戦を迎えることができたと思います。

TD会議（アルペンスキーではTCM（チームキャプテンミーティング）と言います）には、田中代表と監督の私のほか、ロシア語通訳の橋本氏に常に帯同していただきました。このTCMでは国際手話が中心となって話が進むため、国際手話通訳の必要性を強く感じました。会議の話は概ね理解できるのですが、こちらからの提案や質問が会議中に出来ませんでした。今回は英語やロシア語の通訳もなかったため、会議が終わった後に直接TDや競技委員長のところまで行き、全体の確認事項や公式トレーニングなどについて確認をしました。

国際大会やそのTCMは、FIS（国際スキー連盟）のルールに則り進んでいきますので、FISのルールを理解している者が必ず出席するべきです。（今回は私がそれにあたります）ろう者だけの大会経験だけでは話についていけないので、今後も注意していただきたいです。

⑤大会の競技運営などの評価

今回の大会運営について、アルペンスキーの4種目を開催した「マグニトゴルスク」は素晴らしい競技運営と会場準備であったと思います。スキー場のコース整備や安全面の配慮、IDコントロールなども、FISの世界大会と同レベルであったと思います。また、コース整備係やボランティアの皆さんも、朝早くから夜遅くまで一生懸命やっていただきとても感動しました。非常に多くの方々が動き、大会を支えているのがよく分かりました。

最終種目を開催した「ハンティ・マンシースク」が残念だったのは、気温上昇に伴いバーン状況が悪かったことです。気温が上がるのは仕方のないことなのですが、とてもソフトになっている1本目の状況でも雪面硬化剤を使用せずにそのままレースを開始したことは残念でした。数人の選手が滑っただけでコースが荒れてきて、同じ第1グループ内で公平さが保てませんでした。さらに、2本目のセッティングも1本目とほぼ同じ位置に立てざるをえない状況になり、1本目と2本目が、ほぼ同じセットでの

レースになってしまいレースとしては盛り上がりには欠けていました。とても寒いロシアでは、暖かくなってからのレースに慣れていなかったのかもしれません。

その他、会場が別れたことによる、荷物運搬トラブルが発生したのは残念であり、選手たちにも負担になったと思います。

⑥競技規則などの適用（問題点など）

競技規則においては、FIS（国際スキー連盟）ルールに則り行われていましたので、特別問題はなかったと思います。

競技規則の件ではありませんが、今回、急な予定変更や、緊急の代表者会議などの開催があったのですが、すべての国に伝わっていませんでした。アナウンス方法や周知方法をもう少し考えていただけると良いと思いました。

⑦大会派遣までの準備状況

トレーニングや技術的な準備に関しては、年末年始と2月にそれぞれ合宿を行い準備してきました。年末年始合宿での課題に沿って地元でトレーニングし、2月の合宿ではロシアの固いバーンを想定したスキー場で、より実践的なトレーニングを実施しました。2年前の世界選手権や、毎年開催しているヨーロッパカップの状況から想定し、ゲートのセッティングもレースを意識してトレーニングを実施してきました。トレーニングは充実していた反面、国内大会への参加が少なかったのも、もう少し国内大会で経験を積ませるべきだったと思っています。

それ以外の準備については、田中代表の下、スムーズに取り組めていたと思います。荷物の件、書類の件、海外での生活（特に食事）など、今までの経験を踏まえて順調に準備できていたと思います。

⑧反省・まとめおよび次大会に向けた取り組み・改善案

今回、男子の中村・北城の2名については、メダルのチャンスがあると考えていました。メダル獲得へのシナリオとして、まず、高速系DH（滑降）・SG（スーパー大回転）で大会の雰囲気やコースに慣れ、日本選手が得意な回転・大回転に関わってくるCB（スーパーコンビネーション）から勝負をかけて行き、大回転・回転でメダルを目指すというものでした。

中村選手に関しては、ほぼ予定通りに進み、前にも述べたように、最終種目のSLでメダルまであと一步のところまで行くことができました。しかし、北城選手に関しては、大きな誤算が生じました。ハンティ・マンシースクで開会式を終え、第1のアル

ペン会場マグニトゴルスクへの移動の際に荷物の到着が大幅に遅れ、スケジュールが変更になったことです。これにより、本来、SGのレースを終えてから、CBのSGに臨む予定でしたが、その予定が狂い、初戦のSGが無くなってしまったため、入賞の期待ができるCBに採用されるSGが初戦となってしまいました。予定としていたSGで準備が出来ないまま、技術系が関係するCBへと進んでしまったのです。（北城選手は国内での事前練習が出来ないことと経験不足の面から安全面を考慮しDHエントリーをしていなかった）結果としてCBのSGは大きく出遅れてしまいました。（後半のSLで挽回し9位までジャンプアップしました）

この件だけが理由ではありませんが、北城選手は最後まで波にのれなかった気がします。このスケジュール変更といい、SLのスタート順といい、北城選手にとっては不運が続いてしまいました。

デフの世界大会は2年前の世界選手権と今回のデフリンピックの2度経験しましたが、選手のレベル差があるため、コース難易度をそこまで高く設定していない傾向が感じられます。従って、あまり高速系を練習していない選手でも、高速系に出場が可能であると考えられます。今回のようなトラブルの可能性もありますので、次回大会においては、特に男子選手はすべての種目にエントリーするべきだと思います。

（今回のように3種目同じコースを使う場合はなおさら）

TCM参加について、前にも述べたように国際手話がしっかり出来る人を同席させるべきだと思います。会議内容を断片的にしか理解できないのは、チームにとって不利になることもありますし、こちらからの意見や提案が出来ずに見守っているだけでは、世界トップへの仲間入りが出来ません。日本人のスキー技術はヨーロッパでも評価されてきていますので、チームとしても世界のトップ集団の仲間入ることが必要であると強く感じました。

（今回のTCMでは、会議中の内容不明点は会議終了後に直接TD・競技委員長に英語で聞きに行き理解しました。）

国内のトレーニングについて、これも先に少し述べましたが、健聴者の国内レースや合宿にもっと参加すべきだと思います。デフだけのレースや合宿では他に競う選手が少ないし、レベルも限りがあります。国内の健聴者トップレベルの選手たちと切磋琢磨し、レースでも競いあうことで、経験値が増し、大舞台でも力を発揮できると思います。これは、世界大会・デフリンピックでメダルを争う戦いをするためには非常に重要なことだと感じています。

代表ウェアについて、既製品にプリントというスタイルよりは、デフリンピック専用のウェアを初期段階から企画していただきたいです。また、Tシャツ・ポロシャツ、パーカーなども併せて検討していただきたいです。選手村などでの滞在期間、日本チームは各チームそれぞれのTシャツであったり、メーカーのTシャツだったりを着用しており、統一感に欠けていました。他の国は選手村においても、一定の統一感がありました。

最後に、今回サポートしていただいた全ての方に感謝の意を表し、報告の終わりしたいと思います。本当にありがとうございました。

コーチ&サービス担当 永田 憲市郎

今回は、スキークチューナップとコーチとしての依頼があり参加しました。

チーム内目標は、「メダルを獲得」。

この目標に対して全身全霊をかけて仕事をしたつもりです。

<主な作業内容>

- ・西監督が来るまでのコーチングとコーディネート。
- ・スキーエッジ調整及びメンテナンス（リペア作業含む）
- ・ワクシング

クリーニング～ベース作り（各種目によって異なる）～トップベース作り～トップ～スタートベース～スタート。

種目によって滑走速度が違うので摩擦抵抗を考慮に入れて大会当日の状況に合わせる。

<1日の流れ>

- ・朝、選手とスタッフの流れに合わせて出発。
- ・インスペクション時に、実際コースに入って雪質と雪温のチェック。
- ・大会時、スタート時に最終のスタートワックスをチョイスして現場で塗りこみ。必要であればエッジの調整を行う。
- ・選手スタート時に、スキーをはかせてビンディング最終調整。
- ・大会終了後。実際に滑ったバーンを確認。次へのワクシング情報につなげる。
- ・夕方前、スキー現場終了。サービスルームでスキーを乾燥。
- ・乾燥後、エッジの確認と調整（選手から依頼されたら作業を行う）
- ・エッジ滑走面の状態を再確認しながらクリーン

グワックス。

- ・天気予報の情報を確認後、次の日の種目のスキーを大会時に合わせるためにベース作り。
- ・天気予報を決め、トップワックスのベース作り。
- ・トップ作り。
- ・アップスキーの準備等

今回は3名の選手の作業を行いました。本番用のほかにもアップ用のスキーもありました。

作業時間は、1日4時間から5時間程度でした。この選手数だと、サービスマン1名ではぎりぎりなところ。これ以上選手が増えるのであれば、アシスタントスタッフ1名が必要になります。

<総評>

作業は手を抜かずにしっかりとやりきることはもちろんであるが、やはり選手との信頼関係は大事です。

大会時だけではなく、合宿時や年に数回の大会でも同じ体制でできると、大きな大会でも選手はリラックスして大会に集中できると思います。

最終的には入賞は多かったですが、メダル獲得はもう一歩でした。特に、中村晃大選手のスラローム種目で、3位と0.18秒の差。このことに関しては、サービスマンとしても一歩何かできなかったのかと終わってから何度も考えた次第です。私の経験からしてもどうにかしたかった悔いが残る大会結果となりました。

ですが、今回の大会成績は日本アルペンチームは過去最大の入賞者が出せたとのこと。また選手の年齢も若いので次の開催でも今回出場したメンバーが主軸になっていくと思います。

引き続きしっかりとトレーニングと活動をしていけば、入賞は可能である思います。

スタッフ 豊島 清美

①団体内の担当とその内容

庶務、チームサポート

パスポート及び貴重品の管理、健康管理等

②反省・まとめなど

今回は初めてスタッフとして行きましたが、非常に有意義な世界大会でした。

選手やスタッフたちの栄養の糧となる白米や日本食、IHヒーター、変圧器等持参しました。変圧器やヒューズの故障等ハプニングもありましたが、なんとか無事に白米を炊くことができ、大会中、ドライカレーや青菜等のおにぎりを作り選手やスタッフへふるまうことができました。世界大会では、白米や

日本食は健康管理にやはり欠かせないので、変圧器や炊飯器等の電気製品の取り扱い方については十分に気を付けなければと反省しています。

破れやほつれのために10色以上の糸を用意した裁縫セットは大変重宝しました。

自分の健康管理も行っていたつもりでしたが、詰めが甘かったのか最終的には体調を崩してしまいました。いつでもどこでもスタッフは最後まで元気に努めなければならないと認識して行動すべきだと思いました。

選手 中村 晃大

参加種目はDH（滑降）・SG（スーパー大回転）・SC（スーパー複合）・GS（大回転）・SL（回転）の全5種目です。

結果報告としては

DH（滑降）	16位
SG（スーパー大回転）	11位
SC（スーパー複合）	6位入賞
GS（大回転）	6位入賞
SL（回転）	4位入賞

特に最高順位となった回転では、一本目は3位ながらも、2本目は自分の弱さが出てしまい、0.18秒さでメダルを逃すというとても悔しいレースになりました。しかし、前代未聞の大会中止となったスロバキアデフリンピックからの4年間の想いと出場できた喜び。様々な想いの中で連日試合に臨み、3種目で入賞することができました。

これも日頃より家族を始め、多くの方々に支えて頂いているおかげだと思います。

また現地では多くの方々にサポートもして頂き、より一層競技に集中することができました。しかし、目標としていたメダル獲得で恩返しすることが出来ずとても悔しい気持ちです。

今大会のアルペンスキーは間違いなく過去最高レベルの大会だったと思います。上位は健常者のレベルでいうとFIS、EUレベルに通用する選手でした。また大会バーンには水を撒き、日本では経験したことのないくらいのアイスバーンでした。そんな中ですが、技術系でメダル争いの位置に立てたことは今後に向けての自信にもなりました。そして課題も多く見つかり、現在では4年後に向けてトレーニングをしているところです。

最後に夏・冬のデフリンピックで入賞することが出来たのは本当に嬉しく思います。今後は両方でメダルを獲得できるように頑張ります。本大会に向けて色々とサポートして頂き本当にありがとうございました。

ました。今後とも宜しくお願い致します。

選手 北城 大地

①成績に対する自己評価

今回のデフリンピックでは、SG、SC、GS、SLの競技に出場しました。初めて出場しましたが、SG23位、SC 9位、GS 7位、SL失格という結果でした。

SG競技については、まだまだ練習不足だと思いました。これからはもっと練習してもう少しスピードが出せるように頑張りたいと思います。

SC競技はSGとSLの2つの結果で順位が決まります。SGでは23位でしたが、SLが苦手な世界の選手が多いのでチャンスだと思い頑張りました。その結果、9位までジャンプアップすることができました。得意のSLの滑りができてよかったと思います。とても、うれしかったです。

GS競技については昨年まで技術が伸びず、悩んでいました。今年、日本大学スキー部のカナダ合宿に参加し、色々な技術を向上させることができました。その結果、7位という順位でした。とてもうれしかったです。もっとスピードを出せるように工夫したいと思います。

SL競技では、得意な種目なのでチャンスだと思いました。しかし、スキー場も変わり雪質も変わったこともあり、何故か身体が変な動きになってしまい失敗しました。その結果、失格となりました。もしかすると、油断があり失敗して転んでしまったのかもしれませんが。応援してくれていた日本のみなさんに本当に申し訳ないと思いました。

②これからの抱負

今回のデフリンピックでは、目標にしてきたメダル獲得を達成することができませんでした。しかし、初めてデフリンピックに出場してこれまで練習をしてきてよかった点や、改善しなければならない点が見つかりました。これからは、この経験を生かして、4年後のデフリンピックに向けて目標や課題を設定し努力していきたいと思います。最後まで応援をして下さった皆さんに心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

選手 小林 育実

①成績に対する自己評価

大回転(GS) 8位・回転(SC) 6位と両種目で入

賞する事が出来ました。メダルを狙っていただけに悔しい結果となりましたが、この結果が今後の技術の向上に繋がっていくのだろーと思っっています。この悔しい気持ちを忘れずに、練習や大会でも頑張っていきたいと思っいます。

②反省・抱負

結果は8位と6位でメダルを取ることは出来ませんでした。初出場で入賞出来たことは次への目標と自信に繋がりました。初めてロシアで滑った時、雪質の違いに適応出来ず始めは練習で慣れるのが精一杯の状況でした。「このままで大丈夫だろうか。」不安になった時もありましたが、スタッフの方やチームメイトの支えがあつて大会の前日には精神的に落ちつき、良い滑りができるようになりました。

大回転は1本目、2本目共に難しいセットではなかった。西監督の指導の下、攻めの滑りをする事が出来入賞しました。レース終了後は、西監督と一緒に自分の癖をチェックし最終調整して回転に臨みました。

回転ではバーン状況は良好でしたが、セットの序盤が難しくなつていたので不安もあり1本目は守りの姿勢に入つてしまひあまり良いタイムを出すことが出来ませんでした。1本目の結果を見ると7位で、44秒台に自分含め4人入つていたので、0.1秒も落とせないところにいました。2本目は1本目の反省を生かし滑っていくことが出来ました。タイムは1本目で6位だった選手に届くことは出来ませんでした。6位の選手が転び途中棄権したので6位に上がることが出来ました。

今回デフリンピックに参加して改めて世界の壁の高さや自分の今のレベルを知りました。日本で1番になるのではなく、世界で1番になりたいと思ひました。その為には、足腰や体幹の筋力アップ、大会でのメンタルの強さが必要になるのだと勉強になりました。2年後には世界選手権もあるのでそれに向けてまた進み出していきます。

最後に、今回の大会出場に携わつて下さつた皆様にも感謝したいと思ひます。ありがとうございました。

アルペンスノーボード

監督 土師 比佐夫

①選手の 育成・推薦 について

アルペンスノーボード日本代表選手の推薦は、当初は以下の3大会の成績を選考して推薦名簿を冬季

デフリンピック派遣委員会に提出する予定でした。ところが関東地方を襲つた未曾有の大雪の影響で第42回全国ろうあ者冬季体育大会は中止となり、選考は2つのFIS公認大会に絞られました。

【チーム内選考大会】

FIS公認尾瀬戸倉大会 2014年1月

第42回全国ろうあ者冬季体育大会 2014年2月
(大雪の影響で中止)

FIS公認全日本選手権大会 2014年4月

鶴岡コーチに順位付けして頂いた最終的なチーム内順位を下表のとおり決定し、2014年5月に冬季デフリンピック派遣委員会に推薦名簿を提出しました。

順位	男子選手	順位	女子選手
1位	原田 上 選手	1位	星 奈々 選手
2位	高嶋 弘貴 選手	2位	手塚 久野 選手
3位	星 雄一 選手		

②成績に対する評価

■PGS (パラレル大回転)

3月30日の9:00から予選、13:00から決勝トーナメントという流れで試合が行われました。当日の天候は快晴で午前中の予選は気温も低く締まったバーンでしたが、気温上昇とともに午後の決勝トーナメントは雪が緩む不安定なコンディションになりました。予選は赤コースと青コースをそれぞれ1本ずつ滑つて2本のタイム合計で予選順位が決まります。

男子予選では、固いバーンを得意とする高嶋選手が持ち味を生かした切れの良い大きなターンで予選を2位で通過しました。過去の冬季デフリンピックで2度の世界チャンピオンに輝いた原田選手は予選1本目でブーツを破損したにも関わらず百戦錬磨の滑りで予選を3位で通過しました。チーム最年長で参加国でも最年長にはいるベテラン星雄一選手も、これまでの国内合宿では見られなかった安定した滑りで予選7位に入りました。一方女子予選では、冬季デフリンピック初出場の星奈々選手は1本目で失敗したものの2本目で最高の滑りを見せて7位で予選を通過しました。手塚選手は国内合宿で肩を痛めたこともあり精彩を欠いた滑りになりましたが、予選ギリギリの8位に食い込みました。

午後から始まった決勝トーナメントは、予選順位でトーナメント組み合わせが決まるやり方でした。予選順位によっては準々決勝で同じ国の選手同士、あるいは優勝候補同士がぶつかる皮肉な組み合わせもありました。最初の準々決勝で高嶋選手が星雄一選手を破り、次の準決勝では原田選手が高嶋選手を

破り決勝に進出しました。一昨年のデフスノーボード世界選手権パラレル回転覇者のPETR Raphael選手（オーストリア）が準々決勝で、同じくデフスノーボード世界選手権パラレル大回転覇者のKHAMITSEVICH Roman選手（ロシア）が準決勝で早くも姿を消したことが日本チームに有利になりました。原田選手は決勝でISHATENKO Igor選手（ロシア）と対決、1本目で原田選手は相手選手のミス誘い余裕のあるゴールインしましたが、2本目では激しく追い上げられ先行ゴールを許したものの僅差で逃げ切りました。原田選手は第15回冬季デフリンピック（スウェーデン／スツバル）から数えて3度目となる金メダルとなりました。一方、女子決勝トーナメントでは、デフスノーボード世界選手権大会パラレル回転覇者KAPUSTKINA Maria選手（ロシア）、同3位SURMILINA Anna選手（ロシア）と同PGS覇者のHANHIKOSKI Cecilia Emma選手（フィンランド）が決勝トーナメントを順当に勝ち上がり、KAPUSTKINA Maria選手が優勝しました。日本選手は準決勝でHANHIKOSKI Cecilia Emma選手に敗れた星奈々選手の4位が最高でした。

■PSL（パラレル回転）

4月3日の9:00から予選、13:00から決勝トーナメントという流れで試合が行われました。3月28日の開会式以降、毎日晴天続きでハンティ・マンシースクはすっかり春になり、スキー場もザラメ雪となりました。午前中の予選はパラレル大回転同様に、赤コースと青コースをそれぞれ1本ずつ滑り2本のタイム合計で予選順位が決まります。日本代表選手団の鶴岡コーチが元オリンピック選手の実績を買われコースセッティングを行いました。予選が始まる時は固かった雪も気温の上昇とともに荒れたバーンになりコースアウトしたり転倒したりする選手が続出しました。特に前日の公式練習で素晴らしい滑りを見せ、今回の優勝候補筆頭と見られていたKOMISSAROV Nikita選手（ロシア）が思わぬ転倒で予選敗退しました。国内合宿でザラメ雪に慣れている日本チームは安定した滑りで全員決勝トーナメントに進みました。

午後から始まった決勝トーナメントは、高嶋選手は準々決勝で前日の大回転銀メダリストのISHATENKO Igor選手（ロシア）と対決し、1本目では僅差だったものの2本目で痛恨のミスを犯し敗退しました。準々決勝を順当に勝ち上がった原田選手は、準決勝で高嶋選手を破ったISHATENKO Igor選手と対決、1本目でゴールを許したものの2本目では持ち前の本領を発揮、執念の逆転ゴールで決勝にコマを進めました。決勝では、予選5位で決勝トーナメントを順当に勝ち上がってきた往年のライバ

ル、KHAMITSEVICH Roman選手（ロシア）と対決しました。原田選手は1本目、2本目とも相手に先行ゴールを許し、金メダルならずと思いましたが、2本目終了後に相手がゲート不通過とアナウンスが競技会場に流れた瞬間、原田選手の金メダルが確定しました。原田選手にとって回転種目の金メダルは前ソルトレークシティー冬季デフリンピックに続いて2度目です。一方、女子決勝トーナメントでは、前日の大回転金メダリストKAPUSTKINA Maria選手（ロシア）、同3位SURMILINA Anna選手（ロシア）と同2位HANHIKOSKI Cecilia Emma選手（フィンランド）が決勝トーナメントを順当に勝ち上がり、HANHIKOSKI Cecilia Emma選手が決勝トーナメントを制しました。日本選手は2人とも準々決勝で敗れ、予選タイムの順位で星奈々選手が7位、手塚選手が8位になりました。

【総合評価】

これまで-20℃前後と極寒続きのハンティ・マンシースクも、デフリンピック期間中は毎日快晴が続き、ザラメ雪になったのも日本選手に有利に働きました。PGSの決勝トーナメントで、優勝候補選手が次から次へとミスを連発する番狂わせの展開になったのは、固い雪を得意とするヨーロッパ選手にとってザラメ雪は不利だったと思われます。

今回の大会を振り返ってみますと、金メダル2個、入賞8名と過去最大の実績を残すことができましたが、これもこれまでの国内合宿で、今回の競技バーンに見られた固いバーン、柔らかいバーン、そして緩斜面、急斜面のコースの攻め方を何度も繰り返して練習してきた成果だと思います。その一方では新たな課題が浮き彫りになりました。それは、日本代表選手の高齢化が進んでいることです。今大会に出場した各国の選手層を分析しますと、大回転、回転2種目とも女子銅メダルを獲得したロシア国の最年少16才の選手を筆頭にロシア国を含むヨーロッパ諸国の女子選手は平均10～20才代、男子選手は33才以下の選手が台頭しています。次回の冬季デフリンピックは間違いなく彼ら若手選手が中心になるでしょう。このため冬季デフリンピック終了後にアルペンスノーボードチームの若返りを図り10～20才代の選手中心としたチーム構成にしていくことが、次回、次々回冬季デフリンピックに向けたアルペンスノーボードチームの課題になります。

③チーム体制と各の役割

監 督 土師 比佐夫

チーム責任者としてのチームとりまとめ、本部・他チームとの連携、TD

	会議出席、庶務、選手の評価
コーチ	鶴岡 剣太郎（2006年トリノオリンピックスノーボード選手） 競技期間中におけるテクニカルコーチ、PSLのコースセッティング、選手のマテリアル調整
ATトレーナー	津賀 裕喜（日本体育協会公認ATトレーナー） 競技期間中の選手のコンディショニングケア、健康管理、ドーピング対応

④競技スケジュール（TD会議や公式練習なども含む チームとしての動き）

3/24	移動日	AM 結団式、PM 成田出国、早朝、ハンティ・マンシースク着
3/25	公式トレーニング	時差ボケ解消のため、終日静養日
3/26	公式トレーニング	スキー場側の都合によりリフトが使えず AM フリーラントレーニング PM フィジカルトレーニング
3/27	公式トレーニング	AM フリーラントレーニング PM フィジカルトレーニング
3/28	公式トレーニング & 開会式、TD会議	PM ゲートレーニング
3/29	公式トレーニング、TD会議	PM ゲートレーニング
3/30	PGS（パラレル大回転）、TD会議	AM 予選 PM 決勝
3/31	OFF日	フィジカルトレーニング
4/1	公式トレーニング	PM ゲートレーニング
4/2	公式トレーニング、TD会議	PM ゲートレーニング
4/3	PSL（パラレル回転）	AM 予選 PM 決勝
4/4	OFF日	静養日
4/5	閉会式	
4/6	移動日	早朝、ハンティ・マンシースク着
4/7	移動日	AM 成田着

⑤大会の競技運営など評価

今回は事情により大会前の下見にいけませんでした。競技団体として下見の際に大会準備状況をしっかり確認すべきことが数点ありました。宿舎となるホテル内にボードを持ち込めないこと、そして組織委員会がホームページ上に告示した公式練習スケジュールが計画通りに行われないことが現地入りした後にわかりました。大会期間中、ボードは全てスノーボード競技会場の反対側にあるクロスカントリースキー会場近くのワックスルームに保管しなければなりません。このため大会前日のワックス掛けやボードの点検、大会当日にボードを取りに行くのにバス待ち時間も含めて往復1時間位かかることが、選手の負担増に繋がりました。また、公式練習においても、2つの課題を残しました。そのうちの1つは競技委員会とスキー場運営側の連絡が不十分で、公式練習に参加するために26日に現地入りし

た時はスキー場の整備中でリフトが動いていませんでした。現地入り3日目にして、ようやくPGLの公式練習が1日のみ行われました。2つ目は、公式練習で日本選手を含む各国の選手のボードに深い傷がつくアクシデントが起きました。その日の夕方、技術代表にボードに傷ついたことを報告、TD会議で嚴重抗議したところ、スタート位置に設置したゲートの取り付けネジに不備がありそれが原因でボードを傷つけたことが判明しました。競技委員会の賢明な対応により、翌日地元のサービスマンに来て頂きボードの応急処置を行いました。もし大会前日のアクシデントだったらボートを修理することもできず、競技そのものの開催が危ぶまれたかもしれません。競技委員会は公式練習の開催にあたりスキー場側と密な連絡、そして競技設備の瑕疵についても十分チェックして頂きたいと感じました。また、競技委員会と組織委員会、ホテル側の連携も不十分と感じました。大会当日の進行スケジュールではインスペクション開始が8:30ですが、競技委員会が用意したシャトルバスの始発は8:30、ホテルの朝食は7:30からです。これではとてもインスペクション開始時間に間に合いません。TD会議でこれらの問題点を指摘したところ競技委員会と組織委員会は別々の指揮体制のため直接組織委員会に提起してくださいとのことでした。そこで、他国の監督、スタッフと共に組織委員会を通してホテル側と交渉したところ、朝食に弁当と早朝バスの確保をすることができました。やはり、組織委員会が競技委員会と連携し、スキー場、ホテル側とコミュニケーションを密にすることが競技運営をスムーズにしていくための課題だと感じました。競技会場では、選手のスタート順番やタイム、順位が音声によってアナウンスされたため、会場にいるきこえないスタッフにはちょっとわかりにくい面がありました。聴覚障害者のための大会なので、電光掲示板でも良いから、スタート選手やタイム表示、現在の順位等はしっかり会場に伝えるべきだと感じました。

⑥競技規則の適用（問題点など）

アルペンスノーボード競技の競技規則はFIS（国際スキー連盟）競技規則です。男子選手のエントリー数が少なくTD会議において参加国の多数決でルールを一部変更できるデフリンピック特別規則によりFIS競技ルールで定めた決勝トーナメント進出枠を16人から8人に変更した他は、公開ドローも含めて全てFIS（国際スキー連盟）競技規則に法って行われました。

⑦大会派遣までの準備状況

■推薦選手名簿の提出（2014. 5）

冬季デフリンピック派遣委員会に、チーム内選考会を含めて選考した推薦選手名簿を提出しました。

■冬季デフリンピック派遣委員会との面談（2014. 6）

冬季デフリンピック派遣委員会に対して、チーム内で順位を決定した根拠の説明とエビデンスを提出しました。

■日本代表選手団内示（2014. 7）

デフリンピック派遣委員会より冬季デフリンピック日本代表選手団の内示と一人当たりの派遣費用見積もりが出ました。この時点で派遣費用が夏季、冬季デフリンピックを含めて史上最大の派遣費用になることがわかり、これまで計画していたチーム内資金にかなりの不足する恐れが出てきました。このため、チームとして派遣スタッフの見直しと資金造成の計画をたてました。

■日本代表選手団の決定（2014.11）

全日本ろうあ連盟より冬季デフリンピック日本代表選手団の正式発表があり、代表選手に内定した選手は所属会社への報告を実施しました。

■資金造成活動（2014. 9～2015. 2）

高騰化する選手の自己負担金、派遣費用自己負担の選手を援助するために、日本ろう者スキー協会として冬季デフリンピック応援グッズ（ミニタオル）の制作ならびに販売活動を行いました。選手自ら販売活動した場合は、得られた収入はチームの派遣費用にせず全て選手の収入に充当することで、選手のモチベーションを高める工夫をしました。販売したミニタオルの枚数は、アルペンスノーボードチームだけで1,300枚となりました。また、協賛会社からの冬季デフリンピック協賛金、選手の勤務先に対しても寄付金を集めるなど、チーム一丸となって資金造成活動を行いました。

■メディアに対する啓蒙活動（2014.11～2015. 2）

冬季デフリンピックの知名度を高めるために新聞社、出版社等100近くのメディア社に対して冬季デフリンピックの概要説明、日本選手団のPRを含めた啓蒙活動を行い、雑誌等にも紹介されました。（月刊スキージャーナル、月刊スキーグラフィック）また、国内強化合宿においても、地元ローカル新聞社に強化合宿の取材申し入れを行うことにより、強化合宿に数社の新聞記者に来ていただき、地域ローカル版に冬季デフリンピックに向けて頑張っている選手たちの様子を掲載することができました。（北海道新聞社、信濃毎日新聞社、下野新聞社、読売新聞）

■国内外強化合宿（2014. 4～2015. 2）

日本代表選手を中心に、海外（オーストリア国）

強化合宿を1回、国内強化合宿を9回、その他臨時強化合宿を数回実施しました。

⑧反省・まとめおよび次大会に向けた取り組み・改善案

大会を終えて真っ先に感じたことですが、本部スタッフのきめ細かいサポートが無ければ、今大会の派遣は成功しなかったと思います。派遣費用のコスト見直しからピザ発給を含む渡航手続き、健康調査、チームウェアの手配、ロシア通訳者の手配、現地のワゴン送迎等々、本部スタッフには大変お世話になりました。また、競技中においてもオリンピックで選手経験のある鶴岡コーチから選手へのきめ細かいアドバイス、津賀アスレティックトレーナーの怪我防止のためのフィジカルトレーニング等々、チームスタッフがそれぞれのミッションを責任持って対応したことが、チームの好成績に繋がったと思います。また冬季デフリンピック派遣が決まってから大会当日までの国内外強化合宿に欠かさず参加、それだけでなく自己の技術を更に高めるために他チームに混じって個人練習を積み重ねてきた選手たちにも頭が下がる思いです。冬季デフリンピックでメダルを目指す彼らの血のにじむような努力が無ければ、全員入賞という偉業は成し遂げることができなかったと思います。

チームの監督として反省しなければならないことはたくさんありました。まず、下見予算がなく本部スタッフが企画する下見に帯同できなかったことです。このため大会会場の把握に手間取り、選手のコンディションを最高潮に引き出せるような事前強化合宿の調整ができなかったことを反省しなければいけません。具体的には、競技会場が準備の都合上閉鎖になった場合に、別のところで練習できる代替スキー場の把握、選手たちのボード板やブーツ等リアルに不具合が生じたときに応急処置ができる現地スキーショップの把握です。次回は競技団体も大会会場の下見に参加できるよう事前に全日本ろうあ連盟側と調整、しっかり計画しておくことが大切です。また、大会期間中は、チームとしてのモラルを守らなければいけません。例え、恋人同士、夫妻であっても異性の部屋に自由に出入りするの第三者の目から見てもモラル面で問題があり、他チームから注意を受けました。このあたりをしっかりと監督できなかったことチーム監督として反省しました。その他、個人的にも集合時間に遅れる等色々な失敗があり、本部スタッフ、チームメンバーにご迷惑をおかけしました。

また、大会終了間際にインフルエンザB型が蔓延

し選手、本部スタッフにも体調を崩した人が続出しました。本部スタッフの配慮かどうかはわかりませんが、マスクの配布、帰りの飛行機でインフルエンザ拡散防止のため座席をバラバラに手配してくれたことに感謝いたします。

最後に、今回、選手やチームスタッフ、本部スタッフに自分の未熟さから色々と迷惑をかけたにもかかわらず、冬季デフリンピックのチーム監督という貴重な経験をさせて頂いたチームメンバー並びに冬季デフリンピック派遣委員会に感謝いたします。

コーチ 鶴岡 剣太郎

主に雪上での滑走指導を行いました。

現地入りしてから公式練習及びそれ以外における練習環境の情報が無く、会場で大会役員ヘスケジュールなどの確認から行いました。スノーコンディショニングを保つ為、公式練習予定が変更される等、想定した練習ができませんでした。しかし、そのような状況でもできる限りの情報収集など最善を尽くし、代表選手団に現地通訳者がいたことで非常に心強く感じました。

練習予定を変更せざるを得ない状況でしたが、選手達は落ち着き、これまで練習した滑りを大会で実行するだけという精神的な集中を感じました。

日本選手は公式練習で他のチームよりも早く会場に入り、万全の準備だったので集中し十分な練習ができたと思います。コースの方は私がこれまで経験した中でも非常に良いコンディショニングで、むしろ完璧でした。

公式練習の予定変更はありましたが、大会に向けたコースはそれを打ち消すほどの良い仕上がりでした。

天候とコースコンディショニングが非常に良かったので、選手達の滑りも非常に良く、選手達だけのコースを楽しんでいるかのようでした。コースは緩斜面から急斜面に落ち込み、緩斜面のあとゴールするという、この大会には十分なコースでした。これまでの合宿で徹底的に指導した緩斜面におけるライン取り、上下動、急斜面におけるライン取りに集中して指導しました。普段の練習は本数を増す度に滑りは良くなるのですが、最初の1、2本目では妥当な滑りができず失敗するという、選手達のそのままの滑りが出ていたと思います。しかしながら、早めに会場入りしたことで失敗も繰り返し練習することで減らす事ができました。

PGSレースでは非常に良い緊張と集中で各選手非常に良い滑りをしました。弱点だった1本目で各

選手それぞれが最高の滑りができていれば、決勝トーナメント一回戦から楽なレース展開になったのかもしれませんが。これまで練習した成果を少しでも多く出せた選手、失敗の少なかった選手は勝ち上がり、優勝した原田選手は勝ち上がる度に自分で修正し、強い滑りをしました。星奈々選手は指導した通りの滑りをしました。メダルこそ逃しましたが、一回戦で前回大会の金メダリストに勝利したことは非常に評価したいです。高嶋選手はこれまで大会になると練習の滑りが出せなかったのですが、今大会に向け練習したことが大きな自信となり大会中の滑りにも現れていたと思います。

PSLレースでも優勝した原田選手、本当に強かったと思います。これまで大会に向けた練習量やメンタルの強さは世界に相応しいものと思います。他の選手はメダル獲得にはなりませんでした。今持っている最高の滑りをしたと感じるレースでした。PSLレース前に体調を崩した選手もあり、2戦あるレースなので、期間中に緊張感と調整をさらに高めることで、結果にも繋がると思います。

各選手は2戦を通して、これまでの合宿で指導した滑りを実行していました。フィジカルトレーナー、監督と連携したことは指導面でとてもスムーズだったと感じます。レースではドクター、手話通訳者、他競技の選手達の応援もあり、選手も非常に気合いが入り熱いレースができたのではないかと思います。チームを応援してくださった全ての方に感謝致します。

アスレティックトレーナー 津賀 裕喜

①団体内の担当とその内容

私はアスレティックトレーナー（以下AT）としてアルペンスノーボードチームに帯同しました。ATは日本体育協会が定めた役割として①スポーツ外傷・障害の予防、②スポーツ現場における救急処置、③アスレティックリハビリテーション、④コンディショニング、⑤検査測定と評価、⑥健康管理と組織運営、⑦教育的指導、の7項目が掲げられています。アルペンスノーボードチームにおいても同様の内容が求められました。

デフリンピック参加期間の具体的な業務内容の代表的なものとして、①コンディショニングの管理、②ホテル内コンディショニング指導、③雪上での滑走間コンディショニング指導、④アスレティックリハビリテーション、⑤緊急事対応の準備、などでした。

コンディショニング管理として起床後に体重、体温、脈拍数、尿濃度、睡眠時間などの測定・記録・管理

をしました。これは国内の合宿やドライランド・トレーニング時期から選手に継続して指導しており、自身のコンディションを高めるために、また体調変動に適応するために指導を継続していました。海外遠征時には環境変化による身体的・心理的なストレスも多く、ベストパフォーマンスを発揮できないことも考えられます。選手にはデフリンピックで活用できるように国内から記録をつける習慣を持たせて、取り組みました。

ホテル内のコンディショニング指導として、今回の大会で雪上トレーニングの時間や量が制限されてしまったことから、運動量の減少が懸念されました。特に持久力や筋力、筋量の低下などが心配され、さらに日本からの長時間の移動に伴う時差ボケや柔軟性の低下などが予想されました。そのため、滑走できない日程ではホテル内でコンディショニング指導を行いました。

雪上での滑走間コンディショニングとして、ダイナミックストレッチなどを指導して競技成績の向上に尽力しました。こちらでも国内合宿や国内競技会で同様の指導をしており、滑走間で時間が開く場合や、寒冷環境で身体が固まってしまうのを防ぎ、パフォーマンス向上に貢献できる内容を選択しました。

アスレティックリハビリテーションは、選手の競技復帰を本部医師と連携してサポートしました。今回、デフリンピックまでの国内個人練習期間中に傷害を受傷した選手が1名おり、国内で本部常同医師の診察を経て、近隣病院への受診とリハビリテーションを指導しました。デフリンピック参加期間中は本部医師の診察と、ATからのアスレティックリハビリテーションの処方を行い、全レースに出場することができました。

緊急事対応の準備として、本部メディカルチーム、選手団本部と連携を図り、滑走中や練習中に事故が発生した際に即座に対応できるよう準備しました。また、本部医師と共にアルペンスノーボード競技会場のメディカルルームや、ドーピング検査が発生した際の対応方法なども打ち合わせが事前にできました。結果的に1名、ドーピング検査対象者となり、その際も円滑に引き継ぎができました。

②反省・まとめ

ATのサポート内容としてはもっとできることがあったはずだ、というのが正直な所感です。それと同時に、2014年春から帯同を開始してサポート体制を構築するのであれば、選手のこれまでのルーティーンを考慮しつつ、基礎的なコンディショニングを導入するには、このあたりが限界であったように感じました。4位に入賞した選手が2名いまし

たが、この選手がメダルを取得するために国内で、また現地でよりよいコンディショニングができれば結果は変わったのかもしれない、と感じています。ATとしてはデフリンピック期間中だけの問題ではなく、国内・ドライランドの段階でサポート内容をより良いものにできればピーキングが達成できたのではないかと思います。

選手 原田 上

3/24 ハンティ・マンシースクへ日本代表団と共に出発しました。

3/30 パラレル大回転（PGS）試合

3連覇金メダルを獲れるかどうかプレッシャーを大きく感じている中、予選のインスペクションで新品のブーツにひびが入ってしまいました。予選中にブーツが壊れたら決勝トーナメントに行けないと思い、パニックになりました。それでも、どうにかして予選は3位通過することができました。決勝戦はブーツのヒビの具合を見ながら挑み、金メダルを獲得できました。目標としていた3連覇が達成できすごく嬉しく思います。

ブーツにひびが入っていることを知った現地のボランティアの20代男性が心配してくれハンティ・マンシースクのお店に付きそってくれたおかげで修理することができホッとしました。

本部の皆さんや現地のロシア語の通訳者にも対応していただきました。本当にありがとうございました。

4/3 パラレル回転（PSL）試合

思ったより暖くなり、ワックス選びが大変でした。コーチがワックスなどのアドバイスやサポートをしてくれ、予選を3位で通過し、決勝トーナメントでは準決勝から最強ロシア選手と対決。最後まで苦戦しました。

準決勝1本目が痛感のミスでタイムロスされ、2本目で勝負するしかありませんでした。ブーツが壊れないように祈りながら、100%の実力を出しきれるようスタートしました。

先にゴールし2位とのタイム差が0.1秒差で勝ち越しという国際手話をみて決勝進出したのが分かった時の景色が目に焼きついて忘れられません。

決勝でまた最強のライバルであるロシア選手と対決しました。彼とは2012年ヨーロッパ・デフ大会以来の戦いでしたが、ミスがあったのも関わらず、タイム差で勝ち越し、金メダルになりました。

色々な事を経験させてもらい、冬季デフリンピックで素晴らしい結果を残せたことを誇りに思います。

スタッフ、役員からサポートしていただき、本当にありがとうございました。

選手 高嶋 弘貴

3/28～4/5、ハンティ・マンシースクでおこなわれたデフリンピックが無事終了しました。

応援してくれた皆さんの期待に答えられず、パラレル大回転（PGS）は予選2位で決勝トーナメント進出したが惜しくも4位となり、パラレル回転（PSL）は7位の結果となりました。

練習不足の結果となりましたが、自分の実力での滑りに悔いはありません。

チームの主将として、また日本選手団の主将として、大きな仕事を担う良い経験ができました。

本当に有難うございました。

選手 星 雄一

私は第15回冬季デフリンピック球技大会（スンツバル大会）以来、12年ぶりの出場でした。一旦、アルペンスノーボード競技生活から引退しましたが、金メダリストの方に引っ張って頂き、復帰出来たことが良かったです。金メダリストの方に感謝しています。スンツバル大会では、パラレル回転（PSL）7位パラレル大回転（PGS）4位だったので、今回の冬季デフリンピックで上位に行きたい気持ちがありました。

3月30日 PGS 7位

4月3日 PSL 8位

PGSは、自信のある競技でした。予想外の転倒で悔しい気持ちがありました。その転倒が無ければ、もっと上位をねらえたと思います。

PSLは昔は得意だったのですが、今回は何故か、自信がもてませんでした。何にも考えず、試合に挑んだほうが勝ちに繋がるかと思っています。今回の課題が見つけたので、今後もっとトレーニングして、解決していきたいです。年齢は関係なく、頑張れば、出来ることをアピールしたいと思います。

今回はメダルを逃してしまいましたが、冬季デフリンピックと言う舞台に2度も立つことができ、夫婦揃って入賞出来たことが大変嬉しく思います。ありがとうございました。

選手 星 奈々

私は今まで世界の舞台で戦ったことがありませんでした。なので良い成績を取れるのか、不安がありました。

3月30日 パラレル大回転（PGS） 4位

4月3日 パラレル回転（PSL） 6位

PGSは自分にとって、自信のある競技でした。予選では、予想外の転倒で焦りはありませんでしたが、決勝トーナメントで3位決定戦まで進むことが出来ました。絶対にメダルを獲りたいという気持ちが強くなりました。「勝ってメダルを手に入れる」そのプレッシャーが大きくなってしまい、転倒して4位で終わってしまいました。メンタル面が少し弱かったと思います。

PSLはいつもと違い緊張しすぎて、身体が硬くなってしまい、良い滑りが出来ませんでした。メダルを獲得するためにはもっとトレーニングすべきだと思います。強化合宿だけではなく、個人で健聴者のチームトレーニングにもっと積極的に参加し、刺激をたくさんもらうことが上達に繋がるかと思っています。そして、4年後の冬季デフリンピックにリベンジしたいです。

デフリンピックと言う舞台に立つことが出来、今回、メダルを逃してしまいましたが、夫婦揃って入賞出来たのは、スタッフや仲間、応援してくださった方、サポートしてくださった方の後押しがあってこそだと思います。今回の経験は一生、忘れることの出来ないものとなりました。ありがとうございました。

選手 手塚 久野

私は2月半ばに、日本でトレーニング中、接触事故により、右肩に大怪我をしてしまいました。本来はすぐ手術しなければならない状態でした。今まで応援してくださった人々のことを考えると、やるしかない！！と思い、手術を後回して、出場することを決めました。

受傷後の1ヶ月間は滑走練習を休みリハビリを優先しました。デフリンピック出発の2週間前からスノーボードのトレーニングを再開しました。右肩腕を固定してバランス調整の練習をしてきました。悪戦苦闘でしたが、デフリンピックに向けて良い練習が出来てよかったと思います。

3月30日のパラレル大回転（PGS）試合まで、公開ゲート練習を行い、滑走のバランス調整の再確認をしました。

本番のレースの予選二本目の時、スタートしてすぐ、怪我した右肩のバランスが崩れて転倒してしまいましたが、気合いを入れ直し、無事に完走できました。決勝トーナメントでは8位入賞できました。

次のレースまで、あと3日間。

転倒して強く打ってしまった右肩のケアと、強化筋トレ、2日間のゲート練習を行い、パラレル回転(PSL)の試合まで調整しました。

日本で怪我してから回転の練習が出来なかったもので、ロシアで初めて練習しましたが、何度も失敗したので、本番は大丈夫か不安がありました。

4月3日のPSL試合。

もう2度と転倒できないというプレッシャーを受けましたが、無事に完走し、7位入賞できました。

怪我の回復に努めつつ、回りの協力で出場したもののメダルは獲ることが出来ませんでした。期待していた日本国民の皆さんに心よりお詫びを申し上げます。

これからは、国際手話の重要性、デフリンピックPRなどの講演等を行ったり、若者育成指導のサポートをしていきたいと思います。

ハーフパイプ

監督 兼 技術コーチ 南雲 利仁

①選手の選考について

- ・今回のデフリンピック選手派遣について
チームの規則を遵守していること、FIS/SAJ公認大会出場経験があることを前提とし、以下の2項目を選出材料として検討しました。
- ・2013年にロシアで行われたデフ世界選手権大会の出場経験があること。また好成績を収めていること。
- ・2012年に行われたデフ全日本選手権で好成績を収めていること。

奥田選手

- ・2012デフ全日本選手権優勝
- ・2013年デフ世界選手権大会優勝
- ・2014FIS公認全日本スキー選手権大会21位（デフでは男子2位）

津久井選手

- ・2012デフ全日本選手権2位
- ・2014FIS公認全日本スキー選手権大会18位（デフ男子1位）

元スロバキアデフリンピック日本代表選手であり、国際大会出場経験はなかったが、滑走技術は奥田選手に劣っておらず2014FIS公認全日本スキー選手権大会では奥田選手より好成績を収めた。

奥田選手に劣らない実力の持ち主なので好成績を期待して選出しました。

岡本選手

- ・2012デフ全日本選手権3位
- ・2014FIS公認全日本スキー選手権大会22位（デフ男子3位）

津久井選手同様、スロバキアデフリンピック日本代表に当初内定した選手であり、国際大会は経験はなかったが、滑走技術は奥田選手や津久井選手に劣らない実力の持ち主なので好成績を期待して選出しました。

森選手

- ・2013年デフ世界選手権大会7位入賞
- ・2014FIS公認全日本スキー選手権大会27位（デフ男子5位）

実力は上位3名の男子には少々劣るが、国際大会経験があり7位入賞したので、上記3名に次ぐ好成績を期待して選出しました。

花島選手

- ・2012デフ全日本選手権2位
- ・2013年デフ世界選手権大会優勝
- ・2014FIS公認全日本スキー選手権大会11位（デフ女子1位）

大川選手

- ・2013年デフ世界選手権大会準優勝
- ・2014FIS公認全日本スキー選手権大会16位（デフ女子2位）

②成績一覧

男子ハーフパイプ 競技

津久井 康友	予選：4位	決勝：3位（銅メダル）
岡本 信彦	予選：9位	決勝：---
奥田 和夫	予選：7位	決勝：5位
森 仁秀	予選：10位	決勝：---

女子ハーフパイプ 競技

花島 良子	予選：1位	決勝：1位（金メダル）
大川 摩耶子	予選：3位	決勝：2位（銀メダル）

③成績と評価

- ・男女共に順当に勝ち上がり、男女合わせてメダル3つを獲得、選手の努力が実を結んだ結果だったと思っています。

④チーム（コーチ）体制と各コーチの役割

監督兼コーチ	南雲 利仁	元プロ（SALOMON 所属）
国内コーチ	小島 孝雄	元プロ（SPINY オーナー）
国内コーチ	藤沼 到	プロ（HEAD 所属）

* 3 名体制にて国内合宿開催

- ・国内合宿では、室内スキー場／バグジャンプ／体力測定と雪上に立てるまでの期間は行いました。

（JSBA 日本スノーボード協会 / PSA アジアスノーボード協会認定プロスノーボード選手）

- ・南雲 利仁（雪上トレーニング・メンタルトレーニング）
- ・小島 孝雄（雪上トレーニング・エアーマットトレーニング）
- ・藤沼 到（雪上トレーニング・フィジカルトレーニング）

⑤競技スケジュール（旅行スケジュール）

旅行スケジュール

2015年3月24日～2015年4月5日

競技スケジュール

	午 前	午 後	夜 間
3月26日	各自	コンディショニング	イメトレ
3月27日	各自	コンディショニング	イメトレ
3月28日	各自	コンディショニング	イメトレ
3月29日	各自	コンディショニング	イメトレ
3月30日	ストレッチ	公式トレーニング	イメトレ
3月31日	ストレッチ	公式トレーニング	各自
4月1日 （本番）	予選	決勝	

⑥大会の競技運営などの報告

- ・当初のスケジュールから若干のズレはありましたが、大体スケジュール通りでした。

⑦競技規則の適用（問題点など）

- ・SHPでの競技なのでヘルメット着用が義務付けられていました。
特に目立った問題点はなく、ジャッジ基準も明確に示されていました。国内ジャッジ基準と変わりなしでした。
ただ一つ問題点を挙げるならば、ジャッジ陣が全てロシア人と言う事です。通常国際大会では、平等にジャッジングを遂行する為に、国籍は混合されるのが通例です。

⑧大会参加までの準備状況

- ・2013年7月～2015年3月22日までの期間を合宿に当てる。
月に2～3回（1泊2日／2泊3日）のペースで開催する。
内容としては、夏場（室内ゲレンデHP）／（バ

グジャンプ）／（体力測定）等。

冬場（雪上トレーニングHP）／（国内大会へ参戦）等。

⑨反省とまとめ

- ・先ず初めに8年越しのデフリンピックという事で、各国のレベルがイメージ出来ないため、何処まで選手らに要求し、指導して良いものかとコーチ陣と悩んだ事を思い出します。

また約2年前にコーチと監督を引き受け、当時のレベルでは到底上位入賞が危ぶまれていましたのでコーチ陣と相談し、かなりハイペースで合宿を行う事を決定しました。

HPに必要な不可欠な技術・基本練習を徹底的に行い、飛ぶ事よりもしっかりと地盤づくりに主眼を置く事が重要でした。

上記、技術の他に『メンタルトレーニング・コンディショニングトレーニング』を大会前夜まで集中的に行う事で選手がBestを尽せる様にコントロールして行きました。

最終的には、個人スポーツですので、自分自身との戦いをする訳ですから、大会の空気感に飲まれてしまわない様に強い精神力を育てる事も重要でした。

今回の大会では、男子はアメリカが上位を独占する形になりましたが、決して日本代表選手は負けていなかったと思います。

技術力の差はさほどではなく、チャンスがあったと思います。

女子においては、日本代表選手と他国の選手との実力の差は若干ありましたが、日本選手らに勝機を感じました。

その動機としては、日本選手らは男女共に地盤作りに主眼を置いて辛いトレーニングをして来ましたので、根本的なベースに他国の選手らと明らかに差が出ていたからです。

今回の好成績を元に、日本代表選手らには今後の『世界選手権・デフリンピック』と更なる飛躍を遂げて欲しいと切に思います。

今回デフリンピックへ参加した選手らは、地盤が出来ましたので、これから更なる進化が期待出来ます。

また、2年後・4年後には更なる高見を目指して欲しいとも思います。それだけ期待出来る選手らがいるという事です。

現在のハーフパイプ日本代表の選手層は厚く、世界的に観てもレベルが高いと思います。

今回、私が監督を引き受け感じた事は選手育成に繋がる予算と指導者を準備する事も重要な事だ

と思います。

若手育成の為に、より良い環境提供と運転資金の確保が更なる優秀な人材確保、トレーニング、選手の負担を和らげるのびのびと活動が出来る環境作りに繋がると思います。

そして、将来同じ様に目指す若手選手らに、『夢と希望』を与えられる選手育成が出来たらと期待致します。

選手 奥田 和夫

①成績に対する自己評価

1) 競技経験の中で1番最悪で悔しかったです。

『攻略のミス・経験のミス』が大きく響いたと思っています。

予選は、僕の難易度No1の技を1発目に出したい気持ちで、右側からドロップインして強気で攻めましたが、ボトムから壁に向かうR部分がクイックで壁もすごく高く、思うように滑れないまま、予選7位で決勝進出となりました。

決勝に残った選手は、みんな左側からドロップインして攻めていたので、僕もルーティンを変えし、難易度No1は2発目に出そうと決めました。

しかし、決勝1本目の滑走中に、急に前足（左足）に痙攣が出てしまい、理想のルーティンを描くことが出来ないまま滑走終了となりました。

結果は5位でした。

2) 2年前の第1回デフワールドスノーボード選手権大会と比べて、出場選手のレベルの高さには驚きました。

特にアメリカはエアの高さは日本とあまり変わりありませんが、難易度の高い技（スピン縦回転など）の着地する安定力が日本と比べて高かったです。

②反省・まとめ・これからの抱負など

これからのステップとして、『メンタル強化を行う』、『難易度の高い技の完成度を高める』ことが必須だと考えます。

メンタル面では大会で思う様な結果が出なかったとしてもくよくよせず、『今回は運がなかった』『次の大会で頑張ろう』と気持ちを切りかえることが必要だと思います。

この大会で何がミスだったのか、反省点を整理し、それ以上は悔やまないようにします。

そして、2年後の第2回デフワールドスノーボード選手権大会に向けて、ベストライディングが出来るように、いくつかのルーティーンを事前に考え、

完成する様、練習に取り組みます。

デフリンピックは今まで経験したことがない凄い経験でした。5位入賞出来た事は、僕だけでなく、家族・会社のサポートそしてチームのスタッフたち・大会本部の関係者たちのおかげです。

デフリンピックに参加でき、アスリートとして最後まで戦い抜くことが出来た事に感謝しています。

選手 花島 良子

①成績に対する自己評価

8年前からずっと金メダルを目標にしてきたので、結果としては満足していますが、滑りの内容については自分の思い通りの演技ができなかったので、満足できませんでした。

②反省／まとめなど

今回は、今までに練習したことのない壁の高さ（6m）と上から見て左側が高め、斜度が18度という日本にはなかなかない難しいハーフパイプでした。予定では、公開練習は5日間でしたが、実際は2日間／1日2時間半しか練習できませんでした。あと1日公開練習できたら、ハーフパイプに慣れることができて高く飛べたと思います。しかしそれ以前にハーフパイプに慣れることができず、また壁が思っていたより高く、最後まで壁を登りきる為にはスピードが必要になるため、怖くて突っ込めない自分がいました。それを克服するためにはイメージトレーニングとスーパーハーフパイプに慣れる必要があると感じました。

今回は公開練習は短かったものの、南雲監督のおかげで、練習できなくても外へ行って歩いたり、ストレッチをみんなでやったりと滑れなくても身体を動かすことが出来ました。また、イメージトレーニングは、実際に滑っているのと同じように効果的な練習であることが身に染みて理解できました。

スノーボードハーフパイプは個人競技ですが、今回のスノーボードハーフパイプチームの皆は、いつも一緒に練習をしてきたからこそ、ライバルとしてチームとして励まし合ったりできました。チームワークはとても良かったと思いますし、仲間には感謝しています。

選手 津久井 康友

①成績に対する自己評価

決勝1本目は、81.0ポイント。

ルーティンは、FSリーン→BSジャパン→FSエアーターン→BSジャパン→FS540メランコリー。高さもあって、安定した滑りが出来たと思っています。

一番大切なのは、1本のパイプラインで繋げるような滑りですが、グラブのメリハリが足りませんでした。

決勝2本目は、56.3ポイント。

理想のルーティンは、FSインディー→BSトゥーク→FS540メランコリー→BSアッパーデッキ→FSロデオ540→BSメランコリーでしたが、体力を消耗してしまい、維持できなくなってしまって理想のルーティン全てが出来なかったことが悔しいです。

予選は14人中4位（5カ国）、決勝は8人中3位（4カ国）となりました。1位90.3点、2位84.0点は両方ともアメリカです。

自分との点差の理由は難易度が高い技とその数に差があったことです。1位の選手は4回の技のうち2つがFS540とFSロデオ540でした。2位の選手は5回の技のうち2つがFS540とFSアーリーウープでした。自分は、5～6回の技でFS540の1つだけでした。

やはり難易度の高い技が少なかったから、金メダル獲得できなかったのだと思いました。

②反省とまとめ

全体的に見れば、決勝1本目の方が安定しており、難易度の高い技が決まってよかったと思いました。決勝2本目は、やりたいルーティンに挑戦したが、練習の成果を果たすことが出来ませんでした。維持力と体力と集中力も欠けていたと感じています。

ラストスパートまでに保たないと次は勝てないと思っています。公開練習＋予選と公開練習＋決勝と合わせて、8～10本くらいの滑走に耐えられる体力が必要だと思いました。

反省点は、予選と決勝のルーティンがまったく同じだったので、攻略方法をミスしてしまったと思いました。

予選のルーティンは、安定して高く飛べる場所、スピンしやすい場所など把握しながら、決勝で出せる理想のルーティンを選択できるようにルーティンを考えた方が良かったと思います。

決勝のルーティンは、予選でできた良いルーティンを参考に、難易度の高い技と組み合わせたルーティンを決めることが必要だと思いました。

このようなルーティンを決めていく経験がまだまだ足りないと感じています。また、ひとつひとつの技の完成度を高めることが必要だと考えています。

そして色々なルーティンにチャレンジすることが

必要だと思っています。大会で色々な経験を重ねて、どんなハーフパイプでもすぐに対応できるようにこれからも努力していきたいと考えています。

選手 大川 摩耶子

①成績に対する自己評価

4月1日ハーフパイプ競技が行われ、予選では8人中3位で予選通過、決勝戦へ進むことが出来ました。

決勝戦では、69.7ポイントで8人中2位という成績を残すことが出来ました。

1位の花島選手は83.3ポイントで私の点数とは差が大幅に出ましたが、3位と4位の点数と私の点数はほとんど差が無く自分の実力不足を痛感しました。でも、私の実力は世界で2番目だと決定した事になりますし、誇らしく思います。表彰台に立ち、銀メダルを貰えたその喜びは一生忘れることはないと思います。

②反省・まとめ・これからの抱負など

自分がやりたいと考えていたパフォーマンスが出来なかったのが心残りでしたが、ここまで来れたことは人生の誇りの一つとなりました。

ハーフパイプの形がとても難しかったのですが、すぐ対応することが出来なくて自分の実力不足だという現実を叩きつけられました。

どんなパイプでもすぐ対応出来るには、スノーボードの一番重要である基礎の滑りができていれば良かったのですが私には基礎の滑りが非常に足りなく、自分の技量を甘く見ていた部分もあり、自分の技術不足を痛感しました。

大きいパイプや、小さなパイプや、形の悪いパイプなど、様々なパイプに対して、すぐに対応出来る技術を身につけなければならないと強く思いました。

世界のアスリートの実力もこの目で現実に見ることが出来ましたが、現状のままでは次回金メダルは厳しいと思いました。

上位に入る為には、更なる練習を重ねて、エアーの高さ、グラブ、スピンの完成度を上げて行かなければなりません。

今後はたくさん練習をこなし、次回のデフリンピックで更なるパフォーマンスを披露して金メダルを獲得したいです。

目標は金メダルしかありません。金メダルを目指し、私は日々精進致します。当然、技術だけではなく、メンタル面も鍛えなければなりません。決勝戦が始まるまでは、予選3位というリザルトにショッ

クを受け、動揺を隠しきれませんでした。気持ちを切り替えるのに時間がかかり、メンタル面の強さが私には足りなかったと痛感しました。

プレッシャーが大きくて抱えていた不安と緊張を取り除くのに時間がかかり、メンタルのコントロールが出来なかったことに対して、深く反省しています。でも、決勝戦では自分を信じてプレッシャーを克服し、パフォーマンス向上に繋げることが出来たかと思います。同時にパフォーマンスに影響もなく、自分に負けない強さを身に付けられたと思います。

ハーフパイプ競技は技術で競う勝負の世界ではありますが、その世界に生きるアスリートにとってはメンタル面も非常に重要な要素で、メンタル面で自分に負けてしまったら、最初から勝敗が決まった様なものになってしまうかと思いました。

この辺りは、これからの自分の中で強化する大きなポイントだと思っています。

メンタル面の課題を克服する為には自己理解から始め、自分自身を信じる気持ちを育て、努力によって周りとの差が付く事をやることで、それを信じて大会に臨むと自然と自信へと繋がると思います。トップアスリートに相応しいハングリー精神を持つアスリートになれるよう、良い方向へいけるよう努力します。

今回のデフリンピックで、色々な事を諦めず、乗り越えるという重要さを体験して、人生にとってもっとも素晴らしい貴重な経験が出来ました。普段学ぶことが出来ないこともたくさん学べて、自分自身も一回り成長できたと思います。

デフリンピックで「勝利」という喜びと、思う通りのパフォーマンスが出来なかった「悔しさ」の2つの感情はありますが、銀メダルを獲得し、笑顔で日本へ帰国することが出来たのは、日本の皆様の支え、応援があったからだと思っています。

今後も現役選手として、滑り続けていきますので、皆様への感謝の気持ちを常に忘れず、メンタル面も技術面も強く誰にも負けない選手になれるよう一生懸命頑張っていきます。

選手 岡本 信彦

①成績に対する自己評価

公開練習1日目にハーフパイプの形を早く把握できたため、ハーフパイプにうまく合わせながら少しずつ攻めて集中して練習できました。

公開練習2日目にフロントサイド360スピンの練習で着地の時に右足首の怪我をしてしまいました。

翌日が大会本番で、大会に出られるかどうかわか

らない状態でしたが、当日痛み止めの薬と注射を打ってもらい、大会にでることにしました。

ですが、やはり痛みは完全に無くならず、本番では理想通りの滑りがうまくできませんでした。その結果、9位となり8位以内に入ることができませんでした。

②反省／まとめ等

スケジュールでは、ロシアに到着した次の日から6日間トレーニングの予定でしたが、実際に練習できたのはフリーラン1日、公開練習（ハーフパイプ）2日間のみで、フリーランがあまりできなかったことが残念です。

公開練習2日目のときに、右足首を怪我してしまったことが悔しいです。

今回のデフリンピックのハーフパイプは、壁がとても高くで難しかったので、技やエアーの高さを出すことが出来ませんでした。

大きなハーフパイプでもっと練習しておけばよかったです。

これからは国内や海外の大きなハーフパイプでのトレーニングを積んで行きたいと思っています。

選手 森 仁秀

①成績に対する自己評価

3月31日にハーフパイプ公開練習を行いました。

これまでに滑った国内のハーフパイプの高さは5.5メートル以下でしたが、デフリンピックのハーフパイプの高さは6メートルでした。

壁が高過ぎてスピードを出すこと、高いエアーターンとスピンはとても難しく、公開練習だけではハーフパイプに慣れなかったので、練習時間が足りなくて不安でした。

ハーフパイプで納得できる練習はできませんでしたが、本番の日までの3日間、ホテルでイメージトレーニングを厳しく繰り返して本番に臨みました。

また、南雲監督の指導やアドバイスのお陰で、高いエアーターンを成功させようと強い意志を持つ事が出来ました。

4月1日、1本目は完走出来て9位になりました。2本目で8位以上になれば決勝に出場できるので、高いポイントを取るためにフロントサイドスピン540にトライしましたが、着地失敗しました。結果は予選で14名中10位になりました。メダルを取ることが出来なくてとても悔しかったです。でも、良い経験になりました。

5年前ハーフパイプチームに入った時は技術も知

識も全然ありませんでしたが、5年間頑張って上達する事が出来ました。
ありがとうございました。

②反省・まとめ・これからの抱負など

予選2本目でフロントサイドスピン540をやらな
いで決勝でトライすれば良かったと後悔しました。
スピンだけではなく、クラブもデフリンピックまで
に練習が足りませんでした。

次回の冬季デフリンピックを目指すか少し迷いが
ありますが、今回1位と2位になったアメリカ代表
選手に勝ちたい気持ちがあります。

そのためにはクラブと540以上のスピンを完璧に
出来るようにする必要があります。

カムイ御坂での練習や、バグジャンプ、ウォー
タージャンプ、スケートボードなどつかって厳しく
トレーニングを行いレベルアップできるよう頑張り
たいと思います！

初めてデフリンピックに参加しましたが、ハーフ
パイプ以外の競技を応援したり、他の国の選手たち
と交流したりしてとても良い思い出が出来ました。

今大会に派遣させて頂き本当に感謝致します。

クロスカントリー

監督 若井 陽介

①選手の選考について

1) 国際大会の出場

国際大会の成績は、自身のタイムが優勝者のタイ
ムの135%以内であること

2) 国内大会での入賞

ジャパンパラリンピックや全日本クラスの大会で
の入賞

上記のいずれかの条件をクリアした選手を代表と
して選考しました。

②成績一覧

スキーアスロン 男子 10 km+10 km

- | | | |
|-----|--------------------|-----|
| 1位 | Mayorov Vladimir | RUS |
| 2位 | Andriyishyn Andriy | UKR |
| 3位 | Mandziuk Pavlo | UKR |
| 14位 | 田崎富士夫 | JPN |

チームスプリント 男子

- | | |
|----|-----|
| 1位 | RUS |
| 2位 | UKR |
| 3位 | CHN |
| 6位 | JPN |

スプリント 男子

- | | | |
|-----|--------------------|-----|
| 1位 | Groshev Alexey | RUS |
| 2位 | Mandziuk Pavlo | UKR |
| 3位 | Pyshniak Volodymyr | UKR |
| 19位 | 田崎富士夫 | JPN |
| 20位 | 戸津勝由 | JPN |

スプリント 女子

- | | | |
|-----|------------------|-----|
| 1位 | Fedulova Anna | RUS |
| 2位 | Misharina Lyubov | RUS |
| 3位 | Pyshniak Alisa | UKR |
| 13位 | 山本智美 | JPN |

マススタート 男子 15 km

- | | | |
|-----|--------------------|-----|
| 1位 | Mayorov Vladimir | RUS |
| 2位 | Andriyishyn Andriy | UKR |
| 3位 | Ermilov Sergey | RUS |
| 16位 | 田崎富士夫 | JPN |
| 20位 | 戸津勝由 | JPN |

マススタート 女子 10 km

- | | | |
|-----|------------------|-----|
| 1位 | Fedulova Anna | RUS |
| 2位 | Misharina Lyubov | RUS |
| 3位 | Golovina Raisa | RUS |
| 13位 | 山本智美 | JPN |

③成績と評価

1) クラシカルレース (ロングレース)

最後まで諦めず、粘り強くレースをすることがで
きましたが、コースの状況に応じた滑走ができず、
グリップワックスをしっかりと効かせることができ
ていませんでした。また、コースの状況に応じた滑
走という点で、滑走技術の未熟さが感じられました。

2) フリーレース (スプリントレース)

1.5kmという短いレースだったため、スタートか
らゴールまで全力で滑りぬくことが求められる中、
それぞれが持てる力を発揮できました。しかし、他
国の選手と比べて爆発的なダッシュ力やパワーが劣
り、根本的なスピードに違いが見られました。

3) チームスプリント

個々の能力はもちろんですが、チーム力が求めら

れる中、タッチを円滑に行い、連携したレースをすることができました。

④チーム（コーチ）体制と各コーチの役割

1) チーム体制

選手3名（男子2名、女子1名）とワックスマン兼コーチ1名の4人体制

2) コーチの役割

- ・公式トレーニングの際の指導、アドバイス
公式トレーニングの中で、選手と共にフォームのチェックやコースの重要なポイントの解説、雪質の変化による対応の方法等を指導、アドバイス
- ・選手のレース用スキーのワクシング
- ・チームキャプテンミーティングの参加

⑤競技スケジュール

3/29

12:00 スキーアスロン 男子 10km+10km

4/1

10:00 スプリント 女子 予選

10:15 スプリント 男子 予選

12:04 スプリント 女子 決勝

12:14 スプリント 男子 決勝

4/2

11:00 チームスプリント 男子

4/4

10:00 マススタート 女子 10km

12:00 マススタート 男子 15km

⑥大会の競技運営などの報告

1) スケジュールの急な変更について

大会前に発表された大会スケジュールの予定が、大会直前で変更され、その変更がはっきりと各国に伝えられていませんでした。その予定に合わせて事前に準備をしたり、レースに向けての心構えをする選手にとって、直前の変更は大きな混乱を招くため、あってはならないことであると思います。万が一変更せざるを得ない場合は、その理由を明確にして早急かつ確実に伝達するべきです。

大会期間に入り、その日の天候や競技の進行状況に応じてベストなレースができるように時間を調整して運営されていたことは良かったです。その際のインフォメーションはしっかりと伝達されていました。

2) チームキャプテンミーティングの運営について

出席しない国や遅刻をする国があり、開始が遅れる等の不備が生じていました。また、ロシア語をロシア手話に通訳し、それを国際手話と英語に通訳を

するという方法でミーティングが進められていて、スムーズな情報伝達ができずに誤った理解をすることがありました。

3) 大会組織委員会について

大会組織委員会からのさまざまな情報提供が少なく、すぐに現地視察やトレーニングを開始できない状況でした。

4) 宿泊地について

各会場に近く、シャトルバスも頻繁に動いていたため便利でした。ホテルの食事については、大会期間中はほぼ同じメニューだったため、改善が必要と感じました。また、時間も競技時間に合わせて臨機応変に対応してもらえるとよかったと思います。

5) 競技会場について

スタジアムやコースがしっかりと整備されていて、良いコンディションでした。また、ワックスキャビンも各国に割り当てられ、広く快適に作業ができました。

⑦競技規則の適用

特になし

⑧大会参加までの準備状況

1) 別紙の通り、強化合宿を行ったり、大会に出場して自分の実力を確認し、レースの経験を重ねました。

2) 現地の気候を調査し、必要なワックスの選定をしました。

⑨反省・まとめなど

1) ワックスマン兼コーチとして

・テストスキーとワックススターがなく、正確なテストデータの収集ができませんでした。

→購入することが望ましい

・チームが持参したワックスの種類が豊富だったため、気温雪温の変化に応じて対応できました。

・選手とともに練習し、コース内の重要なポイントなどその場その場でアドバイスできました。

・レース当日は、ワクシングと選手サポートという役割を両立できませんでした。

→コーチとワックスマンは別人が望ましい

・選手のモチベーションをうまく引き上げることができませんでした。

・結果を残すことができませんでした。

2) 選手

- ・各自が体調管理やコンディショニングをしっかりとやっていたので、病気をすることがなくよかったです。
- ・ロングレースも最後まで諦めずに頑張りました。
- ・自分の競技に対して、もっと集中し食欲になるべきであると感じました。
(勝ちたいという気持ちを強く持つ)
- ・根本的な体力不足と技術の未熟さが目立ちました。

3) 日本選手団として

- ・各チームと選手団本部との連携が足りず、伝達不足による行き違いが多かったように思います。
→1日1回はミーティングを行うべきである

選手 山本 智美

①成績に対する自己評価

冬季デフリンピック競技大会に2度目の日本代表として出場させていただきました。今回は得意なフリー競技ということでスプリントとマススタートにエントリーしました。しかし、出発前に競技スケジュールにマススタートがフリー走法からクラシカル走法に変更されていることが判明し、現地に競技TDMで抗議しました。結果、競技種目を変更したことを認めましたが、当初の競技スケジュール通りへの変更は出来ないといわれました。

4月1日、1.5kmスプリント（フリー走法）の結果は、13位。予選通過12位まででしたが、目標12位以内に入ることが出来ませんでした。

4月4日、10kmマススタート（クラシカル走法）の結果は、13位。苦手であるクラシカルを棄権せず出場することを決め、目標通り完走することが出来ました。

②反省・まとめなど

4月1日、スプリント（フリー走法）は初挑戦でしたが、目標としていた12位以内の予選通過にならず、悔しい思いをしました。ワックスに関しては非常に良く滑っていました。良く滑りすぎたことで自分の滑りがアンバランスになってしまい、体力が先に消耗してしまいました。

4月4日、マススタート（クラシカル走法）は、自分のクラシカルの技術が未熟であることと、気温がプラスに近かったため、ワックス選択が非常に難しかったといえます。ワックスは、日向と日陰でグリップの効き具合が違っていくため、コーチから注意すべきポイントの指示があって気を付けながら滑

走しましたが、グリップの効き具合が上手く機能できず2回転倒してしまいました。

各国のクロスカントリースキー代表選手の年齢は、10代後半～20代後半が多く、技術が未熟であっても体力が勝る結果となりました。日本は若くて30代後半の選手なので、早く若手選手を見つけなければ次回のデフリンピックでのメダル獲得は難しいと思いました。

私達が経験したデフリンピックの素晴らしさを若いうちに伝えていく番だと思いました。

選手 田崎 富士夫

デフリンピックに出場するにあたり、成績に対する自己評価は60%です。

3月28日 開会式

選手団入場の際に、会場に集まった約5000人の観衆を見た瞬間身震いし、歓声を身体全体で感じました。観客席に日本の国旗を見つけ、多くの方が応援してくださっていることに感激しました。一生忘れられない素敵な思い出となりました。

3月29日 <個人>スキーアスロン20km（クラシカル走法10km＋フリー走法10km）14位

クラシカル走法で10km滑った後にフリー走法で再度10km滑る種目です。（旧名はバシュート）

自信をもって臨みましたが、スタートの直後から力が入りすぎて息苦しくなり、ペースを少し落としましたが、フリー走法に移行した後にはさらに足が重くなって、コースの長い上り坂に苦しみました。

4月1日 <個人>スプリント1.5km（フリー走法）19位

予選通過の基準となる12位以上を目指し、100%の力でスタートから上り坂ではクイックスケーティング、平地ではスーパースケーティング、ラビットスケATINGをしました。スキーもよく滑り、ゴールした後の結果を期待しましたが、電光掲示板の15位（ゴール時点）という表示に悔しさがこみ上げました。

4月2日 <団体>チームスプリント1.5km×1人3回（クラシカル走法）6位

チームスプリントでは2人が1周ずつ交代し、1人3周あわせて6周します。

私は2走目でした。1走目を担当した選手と力を合わせて頑張り、ワックスコーチにはよく滑るス

キーを用意して頂いたので、全力を尽くしました。しかし、トップには追いつけず、メダル獲得はできませんでした。本当に悔しかったです。

4月4日 <個人>マススタート15km（クラシカル走法）16位

スタート時間が12時だったため、気温が高くワックスの選択は非常に難しく大変でした。

スタートして序盤は調子がよかったのですが、コースの雪が重くて苦しくなり、徐々にペースが落ちてしまいました。しかし、最後まで諦めずに頑張り、日本応援団のおかげで完走することができました。

特にロシア、ウクライナの選手が強く、男女ともに表彰台を独占していました。ロシア、ウクライナでは、メダリストには国からオリンピック並みの大きな報酬があるそうです。

中国は8年前よりも格段に技術とパワーが増しており、非常に強くなっています。

私はチームの中で一番多い4種目にエントリーしました。1週間で4種目というスケジュールは、体力的にも精神的にも大変でしたが、一生懸命頑張りました。

クロスカントリースキー会場ではワックスルームが各国に1部屋ずつ用意され、コースも毎日しっかりと整備されていたので、今までで最高の条件でした。また宿泊は、選手村ではなく普通のホテルでしたが、ほとんどの出場国が同じホテルだったため、手話は違うけど他国の選手と身振りでコミュニケーションができ、よい経験となりました。

クロスカントリーチームは選手が高齢化しているため、若手選手の発掘、育成をすることが課題です。またコーチは強化合宿及び大会に積極的に参加できる体制を確保する必要があります。

皆様の応援が大きな力となりました。本当にありがとうございました。

選手 戸津 勝由

①成績に対する自己評価

4月1日私はスプリント（フリー）に参加し、4分34秒で25名中20位でした。

4月2日6チーム参加したスプリントでは日本人選手が、私ともう一人だけだったため、交替で3回ずつ滑りました。結果は残念ながら6位でした。交替のたびに若井コーチにワックス塗りを手伝ってもらいました。すべてのフリー競技で良いスタートができていました。

4月4日男子マススタート15km（クラシカル）に参加し、20位でした。レース中気温が上がり雪質が変わったため、スキーの滑りが悪くなり、力の必要なレースになりましたが、カーリングメンバーが応援に来てくれ、励みになりました。

②反省まとめ

日本全体では5つのメダルを獲得し本当に誇らしく思います。

12年前知人に勧められて、大会参加を志し、今回念願がかなっての初参加でした。日本選手団の最高齢での参加でした。昨年の夏ごろから強化合宿や全国大会に参加し、技術を磨き、今回の大会に備えてきました。精一杯の練習をしておりましたが、世界にはもっと強い選手も多くて、世界の壁の高さを感じました。とくにロシアはフリー、クラシカル共にとても強いと感じました。国内の練習でろう者からのアドバイスも受けましたが、もっと専門のコーチからは、指導を受けたかったです。コーチも忙しく十分指導してもらえなかったのが残念です。

今回の世界大会に参加できたこと、そしてコミュニケーションは難しかったですが世界の多くの仲間と交流できたことは私の人生で貴重な経験となりました。

カーリング

監督兼トレーナー兼通訳 宮原 麻衣子

①選手の選考について

現在、国内において競技カーリングを本格的に行っているチームは「チームデフ青森」だけです。2年前に北海道でデフカーリングのチーム（協会）が立ちあがりましたが、本格的な試合経験はほとんどありません。そのため「チームデフ青森」に所属しているメンバー（6名）からの選考となりました。そのうち選考から落ちた選手（1名）は、2年前の世界ろうカーリング選手権大会の参加経験を持つ選手でしたが、当時から体調不良もあり、定期的な練習には参加しておらず、そのため今回の選考対象から外しました。また、技術的にまだ十分でない選手がいたため、チームとしては4名のエントリーを希望しましたが、補欠要員が必要との全日本ろうあ連盟からの指導により補欠要員として1名を追加し、5名の選考結果となりました。

②成績一覧

下表参照。

③成績と評価

第1試合目は、地元ロシアとの対戦でした。観客席のほとんどがロシアチームの応援、しかも新ルールによる初めての試合のため、過度に緊張せず落ち着いて、チーム内でしっかりとコミュニケーションを取り、いつも通りの実力を出し切れるかがポイントとなりました。チーム全体のショット率ではロシア68.1%、日本が59.4%と下回りましたが、最終投手者であるスキップ（荒谷淳一）のショットが75%とかなり高く、さらにはWテイクアウトを要所所所で決めることができたため、8-9と僅差ながら初勝利を飾りました。2年前の世界ろう者カーリング選手権大会で2位のロシアを初戦で破ったことが大きな自信となり、その後、順調に勝ち進むことができたと思います。

第2試合は、韓国との対戦。第1試合を終え、ホテルに戻り昼食、しばし休息を取り、再度体を試合モードに切り替えなければならず、移動も慣れなかったため、調整にはかなり苦勞をしました。日本のショット率60.9%に対し、韓国は47.4%とミスが目立ち、日本ペースで試合を進めることができ、疲れが見えた中でも1-6と快勝しました。

第3試合は、対アメリカ。チーム全体のショット率（米65.5%、日66.6%）も、各プレイヤーのショット率も互角でした。前半はアメリカにリードされ、厳しい試合展開となったが、大量点を取られないように我慢し続けたことがチャンスにつながり、最終的に逆転することができました（8エンド目にはあやうく5点の大量得点を取られそうになりましたが、スキップが落ち着いてショットを決め窮地を脱することができました）。

第4試合は、ハンガリーとの対戦。リード、セカンド、サードのショット率はハンガリーが日本を上回っており、試合展開も後半に3点を許し逆転され

るという厳しい局面もありました。しかし、全体的にスキップのショットが72.5%と良く、再逆転。最終エンドのラスト1投でハンガリーの投球がミスショットとなり、7-6で勝利しました。

第5試合は、カナダ戦。没収試合となり、最終的なスコアは0-8で日本の負けとなりました。

第6試合はウクライナ戦。前半は0-2とリードを許すも、後半早々4点の大量点を取り日本が逆転。その後1点、3点と連続点を許してしまいましたが、9エンドで2点取り、最終エンドを同点先攻で迎えました。調子良くハウス内のナンバー1、ナンバー2の2個のストーンを置くことができましたが、これをガードしきれず、6-9で敗戦。

第7試合の相手は、ここまで全勝の中国。日本チームのサードのショット率がこれまでの最低（38.8%）となった中でも、好戦し、最終エンド1点リードで迎えました。ハンマー（後攻）にも関わらず、ショットがふるわず、ハウス内にストーンをためてしまったこと、更にはラストストーンを決められず逆転負けを喫しました。

ラウンドロビンの最終試合となる第8試合はスイス戦。世界選手権大会では2戦（うち1戦は3位決定戦）し、2回とも負け、メダルを逃すという悔しい試合をした相手です。その雪辱を果たそうと臨んだ試合でしたが、1エンド目から4点を失う苦しいスタートとなりました。しかし、日本チームも7エンド目には4点を取り好戦したのですが、やはり正確なショットが決まらず、最終エンドを9-9の同点でむかえ、日本先攻。しかし、サードのスルーショットでリズムを崩し、これでスキップのショットが苦しくなり決めることができず、スイスに敗退してしまいました。このスイス戦に破れたことで、日本チームのラウンドロビンの結果は4勝4敗となりました。

第9試合は、4勝4敗のロシアとのタイブレークゲーム。第8試合のスイス戦を終え、わずか30分で試合開始となりましたが、この試合に勝てば、決

	カナダ	ハンガリー	日本	スイス	ウクライナ	ロシア	アメリカ	中国	韓国	結果
カナダ		6-2	8-0	10-2	8-2	6-8	7-2	4-5	9-3	6勝2敗
ハンガリー	2-6		6-7	6-9	10-7	4-8	5-10	3-8	8-9	1勝7敗
日本	0-8	7-6		9-10	6-7	9-8	6-4	5-6	6-1	4勝4敗
スイス	2-10	9-6	10-9		9-3	8-5	9-4	8-9	8-7	6勝2敗
ウクライナ	2-8	7-10	7-6	3-9		3-7	7-5	2-7	9-5	3勝5敗
ロシア	8-6	8-4	8-9	5-8	7-3		10-5	8-10	5-9	4勝4敗
アメリカ	2-7	10-5	4-6	4-9	5-7	5-10		6-7	13-5	2勝6敗
中国	5-4	8-3	6-5	9-8	7-2	10-8	7-6		5-4	8勝
韓国	3-9	9-8	1-6	7-8	5-9	9-5	5-13	4-5		2勝6敗

※上位4チームが準決勝進出

※プレーオフ：日本 6-7 ロシア ロシアが準決勝進出

勝トーナメントに進出できる大切な試合なので、全員が集中して試合にのぞみました。結果的には、最後の1投ですべてが決まりました。ロシアのナンバー1のストーンをテイクアウトするか、またはドロウをするかで選手たちは迷ったようだが、難易度も高くかつ確率の悪いテイクアウトを選択してしまいました。最後の最後に日本チームの作戦ミスで、手にしかけていた決勝トーナメントへの切符をロシアに渡すことになりましたが、監督（コーチ）不在の日本チームの現状を考えれば決して責めることはできない1投だったように思います。

④チーム（コーチ）体制と各コーチの役割

4年前のデフリンピック・スロバキア大会でエントリーした監督は、その後スイスで行われた世界ろうカーリング選手権大会でも監督を務めました。指導方針等の観点から別のコーチを依頼したいというチームの意向があり、まず青森県カーリング協会へコーチ紹介を依頼しました。しかし、デフリンピックのスケジュール（年度末・年度初めに休みを取らなければならないという条件）をクリアできるコーチがなかなか見つからず、最終的には、2014年12月から国内での練習・試合のみ指導をするコーチ（3名体制）がようやく決定しました。主コーチには、試合等でチームの課題を見つけてもらい、作戦面でのフィードバック等もお願いしました。練習内容もいくつかアドバイスをもらい、それをひたすらこなすようにしました。また細かいところは、他のコーチ（2名）と一緒にってもらい指導をしてもらいました。

最終的にこのコーチらはデフリンピックに帯同できず、監督不在の状態に参加しなければならないという状況でした。しかしカーリング競技は、監督（コーチ）が欠かせない存在です。試合前のメンバー表を提出したり、スコア表をつけ試合分析を行ったり、最終的には、試合中に作戦に困った場合、各チーム1度だけ60秒のタイムが認められていますが、監督（コーチ）がいなければそのタイムも成立しません。このような監督（コーチ）の試合中の役割は大きいことから、最低限この役割をこなせるスタッフを帯同させる形となりました（実際にはトレーナー兼国際手話通訳者が監督も兼任する形）。

⑤競技スケジュール（旅行スケジュール）

3月23日（月）移動日

青森組（4名） 14：38新青森駅発（2名乗車）
→七戸十和田駅（2名乗車）→八戸駅（1名乗車）
→17：58上野駅着
愛知組（1名） 14：42岡崎駅発→名古屋駅

15：27名古屋駅発→東京駅着 17：27東京駅発
→17：34上野駅着

青森組と愛知組が上野駅にて集合→その後、ホテル日航成田へ

3月24日（火）移動日

10：00成田国際空港第1ターミナル北ウィング
4階Eカウンター集合 結団式及び移動

13：10成田国際空港出発→17：35ロシア・モスクワシェレメチェボ空港到着 チャーター便に乗り継ぎハンティ・マンシースク空港へ

3月25日（水）移動日

ハンティ・マンシースク到着 オリンピックホテルへ移動

チェックイン 荷物整理

ホテル周辺のスーパーマーケット
をチェック

3月26日（木）カーリング会場下見

ホテル周辺のスーパーマーケット
にて買い出し

3月27日（金）カーリング会場下見

ホテル周辺のスーパーマーケット
にて買い出し

3月28日（土） 15：15～15：45

TDミーティング（カーリング会場2階会議室において）

公式練習

17：00～17：15 Aシートにて

17：15～17：30 Bシートにて

17：30～17：45 Cシートにて

17：45～18：00 Dシートにて

18：00～他チーム練習見学

20：00～開会式

3月29日（日）試合日

第1試合10：00～ロシアV S 日本（Cシート）

第2試合18：00～韓国V S 日本（Dシート）

3月30日（月）日本チームは試合なし

公式割り当て練習 20：45～21：00（Bシート）

3月31日（火）試合日

第3試合10：00～アメリカV S 日本（Bシート）

第4試合18：00～日本V S ハンガリー（Aシート）

公式割り当て練習21：00～21：15（Dシート）

*キャンセル（試合が長引き、練習時間が遅くなったため、体力面を考慮し）

4月1日（水）試合日

第5試合14：00～日本V S カナダ（Dシート）

公式割り当て練習 20：30～20：45（Bシート）

*キャンセル

4月2日（木）試合日

第6試合10：00～日本V S ウクライナ（Bシート）

第7試合18:00～中国V S 日本（Aシート）
公式割り当て練習 20:30～20:45（Cシート）
＊キャンセル

4月3日（金）試合日

第8試合10:00～日本V S スイス（Cシート）
タイブレークゲーム14:00～日本V S ロシア（Cシート）

4月4日（土）カーリング準決勝観戦及びクロスカントリー日本チーム応援

4月5日（日）カーリング決勝観戦及びアルペンスキー日本チーム応援 荷物整理
閉会式

4月6日（月）移動日

オリンピックホテルからハンティ・マンシースク空港へシャトルバスにて移動 チャーター便にてモスクワへ 19:00ロシア・モスクワシェレメチェボ空港出発

4月7日（火）10:35成田国際空港到着 空港第2ビル11:48→東京駅12:43（青森組 15:20東京駅発→八戸駅1名降車→七戸十和田駅2名降車→新青森駅2名降車 愛知組 15:10東京駅発→名古屋駅 17:02名古屋駅発→17:34岡崎駅着）

⑥大会の競技運営などの報告

日本チーム第5試合目のカナダ戦において、日本の選手（1名）が補聴器をはずし忘れ、試合前の練習中、TDに補聴器をはずすよう指摘をうけました。すぐに補聴器をはずし、日本チームは練習を終えました。その後、カナダチームの練習を終え、試合開始となりました（試合は9－6で日本が勝ち）。しかし翌日、審判長からICSDオーディオグラム規則7.1.2Hearing Devices Violation and Penalty 違反を告げられ、カナダ戦における日本の勝利が無効となりました。これは、カナダチームからの抗議が認められたものであり、試合自体は没収試合となり、スコア0－8で日本の負けとなってしまいました。

補聴器の取り外しについては、チームの代表である荒谷淳一からはホテルを出る時に外すように、またお互いチェックするようにと選手たちに再三注意をしていましたが、本人にとってはついうっかりが取り返しのない結果になってしまいました。本人はもちろんであるが、チーム全体として猛省すべきだと思います。

⑦競技規則の適用（問題点など）

今シーズンから新しいカーリング規則が適用となっており、デフリンピックも新規則が適用されています。具体的には、WCA Rules of Play and

Competition のC8.STONE ASSIGNMENT/LAST STONE DRAW（2015年1月1日より有効）で、これまで各チーム練習後に1投とされていたLSDをインターン1投とアウトターン1投（それぞれ違うプレーヤーがデリバリーする）の計2投に変更となりました。さらには、各プレーヤーには最低投球回数が義務づけられており、今回のデフリンピックのラウンドロビンでは、1プレーヤーはイン・アウトそれぞれ最低2投球と義務づけられました。しかし、審判の中には、実際に投球したプレーヤーとは違うプレーヤーの欄に投球記録を記入したり、イン・アウトの記入を間違えたりすることままあったため、翌日、張り出されている各チームのLSD一覧表をチェックし、間違いがあれば審判室に訂正に行かなければなりませんでした。

また、これまでのGAME TIMINGは、各チーム73分ずつの持ち時間が与えられており、その中で作戦、デリバリーを行わなければなりませんでしたが、今回からは新ルールが適用となり、各チーム38分の持ち時間となりました。実際には、ストーンが動いている間はタイマーは審判によって止められるので、時間的な制約が新たに与えられた訳ではありませんが、これまでの73分タイマーに慣れていたもので、最初の試合では、日本の選手はタイマーの残り時間をかなり気にしながらの試合となりました。

⑧大会参加までの準備状況

2011年度

8月18日～20日

強化選手育成合宿

カールブレックスおびひろカーリングホール

10月2日

強化選手育成合宿 青森市スポーツ会館

10月8日～9日

北のまほろばカーリング大会

S トーナメント選 2位 青森市スポーツ会館

10月23日

青森県カーリング強化事業

11月12日～13日

イーハトーブフェスティバル

決勝トーナメント戦 敗退 岩手県立北青少年の家

12月17日～18日

青森県カーリング選手権トライアル戦

1回戦 敗退 青森市スポーツ会館

12月24日～25日

青森県カーリング選手権トライアル戦

敗退復活2回戦 敗退 青森市スポーツ会館

1月28日～29日
強化選手育成合宿 1勝2敗 青森市スポーツ
会館

2012年度

8月16日～18日
強化選手育成合宿
カールプレックスおびひろカーリングホール

10月6日～7日
北のまほろばカーリング大会
Sトーナメント選 4位 青森市スポーツ会館

10月21日
青森県カーリング強化事業 0勝4敗 青森市
スポーツ会館

11月10日～11日
イーハトーブフェスティバル
決勝トーナメント戦 4位 岩手県立北青少年
の家

12月8日～9日
ビクトリア杯大会 予選2勝2敗 盛岡市アイ
スアリーナ

12月22日～23日
青森県カーリング選手権トライアル戦
1回戦 敗退・敗退復活初戦 敗退 青森市ス
ポーツ会館

2月23日～3月2日
第2回世界ろう者カーリング選手権
ラウンドロビン 3勝3敗・決勝トーナメント
戦 敗退・3位決定戦 敗退 スイス／ベルン

2013年度

4月27日～29日
春のお花見カーリング大会
Gトーナメント選 優勝 青森市スポーツ会館

8月15日～17日
強化選手育成合宿 軽井沢アイスパーク

10月12日～13日 北のまほろばカーリング大
会
Gトーナメント初選 敗退 青森市スポーツ会
館

10月26日～27日
ビクトリア杯大会
決勝トーナメント初戦 敗退 盛岡市アイスア
リーナ

11月3日～4日
青森県カーリング強化事業 0勝4敗 青森市
スポーツ会館

12月21日～22日
青森県カーリング選手権トライアル戦

1回戦 敗退・敗退復活初戦 敗退 青森市ス
ポーツ会館

1月18日～19日
東北シニアカーリング選手権大会
1勝3敗 青森市スポーツ会館

2014年度

4月26日～27日
春のお花見カーリング大会
Gトーナメント2回選 敗退 青森市スポーツ
会館

8月14日～16日
強化選手育成合宿
どうきんカーリングスタジアム

10月11日～12日
北のまほろばカーリング大会
Bトーナメント選 優勝 青森市スポーツ会館

12月20日～21日
青森県カーリング選手権トライアル戦
1回戦 敗退・敗退復活2回戦 敗退 青森市
スポーツ会館

1月17日～18日
東北シニアカーリング選手権大会
1勝4敗 青森市スポーツ会館

⑨反省・まとめなど

前回のスロバキア大会が中止となったため、カー
リングチームとしては、今回が初めてのデフリン
ピック参加となりました。その間、日本チームは、
2年前にスイスのベルンで行われた世界ろうカーリ
ング選手権大会に参加。今回エントリーした9カ国
のうち5カ国（ロシア・カナダ・スイス・ウクライナ・
ハンガリー）は、多少のメンバー変更はあるが、戦っ
たことのあるチームであり、今回初めて対戦するの
が、韓国・中国・アメリカの3カ国。この世界選手
権大会での経験が、今回のデフリンピックにおおい
に役立ちました。TDとのコミュニケーションやTD
会議で確認すべきこと、試合の流れ、また何よりも
フルエンドとなる10エンドを1日1～2試合、何
日間にも渡って戦う際のコンディショニングとして
何が必要か、どんなことに注意しなければならない
かを経験していたので、ゲーム面においても生活面
においても動揺することなく落ち着いて臨めたよう
に思います。

結果的には、4勝4敗で決勝トーナメント進出で
きず、5位入賞という成績でしたが、5戦までは順
調に連勝できたことはこれまでの練習の成果がうまく
試合で出せたように思います。しかし、5戦目の
カナダ戦は、後に没収試合となり、そこから気持ち

を切り替えられずに連敗してしまいました。連敗中、何度も1勝をするチャンスはありましたが、精神的なダメージと体の疲労が後半の奮起に繋がらず、ショットもスweepもミスが目立ち、どの試合も最終エンドまでもつれ、僅差で涙をのむ結果となってしまいました。

しかしながら、日本以外の8カ国は、専門の監督（コーチ）を帯同しており、監督（コーチ）不在の日本チームが、それらのチームと互角に戦えたのは、特筆すべきことだと思います。カーリング競技は1試合中、60秒間のタイムアウトを1回取ることができます。それは、試合のポイントとなる局面で、どこにストーンを置いたら良いのか、デリバリーやスweepをどうしたらよいのかを監督（コーチ）に聞き、試合の展開を有利に進める大切な作戦会議です。また、そのタイムアウトの時間中に、チームワークを修正、リメイクしたり、選手たちが一息つくことにより、メンタル面でもプラスとなる大切なインターバルでもあります。そのようなタイムアウトが1度も取れずとも、氷上の選手だけで必死に考え、相談をしながら戦う日本チームの姿はとても印象的であり、他国のチームの監督（コーチ）からもお褒めの言葉をいただきました。

日本代表チームである「チームデフ青森」は、指導者不在の中でも着実に成長し、メダルも夢ではない位置に確かに立っています。4年後のデフリンピックでは必ずメダルを獲得するために今回見えた課題を一つ一つクリアしていきたいです。

選手 荒谷 淳一

①成績に対する自己評価

4勝4敗という結果で決勝トーナメント進出できず、5位入賞という成績でしたが、5戦までは順調に連勝できたことを振り返ると、これまでの練習の成果がうまく試合で出せたように思います。特に日本の初戦は2年前の世界選手権大会で2位となったロシアとの対決で、地元の声援もあり、かなりアウェーな環境で戦わなければなりませんでした。以前ロシアに勝利した経験があったので、「絶対勝てる!」と皆で臨み、幸先よい1勝を手にすることができました。これが大きな自信となり、連勝できたのではないかと思います。しかし、5戦目のカナダ戦では、練習中に補聴器をしていたことにより後に没収試合となり、そこから気持ちを切り替えられずに連敗してしまいました。連敗中決勝トーナメントの道となる残り1勝をするチャンスは何度もありましたが、ことごとくミスをし、どの試合も最終エ

ンドで決められず、僅差で涙をのむ結果となってしまいました。

②反省・まとめなど

ゲームにおいて（特に6戦目以降）、スキップ（指令）の指示通りの場所にドロウが決まらないというのが主な敗因だったと思います。例えば優勢に試合を進めることが多かったのですが、そこで必要となるガード（ハウスに入っている石を守るために置く石）もレベルの高い相手と戦う場合には、5センチずれてしまえば、そこを突かれてしまいます。そのような精密なプレーが、後半でできなかったことが連敗の原因だったように思います。今後は、どんな状況においても、正確なショットを打てるよう徹底的に練習すれば、次回の大会でのメダルは取れると思います。今回、あとちょっとでメダルに手が届くところまでいけましたが、補聴器装用違反のミスでメダルを逃してしまったことを代表者として深く反省しています。

選手 山上 勝美

初戦は地元ロシア。当然ながら応援する人達がギッシリと席を埋めていました。それを見てすごいなと思いながらも心の中では負けてたまるかと闘争心を奮い立たせる自分がいました。簡単に勝てる相手でもなく互いに一步も退かぬ試合展開となりましたが最終的には1点差で辛うじて勝利を手に入れる。幸先のよいスタートを切れた我がJAPANチームは波に乗り、続く韓国、アメリカ、ハンガリー、強敵カナダを破り破竹の勢いで5連勝!!予想もしていなかった事態に自分でもびっくりしめしかするとメダルに手が届くかと思ったのも束の間、チームを天国から地獄へと突き落とされるような衝撃的なことがありました。それは[補聴器使用による違反行為があった為カナダ戦の勝利は取り消し]との内容でした。

5連勝時点でロシアの新聞に“JAPANチームは優勝候補”と報じられ決勝トーナメント進出確実視されていただけにショックが全身を駆け巡りました。そこからチームのムードが一変し以後タイブレーク戦も含め4連敗。メダルを捕れるかどうかの運命の分岐点だったような気がします。

多くの方の期待を裏切ってしまう、また、日本代表という重責を担っている身でありながら自覚が足りず過去に例がない規約違反があったことはチームとして本当に悔いが残ります。外国のチームと対戦し、差は殆どないと思うし世界を恐れる必要はない

と感じたので、次回の大会を目指すメンバーには頑張ってもらいたいと思います。

今回の大会で一番印象に残ったのは開会式に参加できたことです。超満員の会場を日本の出番になった時に両手を振りながら楽しく入場でき最高の気分だったし式の演出にも感動しました。それだけにです。チームとしてメダルを獲りハッピーエンドで終えたかった。非常に悔いが残る大会になってしまい残念に思いました。

しかし、目標は果たせなかったけど特に緊張感を味わうこともなくいつも通り冷静に自分らしいプレーできたのは、良かったと思います。

選手 米田 義光

カーリング競技は9ヶ国でしたが、ラウンドロビンの結果は4勝4敗と決勝トーナメントに進むことはできず、5位となりました。

第1試合はロシア戦9－8と勝利、第2試合は韓国戦6－1と勝利、第3試合はアメリカ戦6－4と勝利、第4試合はハンガリー戦7－6と勝利、第5試合はカナダ戦9－6と勝利と信じられない5連勝で、モチベーションも上がり、世界選手権の経験と練習の成果が出ていると感じていました。

しかし、第6試合にウクライナ戦前に、ルール違反によりカナダ選は0－8と負けになると聞き、ショックでウクライナ戦6－9と敗退してしまい、第7試合は中国戦5－6と敗退、第8試合はスイス戦9－10と敗退と波に乗り切ることは出来ませんでした。

プレーオフ選は、勝たないと決勝トーナメントに行けない！と気持ちがあるの関わらずに、ロシア戦はライン通りのショットがきまらずに、最後の一投で外れてしまい、6－7で敗退してしまいました。準決勝トーナメントに進められず、5位入賞となりました。

これからはどんな状況にしても、ミスを少なくし、ラインも正確なショットを投げられるようにし、メンタルももっと上げて行かなければならないと思いました。

選手 荒谷 飛翔

出場チームは9チーム（日本チームも含む）でした。大会に向けていろいろな知識や技術などを習得

するために、いつもと違う練習場に行ったり、日本のいろいろな大会に積極的に参加し、多くのチームと対戦し、それぞれの考えを読みとる練習をしました。それを思い出しながら、本番に臨んだ結果、5位に入賞できました。また、リーグ戦では初戦から5連勝することが出来ました。それは大会期間中の自己管理や最後まであきらめないでチーム一丸となって戦った成果だと思います。

しかし、リーグ戦ではカナダ戦に勝ったにもかかわらず、補聴器装用問題で没収試合になってしまいました。デフリンピックでは大会中に補聴器を着けないことは知ってるのに深く反省しています。ドーピング関係に注目するだけでなく、補聴器をはずしているかチーム内でお互いに確認することも深く反省するとともに、再発防止に努めたいと思います。

選手 中村 鉄哉

参加9チーム中5位という結果に終わりました。予選リーグで4連勝した時点ではメダル獲得を期待していました。が、その後4勝4敗でロシアと並び、プレーオフの結果、ロシアに敗れ、決勝トーナメントには進むことができませんでした。

私はリザーブだったので余計に悔しく残念でなりません。試合を戦った選手の皆さんにはお疲れ様でしたと言いたいです。これからは選手同士でもっとコミュニケーションを深めて、突っ込んで話し合うようにしていきたいと考えています。意見がぶつかっても乗り越えて、チームワークを強くすることが大切だと思います。

試合の時、ストップウォッチでの記録係でした。選手がハウスをめがけて離れたストーンのバックラインからホッグラインまでのタイムを全員分記録しました。試合を見ていて気持ちは熱くなりましたが、会場は寒かったため、体の芯まで冷えてしまいました。

ロシアへ出発する前は、地元八戸ろうあ協会の皆さん始め、近所の方や親戚の方々から、たくさんの激励や応援をいただきました。試合の会場では、日本の応援団が日の丸を振って応援してくださいました。感謝しています。本当にありがとうございました。

デフリンピックに参加し、開会式や閉会式を体験できたことは大きな宝物になりました。これからは練習に励み、一つでも多く試合に出場できるようになりたいと思います。

資 料

①主なスケジュール

第18回冬季デフリンピック競技大会の派遣スケジュール

2013年11月10日	2013年度第3回理事会・第2回デフリンピック派遣委員会 選手団の編成に係る指針（選出基準）の最終確認・発表
2013年12月15日	JPC強化研修会（第18回冬季デフリンピック派遣に関する説明会）
2014年1月	予備エントリー数調査 旅行社見積もり依頼
2014年2月14～16日	第42回全国ろうあ者冬季体育大会
2014年3月7日～9日	2013年度第4回理事会・第3回デフリンピック派遣委員会 本部体制・旅行会社・ユニフォーム会社決定 競技団体へ派遣選手・スタッフの推薦に関する諸書類提出依頼 ・調査書 ・所属協会確認書 ・ユニフォームサイズ表
2014年5月7日	選手・スタッフ推薦名簿締切り
2014年5月10～11日	スポーツ委員会本委員会 選手・スタッフの選出基準調査
2014年7月13日	2014年度第2回理事会・第1回デフリンピック派遣委員会 選手・スタッフの内定 事務局スタッフの人選（医療スタッフ、翻訳、手話通訳等） 選手団ロゴマークの決定 日本ろう者スキー協会に参加手続き書類提出依頼 ・聴力検査書 ・健康診断書 ・ドーピング関係
2014年11月	2014年度第3回理事会・第2回デフリンピック派遣委員会 選手・スタッフの最終決定
2014年11月15日	説明会（監督会議）開催
2014年12月13～18日	事前調査（競技会場下見）
2015年2月8日	本部会議・説明会（監督会議）開催
2015年2月27日	最終エントリー
2015年3月5日	秋篠宮同妃両殿下ご接見
2015年3月15日	2015年度第4回理事会・第3回デフリンピック派遣委員会 派遣計画の最終確認
2015年3月23日	日本代表団 出発
2015年3月28日	開会式
2015年4月5日	閉会式
2015年4月6日	日本代表団 帰国

第18回冬季デフリンピック ハンティマンスィスク・マグニトゴルスク

日本選手団 必携マニュアル



大会期間：2015年3月28日（土）～4月5日（日）
派遣期間：2015年3月24日（火）～4月7日（火）

一般財団法人 全日本ろうあ連盟

第18回冬季デフリンピック 必携マニュアル ～目次～

【内 容】	PAGE
1 渡航日程の確認 ご出発当日のご案内 前泊のご案内 出発前の準備 出発から～帰国までの流れ 日本入国時の税関手続き	
2 日本選手団組織図及び危機管理ネットワーク図 第18回冬季デフリンピック日本選手団名簿	
3 結団式・解団式要項	
4 ミーティングについて 事務所の開所時間について 競技スケジュール	
5 現地一般情報 日本選手団滞在ホテル情報 旅行傷害保険 連絡先一覧 競技会場マップ	
6 役員・選手必携（必読） プロテスト（抗議）について ドーピング検査の手順 オージオグラム規則	
7 医療チームマニュアル（必読） 大会期間中に守っていただきたいこと 問診用紙	
8 報告書作成について	
9 緊急時の連絡方法について	
10 ISCD執行委員会一覧	
11 冬季デフリンピック技術規則	
12 連絡先一覧	
13 (参考)連盟への誓約書	

渡 航 日 程 の 確 認

下記表にて各自の出発日や帰国日をご確認ください。

日 付	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7
日本選手団総人数	50															
日本出発日(往路)ごとの乗組人数	49					1										
現地出発日(復路)ごとの乗組人数								1		2		46				
Alpine skiing	7															
1 田中 昭信	出	前泊	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田
2 佐藤 拓之	出	前泊	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田
3 多田 恵市郎	出	前泊	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田
4 佐藤 清典	出	前泊	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田
5 中村 拓大	出	前泊	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田
6 佐藤 大地	出	前泊	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田
7 小林 真生	出	前泊	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田
Alpine snowboarding	8															
1 土井 拓矢	出	前泊	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田
2 佐藤 拓太郎	出	前泊	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田
3 津野 拓郎	出	前泊	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田
4 前田 上	出	前泊	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田
5 佐藤 一	出	前泊	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田
6 佐藤 弘典	出	前泊	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田
7 佐藤 康之	出	前泊	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田
8 手塚 久野	出	前泊	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田
Half-pipe	7															
1 佐藤 利仁	出	前泊	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田
2 佐藤 拓次	出	前泊	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田
3 佐藤 拓次	出	前泊	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田
4 佐藤 拓次	出	前泊	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田
5 佐藤 拓次	出	前泊	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田
6 佐藤 拓次	出	前泊	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田
7 佐藤 拓次	出	前泊	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田
Cross country	4															
1 佐藤 拓次	出	前泊	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田
2 佐藤 拓次	出	前泊	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田
3 佐藤 拓次	出	前泊	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田
4 佐藤 拓次	出	前泊	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田

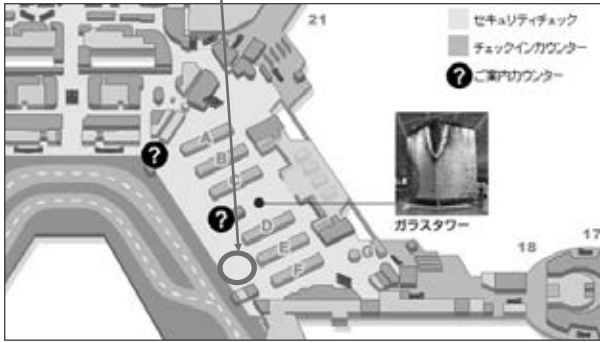
日 付	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7
日本選手団総人数	50															
日本出発日(往路)ごとの乗組人数	49					1										
現地出発日(復路)ごとの乗組人数								1		2		46				
Curling	6															
1 前泊 成田	出	前泊	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田
2 前泊 成田	出	前泊	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田
3 前泊 成田	出	前泊	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田
4 前泊 成田	出	前泊	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田
5 前泊 成田	出	前泊	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田
6 前泊 成田	出	前泊	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田
本部	18															
1 前泊 成田	出	前泊	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田
2 前泊 成田	出	前泊	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田
3 前泊 成田	出	前泊	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田
4 前泊 成田	出	前泊	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田
5 前泊 成田	出	前泊	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田
6 前泊 成田	出	前泊	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田
7 前泊 成田	出	前泊	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田
8 前泊 成田	出	前泊	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田
9 前泊 成田	出	前泊	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田
10 前泊 成田	出	前泊	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田
11 前泊 成田	出	前泊	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田
12 前泊 成田	出	前泊	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田
13 前泊 成田	出	前泊	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田
14 前泊 成田	出	前泊	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田
15 前泊 成田	出	前泊	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田
16 前泊 成田	出	前泊	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田
17 前泊 成田	出	前泊	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田
18 前泊 成田	出	前泊	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田	成田

※順不同・敬称略

3月24日(火) ご出発当日のご案内

成田空港集合時間 : **AM 10 時 00 分** ※時間厳守をお願いします。

集合場所 : 第1ターミナル 北ウィング 4 階 E カウンター前



搭乗手続き 成田空港第1ターミナルに到着されましたら、出発ロビー4階のEカウンター前までお越し下さい。ご集合後、本部スタッフがカウンターまでご案内致します。こちらでパスポートと航空券をお控えを配布いたします。配布完了後、チェックイン手続きへ誘導させていただきますので係員の指示に従ってください。その際、機内に持込を禁止されているものは事前にスーツケースの中に入れ、必ず鍵をかけてください。(「出発前の準備」参照)

利用フライト エアフロート航空 (SU) 261 便 13:10 出発/モスクワシェレメテフ空港 17:35 着
○飛行時間 10 時間 25 分/食事 2 回 ※飛行後、30 分程度で食事となります。

乗継① ハンティマンシースクへお越しの方
チャーター便 シェレメテフ空港⇒ハンティマンシースク空港

乗継② マグニトゴルスクへお越しの方
エアフロート航空 (SU) 1428 便 00:55 出発/マグニトゴルスク空港 5:15 着
○飛行時間 2 時間 20 分/軽食 1 回

荷物宅配 お荷物を宅配便にて空港へ送られる方は、3 日前 12:00(北海道・九州・沖縄は 4 日前)までに「ヤマト運輸」へ直接依頼して下さい。集合場所へはお荷物ピックアップ後にお越しください。
ヤマト運輸申込先 TEL: 0120-01-9625
ヤマト運輸 HP 申込: <http://www.kuronekoyamato.co.jp/kuukou/kuukou.html>
※お近くのコンビニまたはヤマト運輸の営業所に直接お持ち込みいただくこともできます。

前泊のご案内

グロリアアーツに前泊ホテルをお申込みされている方は下記ホテルまで各自お越し下さい。

宿泊ホテル名 : **ホテル日航成田** <http://www.nikko-narita.com/>

ホテル住所 : 〒286-0106 千葉県成田市取番 500

電話番号 : 0476-32-0032

チェックイン : フロントにてお名前をお申し出頂くか、お渡ししております予約確認書をご提示ください。なお、チェックインが遅くなる方は必ずホテルまで事前にご連絡をお願い致します。(チェックイン時間 PM15:00 より)※チェックインの際、翌朝の朝食券をお受け取りください。

お支払い : ご宿泊代金はご精算済みですので、現地でお支払い頂く必要はございませんが、お部屋でご使用頂いたお飲物代や電話代などは各自ご精算下さい。

地図 :



送迎 : 成田空港～ホテル間は無料シャトルバスが運行しておりますので、ご利用下さい。空港からの乗車場所・時刻表はホテル HP をご確認ください。
http://www.nikko-narita.com/access/bus_02.html

駐車場 : ご宿泊のお客様は 24 時間毎/300 円でご利用頂けます。(予約不可)
※ご利用の際は駐車券をお持ちの上、ホテル係員にお申し付けください。

出発前の準備

1. 外貨の準備

- お小遣いを現金で持つのは危険?
多額の現金を持ち歩くのは、非常に危険です。万一、盗難にあったり、紛失したりしてもまったく補償がありません。現金は必要最低限をご準備ください。
- 現金の準備
現地通貨は日本もしくは乗り継ぎのモスクワ空港にて事前に換金しておいてください。現地滞在都市では日本円から両替することができませんのでご注意ください。なお、余った現地通貨を現地で日本円に再両替できますが、両替できるのは紙幣だけになります。硬貨はどれだけ集めても両替ができませんのでご注意ください。
- トラベラーズチェック (T/C)
T/C は、旅行者用の小切手です。T/C は現金が必要な都度、銀行や両替所で換金できます。また T/C では、盗難にあったり、紛失したりしたときでも再発行できますので安心です。再発行する際には、購入時の番号の控えが必要ですので、使用記録を必ずとりましょう。ただし、T/C を再度現金化する際に手数料がかかることがあります。T/C は東京三菱銀行トラベルコーナーなどで購入できます。※現在、取扱店が減っておりますのであまりお勧め致しません。
- クレジットカード
クレジットカード (VISA、MASTER など) が 1 枚あると便利です。海外では、現金を持ち歩くことが少なく、ほとんどのお店でかなりの小額からでもクレジットカードが利用可能です。盗難・紛失の際にも電話一本ですぐにカードの利用を停止することができます。また、為替のレートも一般に銀行や両替所よりもよく、利用した分しか引き落としがされませんので両替をし過ぎる心配もありません。

2. 機内持ち込み手荷物について ※重要です。

- 制限について
機内持ち込みの手荷物は **1 個(縦 55×横 40×高さ 25cm 以内 5kg まで)** となっております。また、その他にノートパソコン・書類・バッグ・ハンドバッグのうち一つをお持ち込み頂けます。なお、制限を超えた場合は、空港チェックインカウンターにて超過料金が徴収されますのでご注意ください。
- 機内に持ち込み頂くもの
日本出国時に必要な物 : パスポート、搭乗券
手荷物にした方がよい物 : 現金、T/C、貴重品、壊れやすい物、機内で使用するもの
機内にあれば便利な物 : スリッパ、ガイドブック、メモ帳
ノートパソコン、携帯電話、ムービーカメラ、カメラ、MP3 などの高価なパーソナルデジタル製品、宝飾品、骨董品、貴金属類などの貴重品は受託手荷物に入れ、直接機内にお持ち込み下さい。航空会社では貴重品の紛失または破損の損害に対していかなる責任も負いません。
- 機内に持ち込めないもの
危険物 : あらゆる種類のはさみ、刃物など先の尖った鋭利なものなど危険物になり得るもの。
液体物 : あらゆる液体物(ジェル状、ペースト状のものも含む)
液体物を機内に持ち込む際には各液体物を 100ml 以下の容器に移し、これらの容器を 1 個以下の透明なジップロック式の袋<最大 16cm×22cm> 入れ、空港の保安検査の際に別途検査を受ける必要があります。なお、機内に持ち込めるのは一袋までです。

3. お預けになるお荷物について

飛行機にお預け頂けるお荷物(スーツケース等)はできる限り以下に収めてください。

お一人様 **2 個**まで、**1 個あたり 重量 20kg まで/縦横高さの和 158cm 以内のもの**
制限を超えた場合は、空港チェックインカウンターにて超過料金が徴収されますのでご注意ください。
(安全上の理由から 32 kg を超えるお荷物に関しては貨物の取り扱いとなり、別途手続きや高額な料金が必要となる場合がございますので、1 個あたりの重量は 32 kg を超えないようご注意ください。)なお、超過料金は自己負担となりますのでご注意ください。超過代金はすべてをその場でご精算となりますので、超過が発生するようでしたら現金またはクレジットカードを事前にご準備ください。)

【注意①】 事前にご申告いただいたお荷物以上お持ちいただいても飛行機に搭載できないことがございますのでご注意ください。

【注意②】 可燃性・引火性のスプレー(コールドスプレー等)は機内への持ち込みも預け入れ荷物にもできませんので、一切お持ち頂かないようお願い致します。

4. アドバイス

- カバンは丈夫なものを
カバンの積み降ろしは乱暴ですので、なるべく軽く丈夫で鍵のかかるスーツケースをお選び下さい。
- 服装は軽快に! 靴は履きなれた物を!
気温の変化に対応できるように重ね着ができるものをお持ちいただくと良いでしょう。洗濯は手洗いが多くなりますので、簡単に手洗いできるものが便利です。
- いつも使い慣れたものが“必需品”
寝間着、洗面用具、バス用品(シャンプー等)、タオルなどは、日本のホテルとは異なり、必ずしも備え付けられているとは限りません。必要最低限は使い慣れたものをご準備ください。また、外国では医師の処方箋がないとほとんどの薬は買えません。自分で必要と思われるものについては、各自ご用意下さい。
- 電気製品“電圧、プラグ”に注意!
電気製品は電圧とプラグ(コンセント)の形状が日本とは異なりますので、現地でご利用になる際には変圧器とプラグアダプターが必要になります。
● 変圧器: 電圧を変換します。電圧は **220V** になります。
なお、電気製品自体が 220V に対応しているものは、変圧器は必要ありません。(ポータブルパソコン、デジタルカメラの多くは対応しています。)
詳しくは、お近くの家電店へお問い合わせ下さい。



5. その他お持ちいただくと良いもの

- ・パスポートコピー
- ・証明写真
- ・旅行用洗濯洗剤

出発から帰国までの流れ

1. 日本出発のご案内

エコノミークラスの預け入れ荷物は 2 個/1 個あたり重量制限 20kg、機内に持ち込むことのできる手荷物は 1 つが原則です(『出発前の準備』をご参照ください)。また、ハサミ、カンター、化粧用小型ハサミ、ライター等は安全上の理由から機内には持ち込むことができません。あらかじめ預け荷物にお入れください。
*規定範囲外の場合は、超過料金がかかりますのでご注意ください。

成田空港到着



各集合時間までに成田空港第 1 ターミナル集合場所までお越し下さい。※ターミナルやフライトの出発時間は変更になることがあります。空港に到着したら、掲示板でご確認ください。

搭乗手続き



搭乗手続き(チェックイン)は本部スタッフの指示に従って行ってください。こちらで目的地までのボーディングパス(搭乗券)と、クレームタグ(荷物預り証)をお受け取り頂きます。また、スーツケース(預け荷物)はここで預けます。
*ハンティマンシースクへお越しの方はお乗継いただくモスクワ空港で預けた荷物を一旦引き取ります。
*マグニトゴルスクへお越しの方は、お荷物を乗継地で引き出すことなく目的地まで運ばれます。なお、クレームタグは荷物紛失の際に必要となりますのでスーツケースを受け取るまでは大切に保管してください。
*搭乗券とクレームタグは目的地まで発行されていることを必ずご確認ください。

セキュリティチェック



カメラやパソコンはバッグから出し、ポケットは空にしてください。
*金属類のベルトや靴は脱いでください。
*液体物をお持ちの場合、こちらで没収されます。
*パスポートと搭乗券をご準備ください。

出国手続き



出国審査を受ける際にパスポート、搭乗券が必要になります。

搭乗

搭乗ゲートでは、出発時刻の 30～40 分前に搭乗案内のアナウンスがありますので、指示に従って搭乗を開始してください。

※空港へのアクセスについて

ご自宅から空港へのアクセスは、列車をご利用いただくことをおすすめいたします。バスや自家用車をご利用になる場合は、渋滞や事故等の可能性も考慮の上、大幅に時間に余裕を持ってください。フライトに間に合わない方の 9 割以上が列車以外の手段をご利用になった方です。

2. モスクワ・シエレメチェボ空港

乗継空港到着



機内に忘れ物がないよう手荷物をもう一度確認してください。

入国審査 Immigration



パスポートをご準備下さい。
*こちらで出入国カードが交付されます。カードは出国時に必要となりますので大切に保管してください。

荷物受取り Baggage Claim



出発時に預けたスーツケースが所定のターンテーブルから出てきますので、必ずここで受け取ってください。
*マグニトゴルスクへお越しの方は引き取ることなく通過してください。

税関 Custom

申告するものがない場合、そのまま通過頂けます。

※入国の際の免税範囲

200 本のタバコ、50 本の葉巻又は 250g のタバコ、1 リットルの酒類と 2 リットルのワイン、50g の香水と 100g オードワレ。手頃な価格の贈答

★出入国カード例 ※ご自身での記入は不要です。

A (Ships/Arrival) Российская Федерация Russian Federation		Республика Беларусь Republic of Belarus	
Миграционная карта Migration Card		Date/Date 46 06	No 0445818
Фамилия/Surname: Y. A. N. A. D. A. (11)			
Имя/First name: T. A. R. O. (12)			
Отчество/Patronymic: (13)			
Дата рождения/Date of birth (14): Day: 01 Month: 01 Year: 1970		Пол / Sex (15): Муж / Male (16) X Жен / Female (17)	
Страна/Passport Nationality (18): R U S S I A (19)			
Документ/Passport number: 9101234567		Номер/Visa number (20): 1234567890	
Цель поездки/Duration of stay (21): C/Purpose: 04 SEP 2013 - 10/30 SEP 2013 山口 太郎			
Подпись/Signature (22): (23)			
Страна в Российской Федерации/ Republic of Belarus		Страна в Российской Федерации/ Republic of Belarus	

◇ハンティマンシースクへお越しの方

※再度チェックインが必要です。

搭乗手続き

Check-in



パスポートをご用意の上、再度チェックインを行います。ボーディングパス(搭乗券)とクレームタグ(荷物預り証)をお受け取りください。
*搭乗券とクレームタグは目的地まで発行されていることを必ずご確認ください。

セキュリティチェック Security check



カメラやパソコンはバッグから出し、ポケットは空にしてください。
*金属類のベルトや靴は脱いでください。
*液体物をお持ちの場合、こちらで没収されます。
*パスポートと乗継の搭乗券をご準備ください。

搭乗 Boarding Gate

搭乗ゲートでは、出発時刻の 30～40 分前に搭乗案内のアナウンスがありますので、指示に従って搭乗を開始してください。

◇マグニトゴルスクへお越しの方

※そのまま搭乗ゲートへ向かいます。

セキュリティチェック Security check



カメラやパソコンはバッグから出し、ポケットは空にしてください。
*金属類のベルトや靴は脱いでください。
*液体物をお持ちの場合、こちらで没収されます。
*パスポートと乗継の搭乗券をご準備ください。

搭乗 Boarding Gate

搭乗ゲートでは、出発時刻の 30～40 分前に搭乗案内のアナウンスがありますので、指示に従って搭乗を開始してください。

3. 現地空港到着

目的地空港到着



機内に忘れ物がないよう手荷物をもう一度確認してください。

荷物受取り Baggage Claim



預けたスーツケースが所定のターンテーブルから出てきますので、ここで受け取ってください。

出口

出口を出たら、大会スタッフが出迎えております。スタッフの誘導に従って専用車へご移動下さい。

*空港のロビーはスリや置き引きの被害が多発するところです。貴重品などは手元から離さないように十分気をつけてください。

4. 帰国のご案内

エコノミークラスの預け入れ荷物は 2 個/1 個あたり重量制限 20kg、機内に持ち込むことのできる手荷物は 1 つが原則です(『出発前の準備』をご参照ください)。また、ハサミ、カッター、化粧用小型ハサミ、ライター等は安全上の理由から機内には持ち込むことができません。あらかじめ預け荷物にお入れください。*規定範囲外の場合は、超過料金がかかりますのでご注意ください。

チェックアウト



ホテルフロントでルームキーをご返却の上、チェックアウトを済ませてください。電話、インターネット、ミニバー等、有料のサービスをご利用になった方は清算を済ませてください。※パスポートはスーツケースに入れないようにして下さい。滞在ホテルから空港までは、大会組織委員会が用意するバスで送迎してもらいます。また当日の出発時間は現地でご案内いたします。

空港到着



チェックイン時には、パスポート・航空券控えが必要となります。

搭乗手続き

Check-in



パスポートをご用意のうえ、チェックインを行います。こちらでボーディングパス(搭乗券)と、クレームタグ(荷物預り証)をお受け取りください。
*搭乗券とクレームタグは目的地まで発行されていることを必ずご確認ください。

セキュリティチェック

Security check



カメラやパソコンはバッグから出し、ポケットは空にしてください。
*金属類のベルトや靴は脱いでください。
*液体物をお持ちの場合、こちらで没収されます。
*パスポートと乗継の搭乗券をご準備ください。

搭乗

Boarding Gate

搭乗ゲートでは、出発時刻の 30~40 分前に搭乗案内のアナウンスがありますので、指示に従って搭乗を開始してください。

5. モスクワ・シレメチエボ空港

乗継空港到着



機内に忘れ物がないよう手荷物をもう一度確認してください。

荷物受取り

Baggage Claim



預けたスーツケースが所定のターンテーブルから出てきますので、ここで受け取ってください。

搭乗手続き

Check-in



航空券控えとパスポートを提示して再度チェックインを行います。ボーディングパス(搭乗券)と、クレームタグ(荷物預り証)をお受け取りください。
*搭乗券とクレームタグは目的地まで発行されていることを必ずご確認ください。

セキュリティチェック

Security check



カメラやパソコンはバッグから出し、ポケットは空にしてください。
*金属類のベルトや靴は脱いでください。
*液体物をお持ちの場合、こちらで没収されます。
*パスポートと乗継の搭乗券をご準備ください。

出国手続き

Immigration



出国審査を受ける際にパスポート、出入国カード、搭乗券が必要になります。

搭乗

Boarding Gate

搭乗ゲートでは、出発時刻の 30~40 分前に搭乗案内のアナウンスがありますので、指示に従って搭乗を開始してください。

4. 日本入国

入国準備



税関申告の有無にかかわらず、機内で配られる『携帯品・別送品』の申告書に記入してください。また、別送品のある方は、税関申告書を2通作成してください。1通を税関に渡し、もう1通を自分で保管します。

入国審査



係官にパスポートをご提示ください。

預け荷物受取り



忘れずにお受け取りください。*荷物を受け取ったときにスーツケースに破損がないかご確認ください。破損があった場合は、クレームタグと一緒に、お近くの航空会社職員にお申し付けください。航空会社で修理をしてもらうことができます。なお、税関を出た後にお申し出になっても、航空会社は一切補償してくれません。

税関



免税範囲をこえない方は緑ランプの検査台へ、免税範囲をこえる方および別送品のある方は赤ランプの検査台へお進みください。

注意!!!
「携帯品・別送品」の申告書は、申告の有無にかかわらず提出の義務があります!

解団

入国手続および通関終了後、自然解団となります。

日本入国時の税関手続き

1) 免税範囲と税関

外国(日本の免税店を含む)で購入した品物を日本に持ち込む(輸入する)場合、一定の数量又は価格を超える場合には、原則として、以下の税金を納めていただく必要があります。

品名		免税範囲	免税範囲を超えた時の税額
酒類		3本 (1本760ml程度)	ウイスキー、ブランデー 500円/ℓ ラム、ジン、ウォッカ 400円/ℓ リキュール、蒸留酒 300円/ℓ ビール、発泡酒、ワイン 200円/ℓ
		日本製200本 外国製200本	7.5円/本
タバコ	紙巻	50本	一般税率 (35%~無税) *詳細は税関でご確認ください。
	葉巻	250g	
香水		2オンス (1オンス約28ml)	15% (腕時計、万年筆等の関税が無税のものは消費税のみが課税)
その他の物品		20万円 (1個で20万円を超える場合は、その全額に課税されます)	

*20歳未満の方は、酒類とたばこが免税になりません。

*上記の免税範囲を超えた場合で、1個(組)が10万円を超えるものには、上記以外の税率が適用される場合があります。

2) 携帯品の申告

税関申告の有無にかかわらず、外国から入国する全ての方が、「携帯品・別送品申告書」1通に必要事項を記入の上、税関に提出する必要があります。

3) 外国から送った荷物の申告

旅行中に、日本に送った荷物(別送品)については、携帯品の一部として、免税の適用や簡易な税率の適用を受けることができます。別送品がある時は、機内で「携帯品・別送品申告書」2通に必要事項を記入の上、税関に提出してください。

<大会期間中のミーティングについて>

大会期間中、下記ミーティングを行います。

1 全体ミーティング

1. 招集担当 団長もしくは総監督(マグニトゴルスク)
2. 招集対象者 選手団全員
3. 内容 選手団全体に関わる内容
4. 招集日時 結団式、解団式など決定しているもの他は未定。

2 監督ミーティング

1. 招集担当 団長もしくは総監督
2. 参加対象者 各チーム監督、本部総務担当(広報、翻訳、通訳)
3. 内容 TD会議結果の報告、情報交換など
4. 招集日時 週3回程度、日程については事務局から掲示。

3 事務局ミーティング(医療ミーティング含む)

1. 招集担当 総務もしくは総監督(マグニトゴルスク)
2. 招集対象者 本部スタッフ全員(医療担当者含む)
3. 内容 連絡・行動の確認
4. 招集日時 基本的に毎日開催

4 役員ミーティング ※ハンティマンシースクのみ

1. 招集担当 団長
2. 招集対象者 本部役員、関係者
3. 内容 発生した問題について
4. 招集日時 緊急時

<大会期間中の事務所などについて>

1 本部事務所：質問などあるときはこちらに来てください。

※マグニトゴルスクには設置しません。質問等ある時は総監督までお願いします。

1. 開所 / 閉所 朝8時～ / ～夜9時
2. 場所 ホテル内本部部屋

2 医療室：具合の悪いときにお越しください。

1. 開所 / 閉所 朝8時～朝10時 / 夜7時～夜9時 (いつでもおいでいただけます)
午後3時～5時 (不在時もあるので、受診の際は携帯で連絡をしてください)
2. 場所 (Room /)

※マグニトゴルスクでは清水医師の部屋もしくは各選手の部屋になります。身体の不調があったらまずは清水医師までご相談をお願いします。

現地一般情報 (2015年2月現在)

時 差	日本とハンティマンシースク・マグニトゴルスクとの時差 －4 時間 (モスクワとの時差 －6時間)
気 候	3月のハンティマンシースク平均気温 最高 －3.5℃ / 最低 －12.7℃ ※冬山は －20℃ 程度が予想されます。
通 貨	通貨単位はロシア・ルーブル、表記は p、 補助通貨単位はカベイカ、表記は k(1p=100k) 2015 年 2 月 1 日現在のレート 1ルーブル=約 1.7 円
チップ	ソ連時代はチップの習慣はなく、現在も強制ではないが、観光客がよく訪れるレストランなどではチップが期待されている。目安としては総額の 10%程度。一部のレストランでは 10～15%のサービス料が別途加算されており、その場合はチップを渡す必要はない。
物 価	ロシアの物価は高く、日本とあまり変わりません。 特に物価が高いモスクワで食事をする、1 回の食事が安いカフェや食堂でひとり 300P(約 750 円)、レストランではひとり 600P(約 1,500 円)、高級レストランではひとり 5,000 円～1 万円もかかります。 【物価の目安】2011 年資料に基づく ミネラルウォーター(500ml):15～30P 程度(約 45～90 円程度) ジュース:56～70P 程度(約 168～210 円程度) コーヒー 1 杯:100～300P 程度(約 300～900 円程度) 牛乳:40～50P 程度(約 120～150 円程度) ロシア製ビール:25P 程度(約 75 円程度) 新聞:12P 程度(約 36 円程度) タバコ(マルボロ):47P(約 141 円) ※1p=約 3 円にて算出。
飲料水	水道水は飲まない方がよい。ミネラルウォーターは比較的どこでも手に入るのをそれを買って飲むのがよいでしょう。
到着通知手続き	ロシアでは、外国人がホテルに滞在する場合、ホテル側は到着通知手続きを行う必要があり、そのためパスポートを一時預かります。手続き完了後、通知済みを確認する半券とともにパスポートが返却されますので、滞在中は携行してください。
安全とトラブル	パスポートや到着通知などを警察官がチェックする場合がありますので、常にパスポートを携行してください。 ※警察官と称して違反行為があったので罰金を現金で支払うよう要求されることがありますが現場で現金を要求することは違法行為なので支払いに応じないで下さい。
緊急電話番号	警察署 02、消防署 01、救急車 03

電話の掛け方	ロシア国内に掛ける	日本へ掛ける
日本からお持ちの携帯電話でかける場合	+ 7 のあとに電話番号入力	+ 81 のあとに市外番号「0」を除いた電話番号を入力
ロシアの電話から掛ける場合	8 のあとに電話番号入力	携帯電話の場合 + 81 のあとに市外番号「0」を除いた電話番号を入力 固定電話の場合 810 81 のあとに市外番号「0」を除いた電話番号を入力

日本選手団
日本選手団
日本選手団

日	5	4	3	2	1	31	30	29	28	27	26	25
日	日	土	金	木	水	火	月	日	土	金	木	水
日本選手団												
ICSD財団委員会イベント												
アルペンスキー(男子)												
アルペンスキー(女子)												
アルペンスキー(男子)												
アルペンスキー(女子)												
ハーフパイプ(男子)												
ハーフパイプ(女子)												
クロスカントリー(男子)												
クロスカントリー(女子)												
カーリング(男子)												

宿泊ホテル

【ホテルに泊いたら必ず行っていたこと】

チェックインしましたら、部屋に破損箇所や不具合がないか隅々まで確認してください。もし何かあれば、ホテルフロントに直ちにお申し出ください。（本部スタッフにも併せて報告してください）
なお、ホテルのお部屋の建つけは頑丈とは言えません。簡単に破損してしまう恐れがありますので十分に気をつけてください。万一、破損した場合はすぐに本部スタッフにお申し出ください。また、備品等を紛失しますと弁償しなければなりませんのでご注意ください。

ハンティーマンシスホテル：オリンピックホテル	
フロント	24 時間体制
	英語できるスタッフ（非常勤）
	貴重品や荷物の預かりは不可
ロビー階	売店あり 営業時間：朝 10 時～午前 2 時
	WIFI 無料で利用可能（WIFI は 1・2 階のみ）
	食堂あり プbuffe 形式
	ATM あり（クレジットカードでキャッシング可能）
ホテル設備	3・7・8・11 階に共用の洗濯機あり（洗剤の用意はありません）
	トレーニングジムあり
部屋設備	冷暖房・冷蔵庫・ドライヤーあり
	インターネットは有線のみ（有料 1 日 80 ルーブル、1 週間 200 ルーブル）
	バスタオル 1 枚、ハンドタオル 1 枚（3 日に 1 度の交換）
	アメニティは石鹸のみ
マグニトゴルスホテル：ユビュリアーナホテル	
フロント	24 時間体制
	ロシア語のみ
	荷物の預かり可能
ホテル設備	売店あり
	食堂あり プbuffe 形式
	洗濯機なし ※有料のランドリーサービスはある
	両替不可、ATM なし
部屋設備	暖房・冷蔵庫・ドライヤー・湯沸しポットあり
	WIFI あり（無料）
	バスタオル 1 枚、ハンドタオル 1 枚
	アメニティは石鹸のみ

旅行傷害保険

海外旅行保険のご契約内容

保険期間	開始	自宅出発日より（前泊含む）
	終了	日本帰着日まで
契約者名		一般社団法人全日本ろうあ連盟
タイプ名		A3
傷害死亡		3,000 万円
傷害後遺障害		3,000 万円
治療・救援費用		無制限
応急治療・救援費用		300 万円
疾病死亡		1,000 万円
賠償責任		1 億円
携行品損害		20 万円
偶然事故対応費用		5 万円
引受保険会社		東京海上日動火災保険株式会社

【選手・役員必携】

1 はじめに

デフリンピックに出場するにあたって、自分の技術の程度や海外遠征など、不安な状態にあると思われます。参加決定後、選手団本部、競技団体やコーチからいろいろと注意、指示があると思いますが、項目が多すぎたり、メモに書き落したりということがあつては、折角のチャンスを十分に生かせない結果になることも予想されます。ここでは、心構え、準備から帰国後までの内容を記しておきます。

2 心構え

- ★ 日本代表選手としての自覚を持って行動する。
- ★ 代表選手として悔いのないように練習する。
- ★ 大会参加の経験を生かし、後輩のために役立てる。

3 大会参加まで

- 1) 選手団本部やコーチからの連絡事項
 - ① 身体に関すること
 - ・ 健康状態の確認
 - ・ 常備薬、排便などの生活習慣チェック
 - ② 競技に関すること
 - ・ エントリー種目の決定
 - ・ 競技規則の熟知
 - 2) 生活態度に関して
 - ① 指示事項は必ずメモを取る。
 - ② 集団生活のマナー（ルール）を守る。
 - ・ 時間の厳守
 - ・ 私物の管理（持ち物に名前を付ける）
 - ・ あいさつの習慣
 - ・ 喫煙場所の厳守
 - ③ 生活習慣を合せること
 - ・ 食事、シャワー浴、ベッド（メイキングも含む）
 - ・ バランスのよい食事に気をつけること。
 - ・ 貴重品は各自で管理すること。
 - ・ 時間的、場所的にも制約を受けることが多くあるが、お互いのペースを尊重しながら、睡眠、食事、トレーニング、競技、応援、ミーティング、洗濯、排せつ等の生活リズムを自分でコントロールし、規則正しい生活に心がける。
 - 3) 所属するろう協会、居住する都道府県障害福祉課への連絡について。
 - ① 都道府県・指定都市の障害福祉課等と十分連絡を取り、挨拶などを欠かさないこと。
 - 4) その他
 - ① 国際手話に慣れておき、簡単な会話を学習しておくこと。

4 大会前までの練習について

- 1) 大会に合わせた練習計画を立て、質の高い練習をすること。
- 2) 初めての国際大会では、雰囲気慣れなかったり、あがつたりするので、各自で競技に集中する方法を持っておく。
- 3) 選手 1 人になっても競技に参加できるように、競技会の仕組みについて理解しておくこと。
- 4) コーチの指示をメモし、頭にいれておくこと。
- 5) 大会参加までの練習で、困ったこと、わからないことがあれば、選手団本部や競技チームに連絡、相談すること。
- 6) 練習終了時に身体をチェックを行なうこと。

5 ユニフォームの着用について

日本選手団として参加する者は、その自覚と誇りを持って選手団公式ユニフォーム（以下「公式ユニフォーム」）を着用しなければならない。

日本選手団より支給された公式ユニフォームは以下の通りである。

- 1) 共通ユニフォーム 屋外用スキーウェア（上下）、
- 2) 共通ユニフォーム 室内用ウェア（上下）
- 3) 共通ユニフォームの着用について
開会式、閉会式、表彰式は共通ウェア（屋外用スキーウェア上下）を着用すること。
結団式、解団式、移動は共通ウェア（屋内用ウェア上下）を着用すること。
※この共通ユニフォームは他人に譲ったり交換することはできません。
※靴は黒色または紺色に近い色で統一すること。
- 4) バッジ
選手団員は必ず 1 個を自分用として胸もしくは襟元に付けること。

6 大会会場で

- 1) 競技場、食堂、宿舎、その他の関係施設の位置を確認すること。
- 2) デフリンピックでは、雰囲気慣れなかったり、あがつたりするので、各自で競技に集中する方法を持っておくこと。
- 3) なるべく多くの参加者と親交を深めるように努力し、またそれぞれが、日本チームの一員として責任を持った行動をすること。
- 4) 自分の競技が終了しても、日本チームの他の人でまだ競技を控えている人もいるので、他の人への心づかいを忘れないこと。
- 5) 無断に宿舎、競技場を離れないこと、また、単独行動はとらないこと。
- 6) 部屋をきれいに使うこと。
- 7) パスポート、現金、貴重品の管理をしっかりすること。
- 8) 生水は飲まないこと。

7 毎日の報告について【重要事項】

- 1) 毎日の健康チェックについて
チームごとに選手・スタッフの体調を管理してください。毎朝チェックし、異常があれば午前

8時からのメディカルルームに当事者を連れて来てください。

2) 毎日の試合結果について

- ① 各チーム監督は毎日のチームの行動日程及びリザルトを宿舎に戻り次第、選手団本部に提出すること。
- ② 公式記録の発表は、選手団本部においてもインターネットで確認する予定。

8 メディアへの対応について【重要事項】

第 18 回冬季デフリンピック日本選手団ウェブサイト <http://www.jfd.or.jp/sc/km2015/>を公式報道サイトと定め、写真・映像・記事を発信します。世界でのデフリンピックへの理解が進むことを期待し、メディアに対し積極的に情報を提供します。各競技の選手・コーチも日本選手団として積極的な協力をお願いします。

大会期間中は団員によるインターネットなどでの日記・レポート・解説・ニュース・写真・動画等に関して、下記のとおりガイドラインを設けます。

なお、日本選手団広報の撮影した写真は、日本選手団ウェブサイトにて公開しますが、**撮影した全写真の著作権は連盟が持ち、個人的な譲渡は行いません。**

■各競技チームのウェブサイト・ブログ・フェイスブック・ツイッターなどについて

□認められる内容

- ①記事:各競技のトレーニング・練習・試合結果・報告
- ②写真:各競技のトレーニング・練習・試合などの写真
:日本選手団ウェブサイトに掲載された写真(ロゴマーク入り)
- ③動画:各競技のトレーニング・練習およびホテル・会場で撮影したもの。

□認められない内容

- ①記事:上記以外すべて
- ②写真:各競技で同意の得られていない他国チーム選手の肖像画像
- ③動画:試合・各競技で同意の得られていない他国チーム選手の肖像動画

■各選手・役員のウェブサイト・ブログ・ツイッターなどについて

□認められる内容

- ①記事:自身の競技や心情、体調、プライベートに関する内容
- ②写真:自身の肖像
:日本選手団ウェブサイトに掲載された写真(ロゴマーク入り)
- ③動画:プライベートタイムで撮影したもの

□認められない内容

- ①記事:同意の得られていない他の選手に関する内容
- ②写真:同意の得られていない他の選手の肖像写真
- ③動画:試合・トレーニング・練習の間に撮影したもの、同意の得られていない他の選手の肖像動画

※詳しくは別に配布するガイドラインを参考にしてください。

※デフリンピックの知名度をあげるため、積極的な情報発信を奨励することが本部の方針です。

(オリンピック・パラリンピックも同様の方針)

※人種、民族、宗教、性別、障害、あらゆる面で特定の者・グループを誹謗または中傷することは厳禁する。

※営利目的による情報発信は厳禁する。

■これらの条件遵守期間は競技種目に関わらず全員 2015 年3月24日～4月7日とする。

【競技中における抗議について】

- 抗議する場合には各競技チーム監督が責任を持って即時に抗議すること。
- 下記を熟読し、手順の流れについてつかむこと。
- 抗議する際の申し立て金については競技団体負担とする。
- 抗議後、総監督へ経過および結果を報告すること。

デフリンピック規則より DG24. 権限・判定権異議申し立ておよび上訴 (紛争)

1. ICSD会長または会長に指名された者は、主催国連盟（又は組織委員会）又は大会参加国連盟により提出された、大会に関係するあらゆる申立ての仲裁において最高権力を有する。
2. 試合会場において、試合についてだされた異議については、大会役員によって判断が下される。これらの審判の判断の対象となるのは、試合結果が決定してから2時間以内に英語で書面で異議を申立てた場合に限られる。紛争に関して、さらに明確にする必要であれば、該当する国際スポーツ連盟規則を参考にしなければならない。
3. 役員の決定に対する申立ては、抗議委員会に提出する。併せて評議員会で決められた額の申立て金を納めるものとする。
4. 抗議委員会の決定に対する申立ては、申立人である選手団の役員が、抗議委員会の決定後、4時間以内にデフリンピックの審査員団に対しておこなわなければならない。
5. 抗議委員会は5名からなり、1名は技術委員とする。他の4名は組織委員会が指名する。
6. 審査員団は5名で構成し、うち3名はICSD執行理事会が指名し、残りの2名は組織委員会が指名する。
7. 申立てが受け入れられた場合、申立て金は訴えを起こした選手団に返却される。
8. 聴力テスト及びドーピングに関する申立ては、（医療委員会、選手委員会などの主要代表者と協議の上）、ICSD執行理事会が判定権をもつ。

冬季デフリンピック規則より 11. 権限・判定権

11. 権限・判定権

- 11.1 ICSD 執行委員会は、組織委員会及び大会参加国連盟より提訴された冬季大会や試合に関するあらゆる訴訟問題に対して、最終決定を下すことができる最高権力を有する。
- 11.2 各競技において試合の審判員 (ground judges) に対する抗議は、ICSD が定める冬季デフリンピック抗議用紙に英語で記入して提出しない限り、審判員によって判定される。この抗議用紙は各競技ごとに定められた時間内に提出されなければならない。(各競技の技術規程参照)
- 11.3 競技役員 (official) の判断に対する抗議は、該当する競技の抗議委員会 (Protest Committee) の各委員に対して申し立てることが可能であるが、その際には 50 ドルの保証金を納める。
- 11.4 抗議委員会は抗議を受けてから競技ごとに定められた時間内に判定を下し、抗議を提出した連盟に対してすぐに判定の結果を通知しなければならない。
- 11.5 抗議委員会の下した判定に対して抗議する場合、その判定が下されてから 4 時間内に、抗議をする連盟の役員から審査員団に提訴しなければならない。
- 11.6 提訴が受理された場合、その提訴を起こした連盟へ 50 ドルの保証金が返却される。
- 11.7 聴力、ドーピング検査、選手の国籍問題に関する訴えは ICSD 執行委員会の単独判定とする。

【ドーピング検査の手順】

1. 全体的な考え方

ドーピング検査の対象競技者は、競技順位やくじで決定されます(従って、予告なしに通告されます)。

(1) 行動の監視

ドーピング・コントロール・オフィサー (DCO) からドーピング検査対象となったと通告を受けた時点から検査終了まで、選手の全行動は DCO から監視を受けることになります。

(2) 検査途中での異物混入を防ぐために

検査中は外部から検体(尿)への異物混入を防ぐために、容器の選択、採尿からボトルへの分注、ボトルの密封まで、選手本人と DCO 双方が確認した上で各操作が実施されます。検体は、密封された状態で検査機関に搬送され、尿の成分が分析されます。

(3) コーチ等の同伴

選手にはコーチやチームドクターなどの同伴者を1名帯同することが認められています。特に視覚障害のある選手や上肢機能に障害のある選手については、採尿も同伴者が手伝うこともできます。未成年の選手には、検査が正しく行われたかを確認するためにコーチを同伴することが強く勧められていますが、どうしても難しい場合には、DCO によりシャペロンを1名配置するなど、DCO と選手が二人きりで検査を行わないように配慮されています。なお、通訳は上記同伴者の人数に含まず帯同することができます。

2. 検査手順

以下は検査手順ですが、検査の際にはドーピング・コントロール・オフィサー (DCO) が丁寧に一つずつ手順を説明してくれますので、その指示に従って検査を受けてください。また、(財)日本アンチ・ドーピング機構 (JADA) のサイト上(ドーピング検査の流れ)に、字幕・イラストつきで手順が紹介されているので、必ず大会前に見ておくようにしてください。

1. ドーピング・コントロール・オフィサーから、検査対象者になったことを通告されたら、検査への同意を確認するための通告書欄に署名する(検査を拒否することは規則違反となる。)

* DCO から検査対象になった旨を伝えられます。通告後は、速やかにドーピング・コントロール・ステーションに出頭してください。表彰式や別種目へ出場する、メディアに対応する、ウォームダウンを行う、必要な医療処置を受ける、同伴者または通訳を探す、写真付きの身分証明書を探すなどの行動は、DCO にその旨を伝え、許可を受けてください。DCO あるいはシャペロン(検査対象者への通知およびドーピング・コントロール・ステーションまでの付き添いと監視を行う検査係員)の同伴があればこれらを行うことは可能です。検査には1名の同伴者(コーチなど)を連れて行くことができます。**検査を拒否することは規則違反とみなされます。**

2. 尿意をもよおすまでウェイトングルームで待機する。

* 検査室には安全なミネラルウォーターなどが用意されていますので、飲みながら尿意を催すまで待ちます。採取した尿量が90ml 以下の場合は、再度の採尿が必要です。

3. 待機中に、いくつかの採取カップの中から、使用するカップを自ら選ぶ。

* 必ず複数のカップの中から自分で選択します。破損や汚れがないか、気をつけて確認しましょう。

4. 採尿する。

* 同僚のオフィサーと一緒にトイレに入り、選手が正しく採尿しているかどうかを目で見て確認します。

5. 採取した尿を保管するためにいくつかの密封されたサンプルキットの中から、使用するものを自ら選ぶ

* サンプルキットには外箱に確認用のシールが貼ってあります。また中にボトル2本が入っています。あらかじめサンプルキットが密封されているか、また容器に破損がないか確認します。

6. 2本のボトルに、指示された量の尿を分注し、しっかりとふたをする。

* 指示に従い、自分で行います。

7. 熱った尿で、比重が測定される

* DCO が、カップに残った尿に尿スティックを浸して測定するか、または屈折計を用いて比重を測定します。

8. 検査7日以内に使用した薬物・サプリメントについて申告する。

* 大会前7日以内に使用した処方箋や処方箋のない薬および栄養補助食品類(サプリメント)を記載して下さい。吸入喘息治療薬(例えば吸入ベータ2作用薬、糖質コルチコイド吸入薬)を使用した場合、あるいは糖質コルチコイドの局所注射(関節内、関節周囲、腱周囲、硬膜外、皮内)をした場合は、診断名、使用した薬品名、および処方した医師の氏名や病院名などを記載して下さい(常時、薬名、サプリメント名とその成分がわかるものをリスト(日本語と英語)にして所持すること)

9. ドーピング検査公式記録書にすべての関係者が署名した後、控えを受け取る

* 選手と同伴者も記録書の内容が間違いないか確認し、署名をします。

10. その後の措置

* 結果は2週間程度で、公式検査機関を通して実施団体及び JADA に報告されます。結果が陰性であった場合には JPC および選手へは連絡は入りません。陽性の反応が検出された場合にのみ、JADA より選手へ直接通知されます。JPC にも連絡が入りますので、選手の所属競技団体にその旨を伝えます。その後、聴聞会を経て選手の処分(罰則)が決定されます。

【注意】
現在使用している「くすり」は、使用目的ごとに、名前、メーカー、薬品名、番号などを英語でリストにし、常に所持して下さい。(検査で必要となります。)

オージオグラムに関する規則

- 前文...2
- 参加資格に関する規則...2
- 定義とろうであることの証明...3
- オージオグラムの承認手続...3
- デフリンピック(あるいはICSD認定の競技会)...4
- 責任...5
- 発覚...5
- 違反と罰則...6
- オージオグラム・データベースで使われている記号の意味...6

1. 前文

スポーツ精神とは、人間の精神・肉体・心を祝い、以下の価値観によって特徴づけられるものである：

- 倫理感、フェアプレイ、正直さ
- 健康
- すぐれたパフォーマンス
- 人格と教育
- 楽しみと喜び
- チームワーク
- 専心と献身
- 規則や規約の遵守
- 自身および他の参加者の尊重
- 勇気
- コミュニティと連帯

ICSD は、「**スポーツによる平等**」というオリジナルのモットーを掲げ、オリンピック精神の本質をろう者とわからあう。

夏季・冬季デフリンピックおよび世界選手権などのICSD認定の競技会には、ろうおよび聴覚の選手だけが参加することができる。

正会員、準会員、地域連盟は、国際および国内のスポーツイベントにおいて、以下のオージオグラム規則を遵守する。

2. 参加資格に関する規則

夏季・冬季デフリンピックは、加盟団体である全国的なろう者組織のろうのスポーツ選手が集結する場である。デフリンピックおよびその他の ICSD 認定競技会の参加者は、以下のとおりでなければならない：

- 聞こえがよい方の耳の聴力が 55dB 以上の聴覚障害を有する (500, 1000, 2000 ヘルツの三つの純音平均、気導、ISO1969 基準) ろう者であること。
- 加盟団体である全国的な組織の会員であり、その国の国民であること。

選手は、ウォームアップ中ならびに競技中、あらゆる補聴機器、増幅器および人工内耳の体外パーツを制限ゾーンエリア内で使用してはならない。スポーツ競技において、音の増幅器の使用が有利に作用することは明白である、そのため、ウォームアップ中ならびに競技中は使用が禁止されている。「制限ゾーン」の範囲は、すべての競技において定義されている。詳細は、各競技の技術規則を参照のこと。

2ページここまで

3ページこれから

3. 定義とろうであることの証明

- 3.1. 「ろうであること」の定義は、良耳の聴力が55dB以上の聴力障害を有することである。(500, 1000, 2000ヘルツの三つの純音平均、ISO1969基準) 55-65dBの境界線の聴力については、慎重に審査すること。
- 3.2. 各選手の聴力審査については、各国のスポーツ協会が全責任を負う。
- 3.3. 各選手は、添付資料 1 の ICSD のオージオグラムの書式を用いなければならない。書式は、<http://www.deaflympics.com/forms/audiogram.pdf>からダウンロードすることができる。
- 3.4. すべてのオージオグラム検査は、以下の4項目すべてに関し、**それぞれの耳について**記入されなくてはならない。

1. 気導
2. 骨導
3. ティンパノグラム (鼓膜聴力検査)
4. アコースティック反射(リフレクソメトリー)
訳注：医学辞書で該当する訳語なし。
音響反射・耳小骨筋反射にあたるか。

要件に従わない場合には、承認が遅れることになる。

- 3.5. 全てのオージオグラムは、公式なものであり、虚偽偽りのない選手自身のものでなければならない。オージオグラムの信憑性については、各国のろうスポーツ協会が保障しなければならない。

4. オージオグラムの承認手続

4.1. 競技前:

- 4.1.1 新しいオージオグラムを提出する前にICSDに連絡し、当該選手がすでにICSDのオージオグラムデータベース中の自国の最新リストに掲載されているかどうかを確認する。選手名がリスト中にない場合、ICSD事務局は、その選手のオージオグラムのデータを保有していないということを意味する。
- 4.1.2 いかなるICSD認可の競技（夏季/冬季デフリンピック、世界選手権大会、地域の選手権大会を含む）においても、競技の**3ヶ月前**には新しいオージオグラムが提出され、かつ1年以内のデータでなければならない。オージオグラムの提出の遅れや、新規参加選手のオージオグラム不在の罰金は、1書式につき20米ドルである。
- 4.1.3 すべての 新しいオージオグラムは、各国のろうスポーツ協会によって、直接ICSDの本部事務局に送付されなくてはならない。
- 4.1.4 受領されたオージオグラムは、ICSDのデータベースに入力され、彼らが「**自国審査済み**」であることを示すために、「**N**」（国内）も入力される。
- 4.1.5 3.4に規定されたおりに記入されていない場合、充分な情報を記載して再申請されるまで、オージオグラムは「**INC**」（不完全）と入力される。
- 4.1.6 オージオグラムは確認のためにICSDのオージオロジストに送られる。
- 4.1.7 ICSDのオージオロジストは承認するものと危険/境界線上にあるものとを表示する。
- 4.1.8 オージオグラムが承認されると「**N**」の欄が「**C**」（CISS）に変えられる。
- 4.1.9 「**X**」記号がつけられた「危険」な選手は、大会期間中、ICSDのオージオロジストによって再検査される。
- 4.1.10 平均聴力55dB以上の聴覚障害という資格要件に当てはまらない選手は参加資格なしと判定され、「**DQ**」と書かれ、その後最低2年間はオージオグラムを再申請できない。

4.2. 競技登録時:

- 4.2.1 最終登録用紙には「選手のID番号」の欄がある。
- 4.2.2 ICSDのデータベースに登録されている選手は、当該箇所に選手のID番号を入力する。該当する選手は、オージオグラムを提出しなくてもよい。以下の例参照。

Family Name（姓）	First Name（名）	Date of Birth（生年月日）	Athlete ID Number（選手のID番号）
DOE	John	31 Jan 1975	12345
MCKNIGHT	David	5 May 1978	
SHARP	Alfred	10 Dec 1977	22678

上の例では、**DOE, John** と **SHARP, Alfred** はICSDのデータベースにオージオグラムがあるが、**MCKNIGHT David**はICSDのデータベースに入っていないことを示している。

- 4.2.3 データが不十分であることを示す「**INC**」あるいは資格がないことを示す「**DQ**」が記載されている場合には、参加は許可されない。

- 4.2.4 オージオグラムを提出していない者には参加資格を与えられない。

5. デフリンピック(あるいはICSD認定の競技会で)

- 5.1. 選手のオージオグラムが提出されていない場合、当該国の費用負担によって、聴力検査は大会会場において、アクレディテーション・バッジを受け取る前に実施する。（訳注：同一の文言が4.2.4.に移動。規則2.0では2.3.1.に記載）
- 5.2. 選手のオージオグラム・データベースが、各国のオージオロストによって検査されたことを示す「**N**」である場合、当該選手は大会期間中、ICSDのオージオロストによって再検査される場合がある。
- 5.3. ICSDのオージオロストによって検査・認証を受けた選手を示す記号は「**V**」となる。
- 5.4. ICSDのオージオロストは、すでに承認を受けている選手であっても、いつでも審査をおこなう権利を有する。（訳注：元となった文言が、規則2.0の2.3.5.に記載）
- 5.5. ICSDの役員および技術委員は、大会中、オージオグラム審査を求めることができる。選手は、最終の試合の終了後、同日あるいは次の日に審査を受けることができる。（訳注：同一の文言が、規則2.0の3.1.に記載）
- 5.6. 選手の聴力の状態に疑義が持たれる場合、ICSDはまず、選手のオージオグラム・データベースを、下記の要領に従って調べる。
- 5.6.1 当該選手が「**V**」で示されている場合、既にICSDによって検査されているため、ICSDのオージオロストがこれ以上の検査を行う必要はない。
- 5.6.2 当該選手が「**C**」「**N**」もしくは「**X**」で示されている場合、過去にICSDによる検査がなされていないため、ICSDは検査を行う必要がある。
- 5.7. オージオグラム審査は、試合のスケジュールを邪魔したり、変更させたりしてはならない。（訳注：同一の文言が、規則2.0の3.2.に記載）
- 5.8. 自らのチームの選手の審査時間を確保するのは、チームリーダーの責任である。（訳注：同一の文言が、規則2.0の2.3.2.に記載）
- 5.9. チームリーダーは、審査を受ける選手とともに決められた時間にICSDのオージオロジストと会う。選手に審査を受けさせるリーダーと選手は、パスポートまたはIDを持ってくること。（訳注：同一の文言が、規則2.0の3.3.に記載）
- 5.10. 予約を守らなかった場合、料金が課せられる。（訳注：同一の文言が、規則2.0の2.3.3.に記載）
- 5.11. オージオグラム規則にしたがってテストを受けずに大会会場を後にした選手は、参加資格を失う。（訳注：同一の文言が、規則2.0の2.3.4.に記載）

6. 責任

- 6.1. ウォームアップ中ならびに試合中にいかなる補聴器/増幅器ないしは人工内耳の対外パーツも制限ゾーンエリア内で用いようすることは、各選手の自己責任である。
- 6.2. 試合会場にはいる際、いかなる選手も補聴器/増幅器ないしは人工内耳の体外パーツの装着を認められない。すべての選手は、試合前の最後の練習では、補聴器/増幅器ないしは人工内耳の体外パーツをは

ずさなければならない。

7. 発覚

7.1. 聴力機器類の使用

もし選手が、ウォームアップ中ならびに試合中に補聴器/増幅器ないしは人工内耳の体外パーツを制限ゾーンエリア内で装着しているのを見つけた場合、ただちに、当該スポーツの技術委員と異議申し立て委員会にその旨を報告しなければならない。当該試合において承認を受けているリーダーおよびトレーナーだけが、補聴器/増幅器ないしは人工内耳の体外パーツの装着について、公式な異議申し立て文書を提出することができる。異議申し立て文書と共に、日時が刻印されたビデオによる、追加の証拠を作成しなければならない。伝聞による証拠は作成できない。

7.2. 参加資格認定期間中の聴力検査

選手が55dB以上の聴力障害を有していないことが、ICSDのオージオロストによって判明した場合、当該選手は参加資格を与えられない。選手は、役割を「役員」等に変更しても、いかなる形の参加資格をも与えられない。

7.3. 異議申し立てによる聴力検査、もしくはICSD役員/技術委員長による聴力検査

競技者が55dB以上の聴力障害を有していないことが、ICSDのオージオロストによって判明した場合、当該選手は参加資格を剥奪される。また、当該選手の出場したすべての競技において、失格とされる。当該選手が団体競技に出場していた場合、国際スポーツ連盟（ISF）の規則に従って、それまで出場していた試合は没収試合とされ、スコアも没収される。

8. 違反と罰則

8.1. 違反:

- 8.1.1 個人競技の選手が補聴器/増幅器ないしは人工内耳の体外パーツを使用した場合、当該選手は即時に競技から除外されなければならない。当該選手が他のスポーツや他の種目にも登録している場合、選手は、違反がおこなわれた種目についてのみ失格となる。

例A: 陸上競技：選手が100m、200m、400mに登録していたとする。その選手は、200mのレースで補聴器をつけているところを見つかった。このことは、この選手の100mおよび400mには、影響しない。リレーで違反がおこなわれた場合、リレーチーム全員が失格になる。

例B: バドミントン：選手がシングル、ダブルス、ミックスダブルスに登録していたとする。その選手は、ダブルスの試合で補聴器を使用していることが見つかった。このことは、その選手のシングルおよびミックスダブルの試合には関係しない。もし違反がチーム競技でおこなわれた場合、そのチーム全員が当該種目から失格になる。

- 8.1.2 チーム競技の選手が競技中に補聴器/増幅器ないしは人工内耳の体外パーツを使用していた場合、各競技の試合没収に関する規則にしたがって、試合が没収されて、チームは負けことになる。選手は、次の試合には、自由に参加することができる。試合の得点状況によっては、負けることが返って有利になる場合がある。このことを考慮にいれ、チームがゲーム没収のために得をするようなことは決してないようにしなければならない。

- 8.1.3 選手が違反を繰り返した場合、当該選手とチームは、すぐに大会から除外され、ICSDに報告され、執行委員会が定める一定期間出場停止になる。

8.2. 罰則:

- 8.2.1 これらの規則に違反した場合、技術委員とICSDの役員はすべての違反をICSD本部に報告する。失格した選手と（あるいは）そのチームに授与されたすべての賞品、賞、メダル、証書が取り消される。それに加え、罰金が課されることもある。

- 8.2.2 もし各国のろうスポーツ協会が一度以上、本規則3.1、3.2、もしくは3.5の規定違反を繰り返した場合、ICSD執行委員会は、当該ろうスポーツ協会を、2年から4年の間、当該スポーツへの参加停止を命じる場合がある。

- 8.2.3 ある国のろうスポーツ協会が資格を失っている間、そのろうスポーツ協会とそのチームは、ICSD認定のスポーツイベントに参加することはできない。

9. オージオグラム・データベースで使われている記号の意味

- V** - ICSDのオージオロジストによって検査され、有効とされた選手
- C** - ICSDのオージオロジストによって確認され、承認されている申請書
- N** - 自国のオージオロジストによって審査、承認されている
- X** - 危険/境界線上
- DQ** - 平均聴力 55 dBの基準を満たしておらず失格
- INC** - オージオグラムが不完全。詳細は 3.4参照

改訂版 - 2009年11月13日

【医療チームマニュアル】

◆メディカルスタッフから選手・スタッフの皆様へ

今回の大会ではメディカルスタッフとして医師・トレーナー・看護師が一緒にいます。
メディカルスタッフの仕事は、皆様の健康管理、病気や怪我の予防や治療を行います。

場 所 オリンピックホテル 部屋番号 ●● / ●●
診療・治療時間 8:00～10:00、19:00～21:00(予約なしで受診可)
15:00～17:00(往診もあるので、まず連絡を入れてください)
※マグニトゴルスクでは、清水医師にまずご相談をお願いします。

✦ メディカルルーム(整形外科)

医師と看護師が対応します。

- ・ 怪我をした方、具合の悪い方(病気)
- ・ 体の調子がいつもと違うと感じる方
- ・ 自分の持ってきた薬を飲む前に医師に相談してください。

眠れない時や気持ち落ち込んだ時も看護師に気軽に声をかけてください。

毎朝出発前までに(各チーム) → 選手・スタッフの体調を確認し、異常があれば
午前8時にメディカルルームへ患者を連れて行く。

診療時間外の急病時 …… 主に夜間や早期、試合中・練習中・試合後・練習後など

緊急連絡先

メディカルスタッフ: 倉田 (看護師) 号室
本 部: (事務局) 号室

競技会場で怪我をしたとき → メディカルスタッフ: 倉田 へ連絡

会場の医療救護所で治療を受ける

(チーム同行のスタッフまたはメディカルスタッフが付添い)

地元の医療機関に運ばれる

治療を受けた後ホテルに帰る

入院 → ホテルに帰る

問診票に記入したものを持参の上、メディカルルームで診察を受ける

- ※ 日本チームの医師は、競技会場や会場の医療機関で治療を行うことはできません。
地元の医療機関に付添うことはできます。
- ※ 各競技団体に配布した問診票に記入し、それを持参の上、メディカルルームにお越しください。
- ※ マグニトゴルスクでは、清水医師に連絡してください。

大会期間中に守っていただきたいこと

◆毎日健康をチェックしましょう

チームごとに選手・スタッフの体調を管理してください。毎朝チェックし、異常があれば午前8時から
のメディカルルームに当事者を連れて来てください。

◆自分の健康管理をしましょう

皆様から大会の前に提出していただいた診断書および基本健康調査用紙は大会前に選手の健康
状態を把握するための調査で、大会期間中に医師の診察が必要な場合に参考にするものです。
既往(持病)や大会前の怪我が大会期間中に悪化する場合があります。また、大会中に病気になる、
怪我をする場合があります。選手の皆様自身で健康管理をすることが大切です。早めに医師やトレー
ナーに相談することが健康管理です。

大会期間中に病気やけがなどについて心配なことは何でも医療担当者に相談ください。

うがいと手洗いをしてください。インフルエンザや風邪など、病気を予防します

- ・ 熱が出たときは、必ずメディカルスタッフに連絡してください。
- ・ 人ごみに出るときはマスクをしましょう。
- ・ 咳や熱が出たときはマスクをしましょう。
- ・ 個人(競技団体)で滞在日数分のマスクを持参しましょう。
- ・ マスクは1日1枚使い捨てましょう。
- ・ 個人(競技団体)で体温計を準備してください。
- ・

1) ドーピング申請について
大会において、ドーピング禁止薬の治療目的使用の適用措置(TUE)を必要とする選手の方は
申請をお願いします。遅くとも大会開始 4 週間前までに申請が必要です。該当する場合は、
各競技チームのコーチ・医療担当者に相談してください。

2) ドーピング検査対応の薬・サプリメントのリスト
現在使用している「くすり」は、使用目的ごとに、名前、メーカー、薬品名、番号などに
ついてリストを作成し常に携帯して下さい(ドーピング検査が必要となります)。
また、サプリメントに禁止物質が含まれていた場合、いかなる状況であれど救済措置はあり
ません。日本アンチ・ドーピング機構(JADA)認証製品を利用し、海外のサプリメントは決
して摂取しないようにしてください。

3) 服用薬などのチェック・持参、ドーピング相談について
大会を万全の体調で迎えるにあたって、普段使用している『常備薬』などを次のように準備
してください(医療サポート体制事務局では、外傷性と緊急性の高い時に使用するものは準
備しますが、それぞれにあった「くすり」を準備することは不可能です)。
・ 各自で日頃使用している「くすり」を少し多めに確保しておく。
・ 定期的な服用をしているもの以外でも、自分にあった「くすり」を持っていく。
・ 薬などの服用に関してはドーピングに注意し、各競技チームのコーチ、医療担当者に
必ず事前に相談すること。「飲んでしまったんですが大丈夫ですか?」と質問する方が
いらっしゃいますが、大丈夫かどうかはわかりません。禁止物質を含む「くすり」を

服用していることがわかったときは、出発前に強制帰国させる等の措置を取る場合も
ありますので、必ず事前に相談すること。

- ・ 出発前や帰国後に、急きょ病院にかかる可能性があるため、健康保険証(できるだけ写
してないもの)を持参すること。
- ・ どんな症状で病院に行くときでも自分がアスリートであることをきちんと伝えましょ
う。
- ・ 飲む薬だけでなく、塗り薬や貼り薬などであっても使用前に相談しましょう。
- ・ 漢方薬は避けましょう。
- ・ 美容に関する化粧品などにも禁止物質が含まれている場合があるので利用前にアスリ
ートであることを伝えて成分をチェックしましょう。

4) 健康管理について

大きな体調の変化は直ちに各競技チームのコーチ・医療担当者に連絡してください(事前に
処理できるのに、出発時でチェックされ出場できなかった例があります)。外国は、医療制
度が異なり、日本のように簡単に医療を受けることができないため、細心の注意が必要です。
特に現地での水・食事・油物・感染などには注意が必要です。

食事について:

- ・ 油っこい食事は胃腸が耐え切れず下痢につながるため摂取しすぎないようにする。
- ・ 生野菜なども、胃腸炎の原因となる可能性がある。
- ・ 禁止物質を含む食材が使われている場合があるので、現地では競技会主催団体または
国際競技連盟が指定するレストラン(宿泊ホテルなど)で食事をしましょう。また、
指定のレストラン以外で食事をすることは、必ず多人数で一緒に食事をするようにし
ましょう。
- ・ 現地で自己判断で薬剤・ビタミン剤などは購入および服用しない。

- ドーピングで「点滴治療」は禁止方法の一つであることから、滞在先のホテルや選手村で
行うことはできず、組織委員会の指定した医療機関でしか行うことができないことを理解
してください(医療機関であっても、禁止物質を含む点滴を行う場合はTUE申請が必要)。
- 特に生活習慣・生活環境・食生活・飛行機の移動など、長期間にわたり日常生活が異な
ることによって生じる精神的疲労を含め、健康管理に十分注意し予防を心がけることで
す。

5) その他

- ・ 海外でメガネ、コンタクトを作る場合は、診断書が必要な場合があるので、メガネや
コンタクトは予備を持っておくこと。紫外線対策としてのサングラスもあると良い(UV
カット)。
- ・ 歯の治療をすませておくこと。歯痛がなくても歯の検診をうけておくこと。
- ・ リラックスできるものを用意すること。
- ・ 風邪の予防(マスク、うがい薬、体温計の持参)、水分補給等を考えておくこと。

*選手の特参品リスト(必須)

- ① ドーピング検査対応の薬(常用薬・屯用薬)
- ② ドーピング検査対応の薬・サプリメントのリスト
- ③ マスク・うがい薬・体温計(風邪予防用)
- ④ サングラス(屋外外出時の紫外線からの目の保護)
- ⑤ 防寒を含めた雨天対策用品
- ⑥ 健康保険証(できるだけ写してないもの)
- ⑦ 出国1週間前から口にした薬・サプリメントのリスト

*スタッフ及び本部役員の特参品リスト(必須)

- ① 常用薬・屯用薬
- ② マスク・うがい薬・体温計(風邪予防用)
- ③ サングラス(屋外外出時の紫外線からの目の保護)
- ④ 防寒を含めた雨天対策用品
- ⑤ 健康保険証(できるだけ写してないもの)

第18回冬季デフリンピック大会

記入日:平成 年 月 日

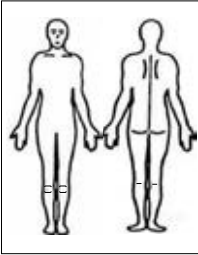
氏名: 種目:

生年月日: S・H 年 月 日 生まれ (男・女) 満 歳

身長: cm 体重: kg ベスト記録:

ポジション: 得意種目・技:

○現在痛めている部位(気になる部位や違和感のある部位を下面に記入してください)



○現在治療を受けていますか? (はい・いいえ)

・通院している医療機関名、治療院名

①

②

③

・いつから症状がありましたか?

①平成 年 月 日～()

②平成 年 月 日～()

③平成 年 月 日～()

・現在の症状(下枠より)・原因(下枠より) ・治療内容(下枠より)

① ① ①

② ② ②

③ ③ ③

症状	A 何もなくても痛い	B さわるとう痛い	C 動かすと痛い	D 歩くと痛い	E 走ると痛い
	F ジャンプすると痛い	G 伸ばすと痛い	H 曲げると痛い	I ひねると痛い	J 泳ぐと痛い
	K 投げると痛い	L 蹴ると痛い	M ズーンと鋭い痛み	N ズーンと鋭い痛み	O 張っている
	P 重だるい	Q 腫れている	R 違和感がある	S つついている	T 熱を持っている
	U しびれがある	V 出血している			
原因	ア 人と接触した	イ 急に痛くなった	ウ 徐々に痛くなった	エ ぶつけた	オ つまづいた
	カ ひねった	キ 伸ばした	ク 蹴った	ケ 走った	コ ジャンプした
	サ 投げた	シ 泳いだ	ス 転んだ	セ ずべった	
治療	1 マッサージ	2 電気治療	3 温熱治療	4 冷却療法	5 ストレッチ
	6 筋力強化	7 有酸素運動			

○過去に主な怪我、病気、生まれつきの障害、手術など (特になし・ある場合は)

特になし・ある場合は⇒()

○現在服用している薬、サプリメント(薬の種類や服用状況)

特になし・ある場合は⇒()

○アレルギーの有無(食べ物、薬物、化学物質、環境など)

特になし・ある場合は⇒()

○女性の方への質問です。月経は定期的ですか? (はい・いいえの方は)

□婦人科に受診していますか? いいえ・はい(服薬している薬名:)

□月経頻度は? () 日周期 もしくは 回/日・週・月・

医療班サイン:

※この用紙に記載の個人情報は、個人情報保護方針に基づき保管を徹底いたします。

問診用紙 (1)

受診される方もしくは代理の方が記入ください。受診日 月 日

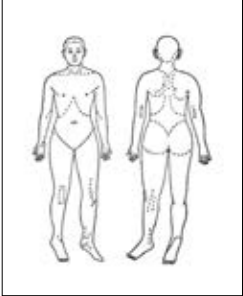
氏名: 性別: 男・女

生年月日: 昭和・平成 年 月 日 年齢: 歳

[(どちらかに○をお付けください) 選手 , 役員]

競技名: [種目(階級・ポジション):]

1. どんなことで診察を希望されましたか?



2. 診てもらいたいところを右図に○をつけてください

3. これまでの主な病気やけがを記入ください。

病気

けが

4. 現在、服用中の薬 (あり、なし) 薬品名

5. 薬物アレルギー (あり、なし) 薬品名

6. 食物アレルギー (あり、なし) 食物名

7. 女性にお尋ねします。妊娠の可能性はありますか? (あり、なし)

ご記入ありがとうございます

発熱がある方は裏面にも記入下さい

以下はメディカルスタッフが記入 問診用紙を確認したスタッフ氏名

予想される問題点; どちらかに○を付ける 内科系 , 外科系

【報告書作成について】

大会終了後、日本選手団員は「全員」報告書の作成が義務付けられています。

【手順】

① 日本選手団員は報告書を作成→競技団体で取りまとめ→派遣委員会事務局へ提出。

【事務局への提出メチ】

2015年5月11日(月)厳守

※事務局提出メチりを勘案し各競技団体内部でのメチを決められますよう、お願い致します。

※こちらの報告書は助成金を受けた結果を報告するためのものです。

【報告書の内容】

■選手団員は下記のページ数を厳守して、報告書を作成して下さい。

■事前に作成できる内容は、準備を進めておくことをお勧めします。

■報告書をスムーズに作成できるよう大会期間中はメモを取ることをお勧めします。

1) 団長・副団長・総務・競技監督(文字数: 4800 字～6400 字)

① 選手の選考について

② 成績一覧

③ 成績と評価

④ チーム(コーチ)体制と各コーチの役割

⑤ 競技スケジュール(旅行スケジュール)

⑥ 大会の競技運営などの報告

⑦ 競技規則の適用(問題点など)

⑧ 大会参加までの準備状況

⑨ 反省・まとめなど

2) スタッフ(競技スタッフ・本部スタッフ)(文字数: 1200 字～1600 字)

① 団体内の担当とその内容

② 反省・まとめなど

3) 選手(文字数: 600 字～800 字)

① 成績に対する自己評価

② 反省・まとめなど

【様式について】

競技団体から事務局へ提出する際は、下記の点に注意し、提出下さい。

① パソコン(ワード)で作成。

② 書式

・サイズ: A4 タテ

・文 字: 横書き

・余 白: 上下左右 2.0cm

・段 組: 2 段

・文字サイズ: 8 ポイント

※ 文書作成は「ワード」、表については「ワードまたはエクセル」を使用ください。

※ 写真は日本選手団広報担当が撮影したものから選びます(事務局)。

【緊急時の連絡方法について】

① 渡航に関する緊急連絡(出発前日、及び当日の大幅な遅延、及びアクシデントの際)

【ロシアへの連絡】ロシアアツアーズオフィスに連絡下さい。担当: 白坂

ロシアアツアーズ(オフィス): 03-6661-9080 09:30～18:00 (土、日、祝日を除く)

●緊急時にはお電話で一報下さい。

(同行者に健聴者がいない場合は周囲の健聴者に電話をかけてもらえるようお願いください。)

その後必要に応じてメール対応致します。(白坂: shirasaka@gloria-tours.jp)

●担当者が電話に出られない際には電話に出たスタッフに状況詳細をお伝え下さい。

●時間外、休日には各担当者携帯に直接ご連絡下さい。

出発日	携帯電話	携帯電話メアド	GTT 担当
3/24 (火)	090-1618-4344	jyodrkn@softbank.jp	白坂

② 現地(期間: 3/24～4/6)

●ロシア現地プリバイド携帯電話(音声のみ)について

以下のメンバーに渡します。総監督、メディカルスタッフ、事務局などへの連絡への使用となります。貸与する携帯電話にはプリバイドで、現地で使う分として 30 ユーロのみチャージしています。

本部スタッフ	競技スタッフ
① 栗野総監督 (帯同する通訳者が電話を持つ) →内田	⑪ アルペンスキーチーム
② 大杉総務 (その日に帯同する通訳者が電話を持つ) →梅本、茂木	⑫ アルペンスキーボードチーム
③ 後藤(通訳→梅本、茂木)	⑬ ハーフパイプチーム
④ 立石医師	⑭ クロスカントリーチーム
⑤ 清水医師	⑮ カーリングチーム
⑥ 倉田看護師	
⑦ 林	
⑧ 白坂	
⑨ 内田	
⑩ 瀬戸	

●無線 Wi-Fi (ネット・メールのみ)

以下のメンバーに渡します。これは Web サイトの閲覧およびメール送受信のみにご利用ください。データ量に制限がありますので、動画など大きいデータを扱うとすぐに制限がかり使えなくなります。

本部スタッフ	競技スタッフ
① 栗野総監督	⑥ アルペンスキーチーム
② 大杉総務(本部)	⑦ アルペンスキーボードチーム
③ メディカルチーム	⑧ ハーフパイプチーム
④ 岸田広報	⑨ クロスカントリーチーム
⑤ 狩野広報	⑩ カーリングチーム

注意: 栗野総監督および大杉総務への緊急連絡は混乱を避けるため、電話のみとします。

- 69 -

ICSD（国際ろう者スポーツ委員会）執行委員会

会長 President	Valery RUKHLEDEV ワレリー・ルクリーデブ president@ciss.org	
副会長 Vice President World Sports	Kang CHEN カン・チェン vicepresident-sports@ciss.org	
副会長 Vice President - World Youth Sports	David LANESMAN vicepresident-youth@ciss.org	
委員 Member at Large	Rebecca ADAM e-mail: adam@ciss.org	
委員 Member at Large	Marijo LUSIC e-mail: lusic@ciss.org	

ICSD 技術委員:

アルペンスキー	Michael SCHMAUSER td-alpineski@ciss.org	
スノーボード	Marco GALMARINI td-snowboard@ciss.org	
クロスカントリー	Maarit MALINEN td-crosscountryski@ciss.org	
カーリング	Dean SUTTON td-curling@ciss.org	

冬季デフリンピック・一般規則

1. 期間

第 18 回冬季デフリンピックをロシアのハンティマンシースク／マグニトゴルスクにおいて、3 月 28 日から 4 月 5 日まで開催する。

2. 競技

第 18 回冬季デフリンピックでは以下の競技を行う。

- 2.1. **個人競技:** アルペンスキー、クロス・カントリー・スキー、スノーボード
- 2.2. **団体競技:** カーリング、アイスホッケー
- 2.3. 各個人競技の種目内容は各競技の特別規則及び規程により定められる。
- 2.4. 予備/最終登録で男性、女性それぞれに最低 2 つの地域から合わせて 5 か国以上の参加登録があった競技及び種目のみを行う。
- 2.5. **デフリンピック競技規則 DG75** に従い競技又は種目を中止する場合は、予備登録の締め切り日から 14 日以降に、必要があれば最終登録締め切り後直ちに、国際ろう者スポーツ委員会 (ICSD) 事務局から関係各国連盟に通知する。

3. 参加資格

- 3.1 冬季デフリンピックは公平無私な競技を行う目的のもとに、(ICSD) 加盟国連盟全てのろうスポーツマンが集い団結する場である。
- 3.2 人種、宗教及び政治問題など、いかなる理由においても団体及び個人を差別する行為を禁ずる。
- 3.3 冬季デフリンピックに参加する選手は以下の条件に適合者でなければならない:

1. ろう者であること: この場合は両耳のうち、聴力が優れた方の耳の聴力レベルが最低でも 55 デシベル以上の者を指す (1964 年に定めた ISO 基準: 500、1000、2000 ヘルツの 3 つの振動数平均を基準とする)

2. (ICSD) 加盟国連盟の会員であること。

- 3.4 規則として、年齢に制限を設けない競技種目がある。一方、各々の規程により年齢制限を設けている種目もある。

- 3.5 登録用紙に参加規程項を明記して以下の同意文を載せるが、各国連盟の役員 2 名 (通常は会長と事務局長) が代表し、これに同意してサインしなければならない:

「我々署名者は冬季デフリンピックの参加規程を読み、我々及び選手はその条件に従うことを誓います。我々は国際ろう者スポーツ委員会によって認可された条件と目的において、冬季デフリンピック期間中、テレビ撮影及び写真撮影などを受け入れることに同意します。」

- 3.6 上記規則が守られない場合は、いかなる登録も無効とする。

- 3.7 参加者は自分が所属している連盟の国籍を有していなければならない。疑わしいとされた場合、関係する連盟は該当する参加者のパスポートのコピーを提出し、国籍を証明しなければならない。

4. 取締り・罰則

- 4.1 各国連盟には、以前オーディオグラムを提出した選手のリストが配布される。このリストに名前のある選手は、新たに聴力検査表 (オーディオグラム) を提出する必要はない。その他の (リストに名前のない) 選手は全員、大会参加前に ICSD 事務局に聴力検査表を提出しなければならない。その際、聴力検査表のフォーマットは ICSD のホームページに掲載するものを使用することとする。
- 4.2 冬季デフリンピック期間中、選手に対して新たに聴力検査を実施する場合がある。
- 4.3 選手に対してドーピング検査を課す場合がある。
- 4.4 これらの検査で不適格の結果が出た選手は、直ちにその競技から退場しなければならない。この選手が同一種目の別な競技にも出場する場合、不適格と判定された競技のみにおいて失格となる。

4.5 もし、チームの一員に検査で不適格の結果が出た場合、該当する選手は直ちに競技から退場しなくてはならない。その選手は、その競技の残りの部分、及び次の競技について失格となる。別の選手がその選手の代わりに出場することはできる。 4.6 なんらかの不正行為があった場合、その選手が属する連盟は ICSD 執行委員会が定めた手続き料と罰金を支払う義務が課せられる。 4.7 冬季デフリンピック期間中の検査に係る諸経費は組織委員会が負担する。 4.8 (アレルギー、喘息、てんかん、等の) 慢性疾患のために、薬物もしくは禁止されている物質の使用が必要な選手は、TUE 申請をしなくてはならない。詳細は、ICSD アンチドーピング規則 ICSD Anti-Doping Rules をご覧ください。 5. 選手団役員 5.1 ICSD 加盟国連盟のみが冬季デフリンピック大会に参加する選手を登録する権利を有する。 5.2 それぞれの競技種目に参加できる選手団役員の上限人数は各競技の特別規則及び規程に明記されている。 5.3 ICSD 加盟国連盟より 1 競技につき選手団役員を 1 名、加えて選手 3 名につき役員を 1 名派遣することができる。(ICSD 評議員会に出席する代表者はこの規程から除く) 5.4 第 18 回冬季デフリンピックの登録用紙は事務局が準備・提供する。 6. 団体競技 6.1 団体競技への登録の最終締め切りは 2014 年 3 月 31 日 とする。 6.2. 2015 年 2 月 28 日 までに ICSD 事務局宛に、各選手名、登録種目および背番号を明記した最終登録用紙を提出しなくてはならない。この手続きは、ICSD の定めたオンライン登録用紙に記入して E メールで送信するか、またはフ	アクセスで提出することも可能であるが、いずれの場合も後日 ICSD の定めた公式登録用紙を提出する必要がある。 6.3. 2015 年 2 月 28 日 以降は、一切の追加登録も受け付けない。 6.2 出場登録をしたチームが、2014 年 3 月 31 日～2015 年 2 月 28 日 の間に登録取消しをする場合は、取消し後直ちに USD \$2,500 の罰金を支払わなければならない。 6.3 2015 年 2 月 28 日 以降に出場取消をする場合は、取消後直ちに US\$5,000 の罰金を支払わなければならない。 7. 個人競技 7.1 2015 年 3 月 31 日 までに ICSD 事務局宛に、各競技種目に出場可能な選手の人数を想定して報告する、予備登録を済ませなければならない。 7.2 2015 年 2 月 28 日 までに ICSD 事務局宛に、出場する競技種目に選手名を記入して最終登録用紙を提出しなければならない。この最終登録の手続きは、ICSD の定めたオンライン登録にて行う。 7.3 2015 年 2 月 28 日 以降は、一切の追加登録も受け付けない。 7.4 登録済みの選手が当日競技に出場しなかった場合は罰金 US\$20 が課せられる。ただし、医者からドクターストップがかかり、その旨の診断書が提出された場合を除く。 8. 財政規程 8.1 各国選手団は自身の旅費、食費、宿泊費など派遣に係る諸経費を負担しなければならない。 8.2 各参加選手及び選手団役員(連盟代表者を含む)は、それぞれ冬季デフリンピック開会前に参加費の US\$20 を支払わなければならない。 8.3 ICSD に支払われるべき全ての納入金は、冬季大会が始まる前に支払わな
ければならない。冬季大会が始まるまでに支払いが済んでいない連盟の選手団は、全員出場資格を失う。 9. メダルと賞状 9.1 全競技種目において、第 1 位には金メダルと賞状を、第 2 位に銀メダルと賞状、第 3 位には銅メダルと賞状が授与される。 9.2 全ての団体競技及びその他の競技種目における団体戦の場合、第一位となったチームのメンバーのうち、冬季デフリンピック開催期間中に少なくとも 1 試合もしくは 1 競技以上に出場した全ての選手に第一位のメダルと賞状が授与される。第 2 位、第 3 位のチームのメンバーにも同様に、少なくとも 1 試合もしくは 1 競技以上に出場した全ての選手に、それぞれ 2 位、または 3 位の賞状とメダルが授与される(9.1 参照)。これらのチームのその他のメンバーには、メダルはないが、賞状のみが授与される。 9.3 個人競技の場合、4～8 位までの選手には賞状が授与される。 10. チーム代表者・技術委員打ち合わせ会議※、抽選会 10.1 各競技のチーム代表者・技術委員打ち合わせ会議は各競技の最初の試合が始まる前に最低 1 回は行われる。日時、場所は発表される。 10.2 この会議には競技委員会、審査員、ICSD 技術委員、各参加国連盟の代表者 2 名(2 名のうち 1 名はろう者でなければならない)が出席するこの会議に出席するろうの代表者に健聴者が同行した場合、通訳の使用を認める。 10.3 団体競技の抽選は、団体競技を登録した国々に後日発表する。 11. 権限・判定権 11.1 ICSD 執行委員会は、組織委員会及び大会参加国連盟より提訴された冬季大会や試合に関するあらゆる訴訟問題に対して、最終決定を下すことができる最高権力を有する。 11.2 各競技において試合の審判員(ground judges)に対する抗議は、ICSD が	定める冬季デフリンピック抗議用紙に英語で記入して提出しない限り、審判員によって判定される。この抗議用紙は各競技ごとに定められた時間内に提出されなければならない。(各競技の技術規程参照) 11.3 競技役員(official)の判断に対する抗議は、該当する競技の抗議委員会(Protest Committee)の各委員に対して申し立てることが可能であるが、その際には 50 ドルの保証金を納める。 11.4 抗議委員会は抗議を受けてから競技ごとに定められた時間内に判定を下し、抗議を提出した連盟に対してすぐに判定の結果を通知しなければならない。 11.5 抗議委員会の下した判定に対して抗議する場合、その判定が下されてから 4 時間内に、抗議をする連盟の役員から審査員団に提訴しなければならない。 11.6 提訴が受理された場合、その提訴を起こした連盟へ 50 ドルの保証金が返却される。 11.7 聴力、ドーピング検査、選手の国籍問題に関する訴えは ICSD 執行委員会の単独判定とする。 12. 身分証明カード(IDカード) 選手及び役員は身分証明書カードが与えられ、競技会場に入場する際には必ず携帯しなければならない。身分証明カードがない限り、入場及び出場が許されない。 13. 宣伝活動 13.1 衣服や用具に小さなロゴマーク、その他の宣伝をつける事は許される。ただし、前面、背面などあらゆる個所に付されているマーク等の合計表面積が 400cm² を越えてはならない。この規程は、そのマーク等が伝統的、特徴的なデザインである場合も、伝統的デザインとは関係なく、個別のものである場合も適用される。(デフリンピック技術規則 DG15 2 を参照)

13.2 デフリンピック区域内外ではあらゆる政治的、宗教的、民族的な宣伝活動を禁ずる。

14. 冬季デフリンピック競技中、一切の補聴器または人工内耳の外部機器の使用を固く禁ずる。

15. その他

現在のデフリンピック規則及び規程や ICSD 憲章で定めた範囲外において予想外の問題が起った場合、IOC（国際オリンピック委員会）や国際的な団体によって定められた規則及び規程に従って処理する。これらの規則に抗議することはできず、各国団体の有する規則及び規程より優先してこれに従う。

2014 年 12 月 10 日改訂

訳注：

用語は以下のように翻訳：

Protest Committee = 抗議委員会

Jury of Appeal = 審査員団

Official = 競技役員

(ground) judges = 審判員

Technical Meeting = チーム代表者・技術委員打ち合わせ会議
いわゆる「TD 会議」のこと

参 考

一般財団法人全日本ろうあ連盟 デフリンピック派遣委員会

誓約書

私は、第 18 回冬季デフリンピックの日本選手団員として、一般財団法人全日本ろうあ連盟デフリンピック派遣委員会の意向に従い、以下の事項について誓約いたします。

1. 第 18 回冬季デフリンピックの日本代表としての名誉を保ち、国際ろうスポーツ委員会の規則を遵守して競技・行動すること。
2. 出発前までに配布する選手団必携を熟読し、派遣期間中は団長の指示・決定に従い、規律を守り集団行動に努めること。
3. 国際アンチ・ドーピング機構規程および関連ドーピング規定を遵守すること。
4. 派遣期間中、組織委員会の許可した報道機関および日本選手団事務局の撮影・録音・インタビュー等には、極力応じること。
5. 公益財団法人日本障がい者スポーツ協会、一般財団法人全日本ろうあ連盟の主催および許可した行事への参加要請に応じること。
6. 公式ユニホームの支給を受けた団員は、ユニホームを他人に譲ったり売らないこと。

以上

2014 年 月 日

競技：

自筆署名：

印

保護者署名：

印

※ 未成年の場合は保護者のサインを添えて提出

一般財団法人全日本ろうあ連盟

デフリンピック派遣委員会

委員長 石野 富志三郎 殿



18th Winter Deaflympics

Japan Deaf Sports Federation

③日本選手団の編成にかかる指針

2015冬季デフリンピック日本選手団編成にかかる指針

全日本ろうあ連盟スポーツ委員会 2013年11月9日策定

全日本ろうあ連盟が(1)高水準の競技に適切な準備ができていない競技者を「冬季デフリンピック2015」に派遣し、(2)競技者が持てる能力を出し切れる環境を整えて「ソルトレイク2007」以上の好成績を修めるために、スポーツ委員会は日本選手団編成にかかる指針をここに策定し、2013年11月9日に発表する。

この指針は全日本聾唖連盟のデフリンピック委員会に報告されるほか、国民広く公開されるものである。

各競技団体はこの指針をもとに冬季デフリンピックでメダルを競えるための選手強化及びチーム編成準備を行う。

★代表選手推薦の手順

- ・2014年3月 各競技団体より推薦選手リスト提出
- ・2014年5月 (一財)全日本ろうあ連盟スポーツ委員会にて代表候補選手決定
- ・2014年11月 (一財)全日本ろうあ連盟デフリンピック派遣委員会にて代表選手決定
- ・2015年1月 最終エントリー

★代表選手推薦基準について

高水準の競技に適切な準備ができていて、メダルの可能性がある競技者だけを「冬季デフリンピック2015」に日本代表として派遣するために、各競技団体は次に示す推薦基準に基づいて選手の推薦を行う。

各競技団体は推薦する選手・スタッフがデフリンピックの精神及び世界アンチ・ドーピング規定について十分に認識しこれに従って日本選手団団員として行動することを保証しなければならない。

◎聴覚障害を持つ日本選手団団員は少なくとも2013・2014年度において全日本ろうあ連盟会員でなければならない。

前大会(スロバキア2011中止)代表選手に選出されていた者は、2011・2012・2013・2014年度において会員でなければならない。

(尚、推薦基準をクリアした選手の年齢が高校生でも会員登録は必須とする)

◎全日本ろうあ連盟が認定するろうあ者冬季体育大会への出場を義務とする。

(2013年度では全日本ろうあ連盟主催全国ろうあ者冬季体育大会)

《推薦基準》

※アルペンスキー競技

- ・2013年開催予定のデフ世界選手権大会でベスト8の成績をおさめること
 - ・SAJ公認、ジャパパラリンピック等の公認大会で好成績をおさめること
- (上記公認大会に強化選手が複数出場して各選手の成績を比較できるようにする)

※アルペンスノーボード競技

- ・2013年開催予定のデフ世界選手権大会でベスト8の成績をおさめること
 - ・FIS・SAJ公認等の公認大会で好成績をおさめること
- (上記公認大会に強化選手が複数出場して各選手の成績を比較できるようにする)

※ハーフパイプ競技

- ・2013年開催予定のデフ世界選手権大会でベスト8の成績をおさめること
 - ・FIS・SAJ公認等の公認大会で好成績をおさめること
- (上記公認大会に強化選手が複数出場して各選手の成績を比較できるようにする)

※クロスカントリースキー競技

- ・2013年開催予定のデフ世界選手権大会でベスト8の成績をおさめること
 - ・FIS・SAJ公認、ジャパパラリンピック等の公認大会で好成績をおさめること
- (上記公認大会に強化選手が複数出場して各選手の成績を比較できるようにする)

※カーリング競技

- ・2013年度中に国内で大会もしくは競技会を実施すること。チーム総数は原則4チーム以上が望ましい。
- ・2013年の世界選手権大会でベスト8の成績をおさめること
- ・JSA(社団法人日本カーリング協会)等の公認大会で好成績をおさめること

※スロープスタイル競技(スロバキアでは正式競技予定だったが今回は未定)

- ・JSBA(日本スノーボード協会)等の公認大会で好成績をおさめること
- (上記公認大会に強化選手が複数出場して各選手の成績を比較できるようにする)

※アイスホッケー競技

- ・国内普及が重要課題である現状では推薦の見込みがない為、派遣なしとする。

★各競技チームのスタッフ

- ①デフリンピックで定める各競技につき最低1名のスタッフを保証する。
- ②選手4名毎に1名のスタッフを保障する。
(例：アルペンスノーボードで6名選手の場合は、①1名+②1名の2名となる)
- ③スタッフにどの役割を振るかは各競技チームが決定する。ただし、監督を必ず置くこと。
尚、監督は下記の条件を備えている事を条件とする。
 - ★国際競技大会に出場および監督経験を持ち、国際大会戦略に熟達している事。
 - ★かつマネジメント及びコーチングについても一定の経験と有していること。
 - ★代表選手団事務局と連携を取り、意思疎通をはかれること。
- ④各競技毎に国際手話が出来る事とトレーナーの同行が望ましい。
- ⑤保証人数を超えるスタッフの配置は自由とするが、各競技協会が経費を負担することとする。

様式1(団体)

第18回冬季デフリンピック

競技団体調査書

(記入日2014年 月 日)

競技団体名			
所在地		〒	
TEL		FAX	
E-Mail			
連絡責任者(※1)取材対応者	氏名		
	役職		
	所在地	〒	
	TEL	FAX	
	E-Mail		
デフリンピック担当者(※2)事務連絡対応者	氏名		
	役職		
	所在地	〒	
	TEL	FAX	
	E-Mail		
第18回冬季デフリンピック(通称・未定)推薦選手数			
推薦人数		選手 名	スタッフ 名

※ 当用紙に記載された内容は、第18回冬季デフリンピック日本選手団派遣業務のみに使用し、それ以外の目的には使用いたしません。

※1 通知文書等、公文書の窓口として登録ください。また、外部からの取材問い合わせ等はこちらを紹介します。そのことを踏まえた連絡担当者をお決めください。なお、通常の事務連絡は「デフリンピック担当」宛にお送りします。

※2 派遣事務局と競技団体(監督・選手・スタッフを含む)との連絡担当になります。通常の連絡はこちらに送ります。また、質問・要望等もこの担当を通して受け付けますので、確実に連絡が取れ、なおかつ競技団体内の調整も行える力を記載ください。

第18回冬季デフリンピック
日本代表推薦選手候補一覧表

様式2(団体)

氏名	候補順位	氏名	年齢(※)	競技種目	推薦の理由 (例)に記入する。また、メダル・入賞の期待を数値に記入すること。 ※様式4も必ず1人1枚作成すること。 選手候補の各競技における推薦基準をクリアしているかどうか、及び選手候補推薦をどのようにして行ったかを。	所屬ろうめ店名	日
	【※】	〇〇	〇〇	ジャンプ/スラ			(記入日2014年 月 日)
	1						
	2						
	3						
	4						
	5						
	6						
	7						
	8						
	9						
10							

【※】年齢は2014年4月30日現在の年齢を記入してください。

団体名 _____ あり

代表者 _____ 印

※ 当用紙に記載された内容は、第18回冬季デフリンピック日本選手団派遣業務のみに使用し、それ以外の目的には使用いたしません。

第18回冬季デフリンピック 日本代表推薦選手候補調査書

様式3 (選手)

ICSDのID なし ・ あり (NO.) 競技名

(記入日2014年 月 日)

氏名 性別

ふりがな 漢字 ローマ字

出生地 都道府県 市区町村

生年月日 19 年 月 日 歳 (2014年4月30日現在)

パスポート 名前 ローマ字 有効期限 年 月 日

有 ・ 無 旅券番号 国籍

障害者手帳情報 県名 手帳No. 等級

器具の使用 補聴器使用 人工内耳使用 どちらも使用していない

現住所 ふりがな 住所 自宅最寄駅 JIR 私鉄 線 駅 TEL 自宅へ電話をした場合 自分へ電話内容をつないでくれる人が FAX いる いない E-Mail (携帯) E-Mail (PC)

住民票のある住所 *住民票と異なる場合は必ず記入してください。 出生地もしくは出身地 都道府県 市区町村

勤務先 (在籍学校名) 名称 所在地 所属部署 (学年) 役職 TEL FAX

派遣依頼 (必要な場合記入) 所属長名 会社名 送付先 ※資料は原則選手本人宛に郵送します。選手が自分で会社に持っていく、説明してください。 TEL 事務担当者名

緊急連絡先 連絡者氏名 (本人との関係) 連絡先 TEL、携帯、FAX、E-Mail (携帯) E-Mail (PC)

読字力 (英語) 読字力 (手話) 5 4 3 2 1 5 4 3 2 1

Reading or Writing (語の書き) 読字力 (手話) 5 4 3 2 1 5 4 3 2 1

読字力 (手話) 5 4 3 2 1 5 4 3 2 1

* 当用紙に記載された内容は、第18回冬季デフリンピック日本選手団派遣業務のみに使用し、それ以外の目的には使用いたしません。

第18回冬季デフリンピック 日本代表推薦選手候補 プロフィール①

様式4 (選手)

(記入日 2014年 月 日)

ふりがな 選手氏名 競技名

推薦根拠: 添付書にある各競技の条件事項①②③の中から満たしている条件の番号を記入してください。(個人競技のみ。団体競技の選手は記入不要)

メダル獲得予想

種目 予想

国内大会成績・記録 デフリンピックの成績は全て記入してください。

開催年 大会名 競技 種目 記録 (決勝) 順位 参加者数

国内大会成績・記録

開催年 大会名 競技 種目 記録 (決勝) 順位 参加者数

その他、特記事項を記入

* 当用紙に記載された内容は、第18回冬季デフリンピック日本選手団派遣業務のみに使用し、それ以外の目的には使用いたしません。

第18回冬季デフリンピック 日本代表推薦選手候補 プロフィール②

様式5 (選手)

競技名 氏名

競技について (記入日 2014年 月 日)

①始めたきっかけは?

②主な活動場所はどこ?

デフリンピックについて

①ライバルは? (国名や名前)

②目標は?

③あなたにとってデフリンピックとはなんですか?

第18回冬季デフリンピック 日本代表推薦スタッフ一覧表

様式6 (団体)

競技名

(記入日2014年 月 日)

推薦の理由

2014年12月の国際デフリンピック (B1グループ) でスタッフとして参加し、デフスポーツに大きな関心を持ち、日本代表推薦スタッフとして参加したい。

役職 氏名 性別 年齢 [※] 所属協会名 所属地 備考

【例】 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇

監督 コーチ レーダー 審判 スタッフ

団体名

代表者 印

* 当用紙に記載された内容は、第18回冬季デフリンピック日本選手団派遣業務のみに使用し、それ以外の目的には使用いたしません。

様式7（スタッフ）

第18回冬季デフリンピック
日本代表推薦スタッフ調査書

競技名

（記入日2014年 月 日）

氏名	性	名	性別
ふりがな			男
漢字			女
ローマ字			
出生地	都道府県	市郡	区町村
生年月日	19 年 月 日	歳	（2014年4月30日現在）
パスポート 有・無	名前 ローマ字	有効 期限	年 月 日
	旅券番号	国籍	
現住所	ふりがな	〒	
	住所		
	TEL	携帯	
	FAX		
	E-Mail（携帯）	E-Mail（PC）	
住民票のある住所 ※現住所と異なる場合は記入して下さい			
出生地もしくは出身地 ※生に育った地域を記入して下さい			
都道府県 市区町村			
障害者手帳情報			
	県名	手帳No.	等級
勤務先 （在籍学校名）	名称	〒	
	所在地		
	所属部署 （学年）	役職	
	TEL	FAX	
派遣依頼 （必要な場合記入）	所属長名	役職	
	会社名		
	送付先	※資料は原則スタッフ本人宛に郵送します。スタッフが自分で食事に持っていき、説明してください。	
TEL	事務担当者名	TEL 携帯 FAX E-Mail（携帯） E-Mail（PC）	
緊急連絡先	連絡者氏名	（本人との関係： ）	連絡先
		良い	最悪
語学力 （英語）	Reading & Writing Listening & Speaking	5 4 3 2 1	5段階評価（5が最良） 該当の番号に○印
	日本の手話 国際手話	5 4 3 2 1	5段階評価（5が最良） 該当の番号に○印

※ 当用紙に記載された内容は、第18回冬季デフリンピック日本選手団派遣業務のみに使用し、それ以外の目的には使用いたしません。

様式8（スタッフ）

第18回冬季デフリンピック
日本代表推薦スタッフ プロフィール①

（記入日 2014年 月 日）

ふりがな			競技名
スタッフ氏名			
指導者・競技役員等の資格	取得年	資格の内容	備考
	年		
	年		
	年		
	年		
	年		
国際大会等の参加歴	参加年	大会名	開催地
	年		
	年		
	年		
	年		
	年		
競技団体内での役職			指導歴 年
その他特記事項を記入			

※ 当用紙に記載された内容は、第18回冬季デフリンピック日本選手団派遣業務のみに使用し、それ以外の目的には使用いたしません。

様式9（スタッフ）

第18回冬季デフリンピック
日本代表推薦スタッフプロフィール②

競技名

氏名

（記入日 2014年 月 日）

競技について

①主な活動場所は？

デフリンピックについて

①ライバルは？
（国名や名前）

②目標は？

③あなたにとってデフリンピックとはなんですか？

※ 当用紙に記載された内容は、第18回冬季デフリンピック日本選手団派遣業務のみに使用し、それ以外の目的には使用いたしません。

連本第 140335 号
2014 年 9 月 17 日

一般社団法人日本ろう者スキー協会
第 18 回冬季デフリンピック内定選手 各位

一般財団法人全日本ろうあ連盟
デフリンピック派遣委員会
事務局長 太田陽介
（公印省略）

第 18 回冬季デフリンピック（於ロシア）参加に伴う
基本健康調査用紙および診断書の提出について

平素は格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。
第 18 回冬季デフリンピックの内定選手は、最寄りのクリニックや病院にて基本健康調査用紙および診断書の作成をお願いいたします。誠に申し訳ございませんが、今回、作成するにあたって、費用は自己負担となりますことをご了承くださいますようお願いいたします。また、記載漏れは一切認められません。この資料は、現地において選手の安全、健康管理上重要な書類であることをご理解ください。
なお、帯同医師（予定）による内容チェックの結果、担当の医師より指導が入る場合がありますことをご承知頂きますようお願いいたします。

1 提出書類
1) 様式 1 基本健康調査用紙（本人が記入）
2) 様式 2 医師診断書 1・2（医師が記入）
様式 1 を用いて診断を受け、医師が記入したものを提出してください。
様式 1 の記載漏れは認められません。
3) 別紙 1～3 使用薬物調査
・別紙 1：選手連絡票
・別紙 2：使用薬物についての調査書
・別紙 3：使用する可能性のある薬物についての調査書
4) 様式 3 コミュニケーション状況調査用紙

2 提出方法 上記すべてを日本ろう者スキー協会がとりまとめ、提出下さい。

3 提出先
一般財団法人全日本ろうあ連盟 デフリンピック派遣委員会 事務局
〒162-0801
東京都新宿区山吹町130 SKビル8F
一般財団法人全日本ろうあ連盟本部事務所内
TEL 03-3268-8847 FAX 03-3267-3445
担当：後藤（gotou@jfd.or.jp）、加茂下（kamoshita@jfd.or.jp）

4 提出期限 2014 年 10 月 20 日（月）必着

以 上

【様式5-1】
選手記入

基本健康調査用紙

(2014/5/2)

選手の皆様をお願いします。
皆様の健康を守るための調査用紙なので、できる限り正確に記載して下さい。
医師の診察を受ける前に、Q1～Q11までの質問にお答え下さい。わからない場所は診察の時に、医師が問い合わせますので、記入しなくて結構です。

医師にお願い致します。

選手が記入するこの表紙よりQ1～Q11までの回答状況をチェックし、必要があれば詳しく聞いて記載して下さい。

選手氏名：_____ 性別：男・女
生年月日：昭和・平成 _____年 _____月 _____日 年齢：_____歳
所 属：_____ 学年：_____年生
住 所：〒 _____ - _____

電 話：_____ (_____) Fax：_____ (_____)
E-mail：(PC) _____ (携帯) _____

競技名：_____ 競技歴：_____年
クラス分け：_____ 種目（階級・ポジション）：_____

障がい名：《該当する障がい名に○をつけて下さい。また具体的な手帳の障がい内容がわかれば（ ）内に記載して下さい》

- ①肢体不自由 ()
②視覚障がい ()
③聴覚障がい ()
④知的障がい ()
⑤内部障がい（心臓、じん臓、呼吸器、ぼうこう・直腸、小腸、肝臓、免疫機能障がい）

障がいの原因となった傷病名：_____

障がいの原因となった傷病の発病（受傷）日：_____年 _____月 _____日

障がいの原因となった傷病の発病（受傷）時年齢：_____歳

障がいの原因となった傷病に関する手術歴：（有、無）

有の場合 → _____歳：[手術名…] _____]
_____歳：[手術名…] _____]
_____歳：[手術名…] _____]

本調査用紙・診断書は、公益財団法人日本体育協会作成の国体参加選手のメディカルチェック用診断用紙の一部を障がい者用に改定して使用しております。（2014年5月2日現在）

【様式5-1】
選手記入

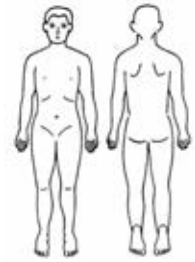
Q1. 障がいの原因となった傷病以外のこれまでの主な病気・ケガについての質問

Q1-1：これまでに以下の病気をしたことがありますか。
“ない”場合には（ ）内に×印、“ある”場合には（ ）内に○印を付け、そのケガをした時の年齢を_____部に記入、身体図にケガの場所に○を付けて下さい。

- | | |
|--------------------|-----------------------|
| 1) 貧血 () _____歳 | 2) 喘息 () _____歳 |
| 3) 高血圧 () _____歳 | 4) 心臓病 () _____歳 |
| 5) 川崎病 () _____歳 | 6) 腎 炎 () _____歳 |
| 7) 肝炎 () _____歳 | 8) 胃十二指腸潰瘍 () _____歳 |
| 9) てんかん () _____歳 | |
| 10) その他 () _____歳 | [病名 _____] |
| | [病名 _____] |
| 11) 手 術 () _____歳 | [病名 _____] |
| | [病名 _____] |
| | [病名 _____] |
| | [病名 _____] |
| 12) 輸 血 () _____歳 | [病名 _____] |
| 13) 薬物アレルギー _____ | [薬物名 _____] |
| | [薬物名 _____] |
| 14) 食物アレルギー _____ | [食品名 _____] |
| | [食品名 _____] |

Q1-2：これまでに2週間以上競技や練習の支障となる“ケガ”をしたことがありますか。
ない・ある（_____歳）

“ある”場合には、右の身体図にケガの場所に○を付けて下さい。



Q1-3：これまでに練習中や試合中に意識を失ったことがありますか。
ない・ある（_____歳）

本調査用紙・診断書は、公益財団法人日本体育協会作成の国体参加選手のメディカルチェック用診断用紙の一部を障がい者用に改定して使用しております。（2014年5月2日現在）

【様式5-1】
選手記入

Q2. 現在の病気やケガについての質問

Q2-1：現在、治療していたり、検査を受けている病気やケガ、障がいがありますか。
ない・ある [病名・障がい名 _____]
[病名・障がい名 _____]
[病名・障がい名 _____]

Q2-2：普段使用している薬がありますか。

ない

ある：＜①常用（毎日使用）、②頓用（時々使用）、③常用＋頓用＞

※ “ある”場合は後日配布する『使用薬物についての調査書』に記載して下さい

Q2-3：普段使用している健康食品、栄養剤、ビタミン剤、滋養強壮剤（ドリンク剤）などがありますか。

ない

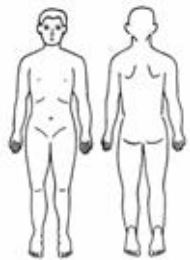
ある（“ある”の場合は、下記に記入して下さい）

品 名	メーカー名	使用頻度	使用量/日
_____	_____	(毎日・時々)	_____
_____	_____	(毎日・時々)	_____
_____	_____	(毎日・時々)	_____

Q2-4：現在、競技や練習の支障となる“ケガ”をしていますか。

ない・ある

※（“ある”の場合は、右の身体図にケガの場所がわかるように○で印を付けて下さい。また具体的なケガの内容がわかれば病名の記載もお願いします）



本調査用紙・診断書は、公益財団法人日本体育協会作成の国体参加選手のメディカルチェック用診断用紙の一部を障がい者用に改定して使用しております。（2014年5月2日現在）

【様式5-1】
選手記入

Q3：自覚症状についての質問

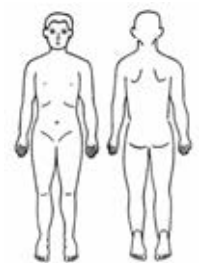
（ ）内に“ない”場合には×印、“ある”場合には○印、わからない場合には？印を付けて下さい。

1. 全般

- | | |
|-------------------|-----------------------|
| 1) 記憶が低下してきた () | 2) 練習についていけない () |
| 3) 練習がこなせない () | 4) 寒にできた練習がきつくなった () |
| 5) 練習意欲がわからない () | 6) 疲れやすい () |
| 7) 疲労がたまっている () | 8) 体がだるい () |
| 9) 力が入らない () | 10) たちくらみがひどい () |
| 11) 風邪をひきやすい () | 12) 体重の変動が大きい () |
| 13) 体重が減少している () | 14) 体重が増加している () |
| 15) 寝付きがわるい () | 16) 熟睡できない () |
| 17) 早く目が覚める () | 18) 朝起きるのがつらい () |

2. 皮膚（右の身体図に問題のある場所に○印を付けて下さい）

- 1) 褥瘡 ()
2) アトピー性皮膚炎 ()
3) みずむし ()
4) じんましん ()
5) その他 ()



3. 頭部

- 1) 外傷 ()
2) 頭痛 ()
3) その他 ()

4. 眼

- | | | |
|-------------|-----------------|-------------|
| 1) 近視 () | 2) 乱視 () | 3) 視野異常 () |
| 4) 眼鏡 () | 5) コンタクトレンズ () | 6) 痛み () |
| 7) かゆみ () | 8) めやに () | 9) 異物感 () |
| 10) かすみ () | | |
| 11) その他 | 内容：_____ | |

本調査用紙・診断書は、公益財団法人日本体育協会作成の国体参加選手のメディカルチェック用診断用紙の一部を障がい者用に改定して使用しております。（2014年5月2日現在）

【様式5-1】
選手記入

5. 耳

1) 痛み () 2) 耳だれ () 3) 耳鳴り ()
4) めまい () 5) 聴力障がい ()
6) その他 () 内容: _____

6. 鼻

1) 鼻水 () 2) 鼻づまり () 3) 鼻血 ()
4) その他 () 内容: _____

7. のど

1) へんとう腺炎 () 2) のどの痛み () 3) しわがれ声 ()
4) その他 () 内容: _____

8. 口腔

1) 虫歯 () 2) 歯痛 () 3) 歯ぐきの出血 ()
4) その他 () 内容: _____

9. 頸部

1) リンパ節炎 () 2) 甲状腺の腫れ () 3) その他 ()
4) その他 () 内容: _____

10. 呼吸器

1) せき () 2) たん () 3) ぜんそく ()
4) 呼吸困難 () 5) 息切れ () 6) 喀血 ()
7) 過換気症候群 ()
8) その他 内容: _____

11. 循環器

1) どうき () 2) 胸痛 () 3) むくみ ()
4) 心雑音 () 5) 不整脈 () 6) 高血圧 ()
7) その他 内容: _____

本調査用紙・診断書は、公益財団法人日本体育協会の国体参加選手のメディカルチェック用診断用紙の一部を障がい者用に
改変して使用しております。(2014年5月2日現在)

【様式5-1】
選手記入

12. 血管系

1) 静脈瘤 () 2) 静脈炎 () 3) 血行障がい ()
4) その他 内容: _____

13. 消化器系

1) 吐き気 () 2) 嘔吐 () 3) 胸やけ ()
4) 消化不良 () 5) 食欲不振 () 6) 下痢 ()
7) 便秘 () 8) 腹痛 () 9) 黄だん ()
10) 痔 ()
11) その他 内容: _____

14. 泌尿器

1) 頻尿 () 2) 排尿痛 () 3) 血尿 ()
4) 尿が濁りやすい () 5) 結石 () 6) 蛋白尿 ()
7) 糖尿 ()
8) その他 内容: _____

15. 血液

1) 貧血 () 2) 出血傾向 ()
3) その他 内容: _____

16. 神経系

1) けいれん () 2) てんかん () 3) めまい ()
4) 知覚障がい () 5) 失神 () 6) 意識障がい ()
7) 運動障がい () 8) 記憶障がい ()
9) その他 内容: _____

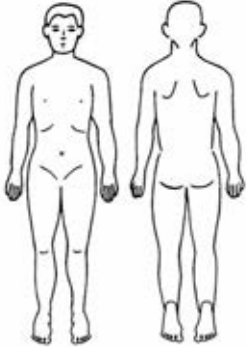
本調査用紙・診断書は、公益財団法人日本体育協会の国体参加選手のメディカルチェック用診断用紙の一部を障がい者用に
改変して使用しております。(2014年5月2日現在)

【様式5-1】
選手記入

17. 運動器

(右の身体図に問題のある場所に○印を付け、対応する問題と線で結んで下さい)

1) 痙性 ()
2) 不随運動 ()
3) 拘縮・変形 ()
4) 切断 ()
5) 筋肉痛 ()
6) 関節痛 ()
7) 骨折 ()
8) 脱臼 ()
9) 捻挫 ()
10) 肉離れ ()
11) その他 ()



Q4. 現在のコンディションについての質問

以下、いずれかに○印を付けて下さい。

練習意欲 : 1=旺盛 2=普通 3=なし 4=全くなし
睡眠 : 1=良好 2=普通 3=不良
食欲 : 1=旺盛 2=普通 3=低下
便通 : 1=良い 2=便秘 (1回/日) 3=下痢 (回/1日)
全般的体調: 1=極めて良い 2=良い 3=普通 4=悪い 5=最悪

選手のメモ: コンディションが悪い場合には、最近のトレーニング量が非常に多い、
風邪をひいているなど思い当たる理由を記して下さい

本調査用紙・診断書は、公益財団法人日本体育協会の国体参加選手のメディカルチェック用診断用紙の一部を障がい者用に
改変して使用しております。(2014年5月2日現在)

【様式5-1】
選手記入

Q5. 家族の病気に関する質問

Q5-1: 両親兄弟・姉妹に、以下のような病気がありますか、一つ一つチェックして下さい。

□内に“ない”場合には×印、“ある”場合には○印と〔 〕内に誰であるかを記入して下さい。

1) 高血圧□〔 〕 2) 心臓病□〔 〕 3) 脳卒中□〔 〕
4) 糖尿病□〔 〕 5) 痛風□〔 〕 6) 結核□〔 〕
7) 肝炎□〔 〕
8) その他□ 病名: _____

Q5-2: 両親兄弟・姉妹が以下のような病気で死亡していますか、一つ一つチェックして下さい。

□内に“ない”場合には×印、“ある”場合には○印と〔 〕内に誰が何歳の時に死亡されたのかを記入して下さい。

1) 突然死□〔 、 歳〕 2) 高血圧□〔 、 歳〕
3) 心臓病□〔 、 歳〕 4) 脳卒中□〔 、 歳〕
5) 糖尿病□〔 、 歳〕 6) 痛風□〔 、 歳〕
7) 結核□〔 、 歳〕 8) 肝炎□〔 、 歳〕
9) その他□〔 、 歳〕 内容: _____

備考: 突然死とは、原因不明に急に(たとえば24時間以内)死亡すること。
痛風とは、血液中の尿酸値が高く、足の親指などの全身の関節が痛くなる病気です。

Q6. 体重減量についての質問

Q6-1: 競技に際して体重減量はありますか:
1=なし 2=あり 減量前体重_____kg、目標体重_____kg

Q6-2: 上の質問で“あり”の場合
スムーズに減量できますか: 1=はい 2=いいえ

選手のメモ: サウナ、食事を極端に減らすなど、その具体的減量方法を記入して下さい

本調査用紙・診断書は、公益財団法人日本体育協会の国体参加選手のメディカルチェック用診断用紙の一部を障がい者用に
改変して使用しております。(2014年5月2日現在)

- 77 -

【様式5-1】
選手記入

Q7. 女性の選手におたずねします

Q7-1：初潮はありましたか：

1＝なし 2＝あり 歳 月、あるいは小学校 年生 月ごろ
中学校 年生 月ごろ
高 校 年生 月ごろ

Q7-2：最終月経はいつでしたか：

1. 平成 年 月 日ごろ
2. 既に閉経 (歳頃)

Q7-3：以下のいずれかに○印をして下さい（閉経されている方以外）

月経周期は：1＝規則的 2＝不規則 3＝無月経（ 年 月以来なし）
月経出血量は：1＝多い 2＝普通 3＝少ない
月経の痛みは：1＝ほとんどない 2＝痛みはあるが、日常生活に支障なし
3＝日常生活に支障あるが、薬は使用しない
4＝日常生活に著しく支障あり、薬を使用する
(薬剤名：)
5＝寝込む

Dr. メモ：どのように処置しているか、具体的に記入してください

本調査用紙・診断書は、公益財団法人日本体育協会作成の団体参加選手のメディカルチェック用診断用紙の一部を障がい者用に
改変して使用しております。（2014年5月2日現在）

【様式5-1】
選手記入

Q8. 心理面について（競技活動では、こころとからだが連動して実力を発揮します）

Q8-1：競技の場面で心理的問題（課題）を感じたことがありますか。

1：ない 2：ある

Q8-2：“ある”場合に○をつけた方は、下記の事項にお答え下さい。

1. 「その時に専門家が身近にいましたか？」 → 「いた」「いない」
2. 「その時に専門家に相談しましたか？」 → 「した」「しない」

Q8-3：“ある”場合はどのような内容であるかを具体的に答えて下さい。また、そ
の時にどのように解決したのかも書いて下さい。

※例えば、競技場面であがってしまい本来の実力がだせなかった など

Q8-4：最近（この半年間）の生活で、「そうだな」と思い当たる項目の番号に○印
をして下さい。

1. 落ち着かない
2. 集中できない
3. ゆうつだ
4. イライラする
5. やる気がでない
6. 何に対しても興味がもてない

本調査用紙・診断書は、公益財団法人日本体育協会作成の団体参加選手のメディカルチェック用診断用紙の一部を障がい者用に
改変して使用しております。（2014年5月2日現在）

【様式5-1】
選手記入

Q8-5：最近（この半年間）の生活で、「そうだな」と思い当たる項目の番号に○印
をして下さい。

1. 眠れない
2. 食欲がない
3. 頭が痛い
4. 肩がこる
5. 疲れがとれない
6. からだがだるい
7. めまいがする
8. おなかが張る

Q8-6：これまで競技を継続していた中で、専門家による心理サポートや相談が必要
と感じたことがありますか。

1：ない 2：ある

Q8-7：“ある”場合はどのようなサポートが必要であったかを具体的にお答え下さ
い。

※例えば、①競技力向上につながるメンタルトレーニングの指導

②競技と仕事や学業の両立の事で問題を感じ、他の人にアドバイスを
して欲しかった事など

Q9. 練習頻度について

過去6ヶ月間の平均練習頻度についてお答え下さい。

1：週3回以上 2：週1～2回程度 3：月1～2回程度 4：月1回未満

本調査用紙・診断書は、公益財団法人日本体育協会作成の団体参加選手のメディカルチェック用診断用紙の一部を障がい者用に
改変して使用しております。（2014年5月2日現在）

【様式5-1】
選手記入

Q10. 移動能力について

現在の移動能力についてお答え下さい。

1：屋外歩行自立

1a：歩行補助具（杖、装具、義足など）の使用なし
1b：歩行補助具（杖、装具、義足など）を使用

2：屋内歩行自立

2a：歩行補助具（杖、装具、義足など）の使用なし
2b：歩行補助具（杖、装具、義足など）を使用

3：介助歩行

3a：屋外介助歩行
3b：屋内介助歩行

4：車いす使用

4a：普通型車いす駆動自立
4b：車椅子移動介助
4c：電動車いす

5：その他（ ）

Q11. 排尿方法について

現在の排尿方法についてお答え下さい。

1：自排尿可能

1a：排尿障害なく、正常排尿
1b：自排尿可能であるが、一部症状あり薬物使用中

2：排尿障がいあり、何らかの補助的排尿方法を用いている

2a：収尿器使用

2b：カテーテル使用

2b-1：留置カテーテル（膀胱瘻も含め）

2b-2：自己導尿

2c：集尿器、自己導尿の組み合わせ

2d：その他（内容： ）

※ 自己導尿を行っている場合、使用しているカテーテル消毒液の名称がわかれば、
該当するものに○をつけて下さい。

[① グリセリンBC液、② ハイアミン・グリセリン液、③ イソジン・グリセリン
液、④ ザルコニン液10%単体、⑤ オスバン10%単体、⑥ ハイアミン液⑧単
体、⑦ 滅菌オリーブ油、⑧ その他（名称： ） 、⑨ 不明]

本調査用紙・診断書は、公益財団法人日本体育協会作成の団体参加選手のメディカルチェック用診断用紙の一部を障がい者用に
改変して使用しております。（2014年5月2日現在）

Q12. 排便方法について

現在の排便方法についてお答え下さい。

1：自己排便可能

1a：障がないし。

1b：自己排便可能であるが、内服薬物使用

1c：自己排便可能であるが、座薬使用

1d：特殊な器具などが必要

(必要なもの：)

1d：特殊な設備や便器などが必要

(必要なもの：)

2：排便障がいがあり、何らかの介助が必要

2a：介助者は誰でも良い。

2b：規定の介助者が必要

2c：医療関係者の介助が必要

2d：その他 ()

⑤健康調査票等

【様式5-2】
医師記入

診断書（1）（医師記入のこと）

氏名：；生年月日：昭和 年 月 日

<現症>

身長： cm 体重： Kg 体温： ℃ 脈拍： 拍/分

血圧： mmHg

理学的所見（必要に応じて右の身体図を利用して下さい）

異常所見の有無 異常所見の内容

顔面 なし あり

口腔 なし あり

頸部 なし あり

胸部 なし あり

腹部 なし あり

四肢 なし あり

<臨床検査所見>

心電図検査	所見：	精査の必要（無・有）
胸部X線	所見：	精査の必要（無・有）
肺機能検査	所見：	精査の必要（無・有）
尿検査	蛋白 () 糖 () 潜血 ()	
血液検査	赤血球 () ヘマトクリン () 白血球 ()	
	血小板 () MCV () MCH () MCHC ()	
生化学検査	AST (GOT) () ALT (GPT) () γ-GTP () ALP ()	
	LAP () コリンエステラーゼ () CK () 中性脂肪 ()	
	HDLコレステロール () LDLコレステロール () 総コレステロール () 総蛋白 ()	
	アルブミン () 尿酸窒素 () クレアチニン () 尿酸値 ()	
	血清鉄 () 空腹時血糖値 () HbA1c (NGSP) () CRP ()	
	Fe () Na () K () Cl ()	
	Ca () P ()	
	その他先生が重要と考えられる検査所見 ()	

※異常値について、貴施設での正常値より低値の場合は↓、高値の場合は↑を付記して下さい。【例：AST(68↑)】

コメント備考欄

年 月 日 医療機関名・住所・電話番号

医師名： 印

【様式5-2】
医師記入

診断書（2）（医師記入のこと）

氏名：；生年月日：昭和 年 月 日

※その他、原疾患と合併症について御記載下さい。特に、選手の障がい内容や合併症などに応じて前頁検査項目以外の検査を施行されましたら、その結果の記載をお願い致します。

ご診断に基づき、以下の2点について適否のご意見をお願いいたします。ただし、最終決定については協会の医学委員会が行い、その責任を負います。率直なご意見を御願いたします。

①選手の海外渡航について 適 ・ 不適（いずれかに○）

②スポーツ選手としての大会参加 適 ・ 不適（いずれかに○）

上記についてのコメント

（上記①②について、ご判断された理由等をご記入ください）

年 月 日 医療機関名・住所・電話番号

医師名： 印

※本調査用紙・診断書は、公益財団法人日本体育協会作成の団体参加選手のメディカルチェック用診断用紙の一部を障がい者用に改定して使用しております。（2013年9月13日現在）

【別紙1】

選手連絡票

当用紙に記載された事項は、アンチ・ドーピング活動に關する連絡調整に使用いたします。

記載日：平成 年 月 日

フリガナ				年 月 日
選手氏名				歳
性別	男・女	生年月日	昭和 年（西暦 年）	月 日
競技名		クラス ポイント ポジション		
住所	〒			
障害内容 （あれば合併症）				
電話番号		携帯電話		FAX番号
PC mail				
携帯 mail				
職場名称		職場 電話番号		
日中連絡が 取れる電話番号				
障害上の理由などにより、代理人を通じて連絡を取りたい場合は以下にご記入ください。				
代理人氏名		選手との 関係		
代理人住所	〒			
代理人 電話番号		代理人 FAX番号		
代理人 携帯番号		代理人 E-mail		
その他、連絡方法等、連絡を差し上げる際に気をつけてほしいことがあればご記入ください。				
【アンケート】以下質問します。いづれかに必ず〆を入れてください。				
①過去6か月以内にアンチドーピング部会で薬物調書のチェックを ☐ 受けた ☐ 受けていない				
②過去6か月以内にアンチドーピング部会でTUE申請が受理されて ☐ いる ☐ いない				
※ アンチドーピング部会からの連絡は、勤務の都合上、可能な限りメール連絡をさせていただいています。 PC・携帯メールが使用できる選手は、メールアドレスをご記入ください。				

【別紙2】
選手記入

使用薬物についての調査書

欄が不足する場合はコピーしてお使い下さい（2枚以上になる場合は番号をつけて下さい）

ふりがな 氏名	
競技	

調査を依頼したい薬品についてご記入ください（内服、吸入、点耳、点鼻、点眼、塗布、湿布、注射[※]、座薬等、あらゆる薬品が対象となります）。

例：薬品名	SM散
例：使用量（1日 or 1回）	3g（1日）
例：使用方法（○を）	内服（ <u>服用</u> ・頓用）、吸入、点耳、点鼻、点眼、塗布、湿布、注射、座薬
例：使用理由	消化を助けるため。
薬品名	
使用量（1日 or 1回）	
使用方法（○を）	内服（常用・頓用）、吸入、点耳、点鼻、点眼、塗布、湿布、注射、座薬
理由	
薬品名	
使用量（1日 or 1回）	
使用方法（○を）	内服（常用・頓用）、吸入、点耳、点鼻、点眼、塗布、湿布、注射、座薬
理由	
薬品名	
使用量（1日 or 1回）	
使用方法（○を）	内服（常用・頓用）、吸入、点耳、点鼻、点眼、塗布、湿布、注射、座薬
理由	

※注射[※]での薬物使用の場合には、関節内注射が筋肉内注射かの別についてもお書き下さい。

使用する可能性のある薬物についての調査書

ふりがな 氏 名	
競 技	

現在使用している薬品とは別に、国内外の大会・合宿などに参加する時に携行する可能性のある薬品の中で、調査を依頼したいものについてご記入下さい（内服、吸入、点耳、点鼻、点眼、塗布、湿布、注射、座薬等あらゆる薬品が対象となります）。

薬品名	
薬品名	
薬品名	
薬品名	
薬品名	
薬品名	
薬品名	
薬品名	
薬品名	
薬品名	
薬品名	

一般社団法人日本ろう者スキー協会
会長 土師 比佐夫 様

一般財団法人全日本ろうあ連盟
デフリンピック派遣委員会
事務局長 太田陽介
(公印省略)

第 18 回冬季デフリンピック

新規選手の聴力検査図の提出について（依頼）

平素は格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。
第 18 回冬季デフリンピック（於ロシア）に出場するにあたって、ICSD から出場資格に関する規程が発表されています。その中に下記のとおり、聴力に関する規程が定められております。

この条件に適合していることを証明するために、聴力検査図を提出しなければなりません。ICSD 認定の国際大会に出場して聴力検査図を提出したことがある者は改めて提出する必要はありませんが、これまでに提出したことのない選手は提出しなければなりません。新規選手は医療機関にて聴力検査を受け、ICSD の定める聴力検査図に結果を記入してもらうよう各団体で指導をお願い致します。また前大会に出場した選手はどのようにして検査を行い記入してもらったのか、その経験を皆さんにアドバイスしていただくなど、各自取り組みをお願い致します。
何卒、皆様のご協力のほどをよろしくお願い申し上げます。

* アジア大会、デフリンピック等に出場経験のある選手で、婚姻等により氏名変更のあった場合は、旧姓でのパスポート《写真付きのページ》と現在のパスポートのコピーをお送りください。（聴力検査図は不要です）

* 提出くださった聴力検査図（原本）は当事務局より ICSD へメール添付及び郵送をいたします。メールする際に CC へ貴協会ご担当者を入れますので、添付書類を保存下さいますよう宜しくお願い致します。

【添付資料】

- 01－提出該当事者一覧
- 02－ICSD 専用オーディオグラム用紙
- 03－聴力検査表記載時の注意事項（原文と和訳あり）
- 04－見本

⑥聴力検査票

05－医師宛て依頼文書（必要に応じて活用ください。）

【提出物】

- ・ICSD 専用オーディオグラム用紙
- ・病院の検査機器から出力された結果のコピー

【提出べ切】2014 年 10 月 20 日（月）厳守

※聴力検査図は日本ろう者スキー協会にて取りまとめの上、当事務局へご提出願います。

【提出先】（一財）全日本ろうあ連盟デフリンピック派遣委員会 事務局

〒162-0801 東京都新宿区山吹町 130 SKビル 8 階
TEL 03-3268-8847 FAX 03-3267-3445
担 当 後藤 (gotou@jfd.or.jp) 加茂下 (kamoshita@jfd.or.jp)

以 上



Founded in 1924

International Committee of Sports for the Deaf
Recognized by the International Olympic Committee

OFFICIAL AUDIOGRAM DATA SHEET

528 Trail Avenue
Frederick, Maryland 21701
UNITED STATES
Fax: +1 301 620 2990
Email: controls@icid.org

PLEASE PRINT OR USE TYPEWRITER and send to your National Deaf Sports Federation for review

***Required Fields**

***Name:** Family Name (Last Name) Given Name (First Name) Other Names (Middle Name)

***Nation:** _____ ***Sport:** _____

***Date of Birth:** _____ ***Which event?** ☐ Regional Championships ☐ World Championships ☐ Deaflympics

***Gender:** ☐ Male ☐ Female

AUDIOGRAM

***Audiometer:** _____ ***Examiner Name:** _____

***Calibration:** ☐ ANSI 1969 ☐ ISO 1964 ***Date of Examination:** _____ (day / month / year)

***AIR CONDUCTION & *BONE CONDUCTION**

FREQUENCY in hertz (Hz)

	125	250	500	1000	2000	4000	8000
RIGHT							
LEFT							

***IMPEDANCE TYMPANOMETRY**

	Ear	Canal Vol.	Peak Comp.	Gradient	Pres. Peak
RIGHT					
LEFT					

***REFLEXOMETRY**

Site Equals Probe Ear

	Stim	500	1000	2000	4000
RIGHT					
	Ipsi				
	Contra				
LEFT					
	Ipsi				
	Contra				

PURE TONE AVERAGE (500-1000-2000 Hz)

	Ear	Air	Bone
RIGHT			
LEFT			

ICSD HOME OFFICE USE ONLY

ID: _____
Data Entered By: _____
ICSD Audiologist: _____

KEY TO SYMBOLS

Ear	Air	Air-masked	Bone	Bone-masked
RIGHT (red)	O	△	<	(
LEFT (blue)	X	□	>	)
No Response NR				

TYPE OF HEARING LOSS
(Check one for each ear with an "X")

Ear	Sensori-neural	Conductive	Mixed	Cochlear Implant
RIGHT				
LEFT				

COMMENTS: _____
(In English)

Audiogram Form
Revised 6/2011
www.deaflympics.com/forms/audiogram.pdf

* This field is required and audiogram form must be completed three (3) months before the event.

Notes for the audiologist:

Thank you for using the ICSD audiogram form. Our athletes need to complete this form fully to receive an Identification number to participate in upcoming Championship or Deaflympics events.

In compliance with ICSD audiogram regulations, here is a guideline for you to complete the ICSD audiogram form, as listed below:

1. Official ICSD Audiogram form must be used. The form can be downloaded from www.deaflympics.com/forms/audiogram.pdf
2. All four (4) types of audiogram testing below must be filled out entirely for **EACH** ear including:
 1. **Air Conduction** - Please test on 500, 1000, and 2000Hz.
 2. **Bone Conduction** - Please test on 500, 1000, and 2000Hz.
 3. **Tympanograms** (Tympanometry) - Please write numbers
 4. **Acoustic Reflexes** (Reflexometry) - Please write numbers or NR if there are no responses. Do **not** use dash mark (-) or zero (0).

3. Below yellow box with numbers indicates required fields for you to enter:

1. **Audiometer** - Identify the name of the audiometer.
2. **Examiner Name** - Name of the audiologist who performs the test.
3. **Calibration** - Indicate the name of the calibration used.
4. **Date of Examination** - Enter examination date.
5. **Air Conduction** - Record air testing results. See 2.1 above. If there are no responses in Air Conduction, please write NR as noted in "Key to Symbols".
6. **Bone Conduction** - Record bone testing results. See 2.2 above. If there are no responses in Bone Conduction, please write NR as noted in "Key to Symbols".
7. **Tympanometry** - Record Tympanometry test results. See 2.3 above.
8. **Reflexometry** - Record Reflexometry test results. See 2.4 above.
9. **Pure Tone Average** - Add 500, 1000, 2000Hz and divided by three (3) for both air and bone testing results.
10. **Type of Hearing Loss** - Identify the type of hearing loss by placing 'X' accordingly as shown on the form for respective ear.
11. **Comments** - Please write comments as needed about this athlete. If there are no Tympanogram or reflex equipments to test, please write comments in English.
12. This is for ICSD official uses only, do not write.

Failure to observe the requirements will result in delayed approval.

Thank you in advance for your cooperation,
ICSD Staff

As of: May 2011

聴覚検査士のみなさまへ：

ICSDのオージオグラム用紙をご利用ください。ありがとうございます。われわれの選手は、選手権大会、デフリンピック等の大会に出場するため、この書類を完全に記入し、ID番号を得る必要があります。

以下は、ICSDオージオグラム規則に則った、ICSDオージオグラム用紙の記入ガイドラインです。

1. ICSD公式オージオグラム用紙の記入が必須です。用紙は以下のサイトからダウンロードできます。
www.deaflympics.com/forms/audiogram.pdf
2. 以下の4種類のオージオグラム検査は、**両耳**について、完全に記載しなければなりません。
 1. **気導** -500、1000、および2000Hzの検査を行ってください。
 2. **骨導** -500、1000、および2000Hzの検査を行ってください。
 3. **ティンパノグラム** (ティンパノメトリー) - 数を記載してください。
 4. **耳小骨筋反射** (アブミ骨筋反射) - 数、もしくは、反応がない場合はNRと記載してください。ダッシュ (-) もしくはゼロ(0)を使って記入しないでください。
3. 以下の黄色い四角で囲んだ番号は、必須記載項目です。

1. **オージオメーター** - オージオメーターの名称を明記してください。
2. **検査者氏名** - 検査を行った、聴覚検査士の名前を記入してください。
3. **キャリブレーション** - 使用したキャリブレーションの名称を明記してください。
4. **検査日** - 検査を行った日を記入してください。
5. **気導** - 気導検査の結果を記録してください。上記2.1を参照のこと。気導検査の応答がない場合、「記号凡例 (Key to Symbols)」に従って、NRと記入してください。
6. **骨導** - 骨導検査の結果を記録してください。上記2.2を参照のこと。骨導検査の応答がない場合、「記号凡例」に従って、NRと記入してください。
7. **ティンパノメトリー** - ティンパノメトリーの検査結果を記録してください。上記2.3を参照のこと。
8. **耳小骨筋反射** - 耳小骨筋反射の検査結果を記録してください。上記2.4を参照のこと。
9. **標準純音** - 500、1000、2000Hzの項目を追加し、気導と骨導両方の検査結果を、それぞれ記入してください。
10. **失聴のタイプ** - 失聴の種類を確認し、それぞれの耳について、該当する欄に「X」を記入してください。
11. **コメント** - 必要に応じて、当該選手についてコメントを記入してください。ティンパノグラム、もしくは耳小骨筋反射の検査器具がない場合、コメントを英語で記載してください。
12. この欄は記入しないでください。ICSD事務局のみが使用します。

必須事項の確認もれは、承認の遅れという結果を招きます。

ご協力ありがとうございます。
ICSDスタッフ

2011年5月現在

第18回冬季デフリンピック競技大会

ソーシャルメディアガイドライン



一般財団法人全日本ろうあ連盟

ソーシャルメディアとは

ソーシャルメディアとはユーザーにより作成された内容を創出、交換することのできるインターネット・ベースのアプリケーション。

ブログ

一般的に誰もがアクセスできるウェブサイトの一つで、ジャーナルや日記の形で投稿、構成され、通常新しい順に表示されるもの。

ソーシャルネットワークサービス (Facebook, MySpaceなど)

利用者各人を表現する(通常個人プロフィール)、または利用者所有のリンク先など多種多様な追加サービスを含むオンラインサービス、コンピューターシステムおよびサイトのことである。

ウィキ

ウェブブラウザ経由でリンクされたいくつものウェブページを作成したり編集したりできるウェブサイトのことである。

Twitter、YouTube、他…

— 1 —

デフリンピック資産の例

！ 許可無く、営利目的で使用することは固く禁じられています。



ICSDロゴ



日本代表選手団ロゴ

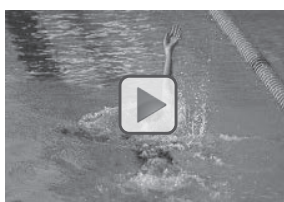
18th 2015
Winter Deaflympics
Khanty-Mansiysk, Magadan, Russia



大会ロゴ



静止画



動画・音声

— 2 —

デフリンピック資産の例

デフリンピックを広く知っていただくためにも、規制はいたしません。ただし、誤解を招くような使い方は控えて下さい。
(例: 「ソフィアデフリンピック」という名前だけの単独ブログを立ち上げる、など)

デフリンピックを特定する単語

Deaflympics

デフリンピック

第18回冬季デフリンピック競技大会を想起させる単語

Khanty-Mansiysk2015

ロシア 2015

2015年ロシア

— 3 —

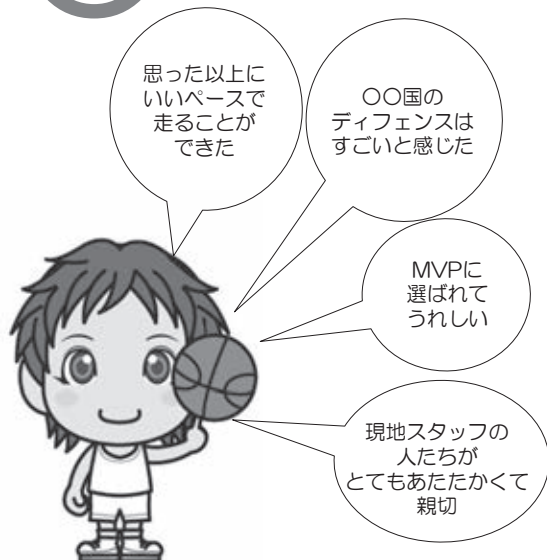
デフリンピック派遣期間中
2015.3.24～2015.4.7

ソーシャルメディアへの文字投稿

■投稿していい内容■



デフリンピックで自分自身が
経験したことについて
個人的な感想を書くこと



— 4 —

デフリンピック派遣期間中
2015.3.24～2015.4.7

ソーシャルメディアへの文字投稿

■投稿していい内容■



文章の一部に「デフリンピック」
という言葉を使うこと



— 5 —

デフリンピック派遣期間中
2015.3.24～2015.4.7

ソーシャルメディアへの文字投稿

■投稿してはいけない内容■



企業・団体や商品のPRに
つながる記載



— 6 —

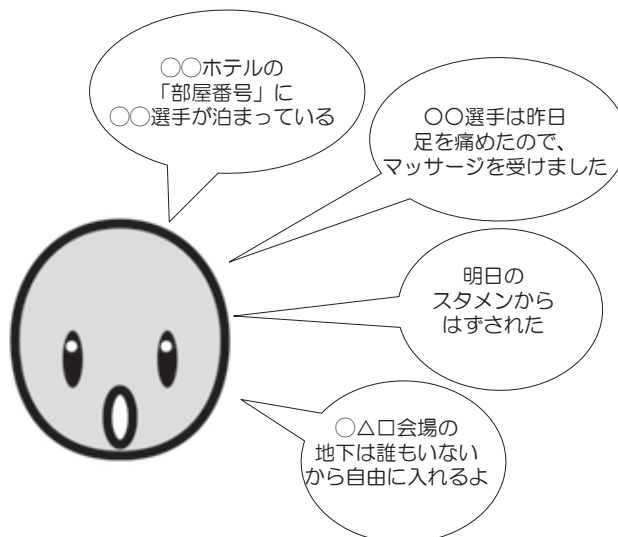
デフリンピック派遣期間中
2015.3.24～2015.4.7

ソーシャルメディアへの文字投稿

■投稿してはいけない内容■



他の参加者や組織の個人情報、
秘密事項
・施設のセキュリティ



— 7 —

デフリンピック派遣期間中
2015.3.24～2015.4.7

ソーシャルメディアへの文字投稿

■投稿してはいけない内容■

他者や他の組織の
批判・誹謗・中傷



— 8 —

デフリンピック派遣期間中
2015.3.24～2015.4.7

ソーシャルメディアへの写真投稿

■被写体の許可があれば掲載可■

スタンドからの撮影写真
(特定選手のクローズアップ写真は不可！)

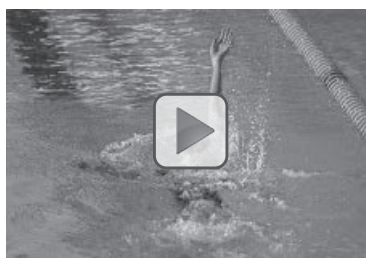
スタンドからの撮影(競技、表彰)
※特定選手のクローズアップ写真は不可

ホテルの入り口前、ホテルロビー
※写真のみ可
(自分と家族、応援に来てくれた友人など)

— 9 —

デフリンピック派遣期間中
2015.3.24～2015.4.7

個人で撮影した動画を、本人の許可無く
あらゆる媒体で公表することは禁止



<例外>

デフリンピック会場で自分自身を撮影したもの

デフリンピック会場・宿泊場所以外で撮影したもの

— 10 —

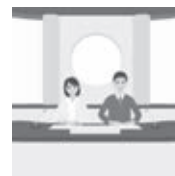
デフリンピック派遣期間中
2015.3.24～2015.4.7

メディア行為は禁止

デフリンピック期間中、メディアとして資格認定を受けた人以外は、会場や宿泊場所などで、記者・レポーター・カメラマンの他、いかなるメディアとしての活動もしてはいけません。



他者へのインタビュー



ネット番組などのパーソナリティやレポーターとして大会や選手の様子をレポートすること



マスコミや企業・団体の広報媒体への記事や写真、動画・音声の投稿

大会や競技の様子を生、録画を問わず放送すること

— 11 —



デフリンピック区域 ～撮影できる場所～

■競技会場■

スタンドからの撮影(競技、表彰)
※特定選手のクローズアップ写真は不可

■練習会場■

スタンドからの撮影(日本選手を撮影)

■宿泊場所■

ホテルの入り口前、ホテルロビー
※写真のみ可(動画不可)
(自分と家族、応援に来てくれた友人など)

— 12 —



デフリンピック区域 ～撮影禁止の場所～

■競技会場■

競技区域(field of play)からの撮影

ウォームアップ区域(出入口、屋内)

更衣室(出入口、屋内)

招集所(出入口、屋内)

■宿泊場所■

他国選手団の居住区

食堂(出入口、屋内)

本部(出入口、屋内)

アスレチックストレーナー室(設備など)

— 13 —

デフリンピック派遣期間中
2015.3.24～2015.4.7

競技結果の情報発信について

各自の競技に限り、リアルタイムでの
結果情報発信はしても構いません。

※ただし、公式結果と相違が出る場合がありますので、
各競技団体で責任を持ち、発信の際は十分にご注意く
ださい。

※自分の競技以外の結果情報発信はしてはいけません。

※ネットマナーは必ず守って下さい。

【投稿してはいけない内容】

- ・他の参加者や組織の個人情報や秘密事項
- ・他者や他の組織の批判・誹謗・中傷

全競技の結果は、ICSD公式結果報告を受け
たあと、「日本代表選手団公式サイト」に毎
回掲載します。

競技団体サイトやブログなどにも、
「日本代表選手団公式サイト」のリンクを
貼って下さるようお願いします。

— 14 —

大会後の写真の取り扱い

(日本選手団公式サイトに掲載した写真や動画)

ケースにより
取り扱いが異なります



全日本ろうあ連盟に
お問い合わせください

一般財団法人全日本ろうあ連盟 スポーツ委員会
FAX: 03-3267-3445 TEL: 03-3268-8847
E-Mail: ifd-sc@ifd.or.jp (受信専用)

— 15 —

⑧デフリンピック開催地一覧

夏季デフリンピック開催地一覧

回数	開催国	開催都市	開催期間	大会規模		日本代表団派遣			日本代表団成績		
				参加国数	選手数	選手	役員	計	金	銀	銅
1	フランス	パリ	1924年8月10日～8月17日	9	148						
2	オランダ	アムステルダム	1928年8月18日～8月26日	10	212						
3	西ドイツ	ニュルンベルグ	1931年8月19日～8月23日	14	316						
4	イギリス	ロンドン	1935年8月17日～8月24日	12	221						
5	スウェーデン	ストックホルム	1939年8月24日～8月27日	13	250						
6	デンマーク	コペンハーゲン	1949年8月12日～8月16日	14	391						
7	ベルギー	ブリュッセル	1953年8月15日～8月19日	16	473						
8	イタリア	ミラノ	1957年8月25日～8月30日	25	635						
9	フィンランド	ヘルシンキ	1961年8月6日～8月10日	24	613						
10	アメリカ	ワシントン	1965年6月27日～7月3日	27	687	7	4	11	0	1	1
11	ユーゴスラビア	ベオグラード	1969年8月9日～8月16日	33	1189	9	4	13	0	4	0
12	スウェーデン	マルメ	1973年7月21日～7月28日	31	1116	9	4	13	4	2	0
13	ルーマニア	ブカレスト	1977年7月17日～7月27日	32	1150	17	8	25	5	2	0
14	西ドイツ	ケルン	1981年7月23日～8月1日	32	1198	33	11	45	7	4	2
15	アメリカ	ロサンゼルス	1985年7月10日～7月20日	29	995	52	15	77	8	5	2
16	ニュージーランド	クライストチャーチ	1989年1月7日～1月17日	30	955	40	16	56	7	3	4
17	ブルガリア	ソフィア	1993年7月24日～8月2日	52	1679	41	13	54	4	7	5
18	デンマーク	コペンハーゲン	1997年7月13日～7月26日	65	2028	44	14	58	6	1	1
19	イタリア	ローマ	2001年7月22日～8月1日	67	2208	60	26	86	10	5	5
20	オーストラリア	メルボルン	2005年1月5日～16日	63	2038	102	33	135	3	7	1
21	台湾	台北	2009年9月5日～15日	77	2493	154	90	244	5	6	9
22	ブルガリア	ソフィア	2013年7月26日～8月4日	90	2871	149	70	219	2	10	9
23	トルコ	サムスン	2017年 月 日～ 月 日								

冬季デフリンピック開催地一覧

回数	開催国	開催都市	開催期間	大会規模		日本選手団派遣			日本選手団成績		
				参加国数	選手数	選手	役員	計	金	銀	銅
1	オーストリア	ゼーフェクト	1949年1月26日～1月30日	5	33						
2	ノルウェー	オスロ	1953年2月20日～2月24日	6	44						
3	西ドイツ	オーベルアーンメルガウ	1955年2月10日～2月13日	8	59						
4	スイス	モンタナヴェルマラ	1959年1月27日～1月31日	9	53						
5	スウェーデン	オーレ	1963年3月12日～3月16日	9	60						
6	西ドイツ	ベルヒスガーデン	1967年2月20日～2月25日	12	77	2	3	6	0	0	0
7	スイス	アーデルボーン	1971年1月25日～1月29日	13	92		(不参加)				
8	アメリカ	レイクプラシッド	1975年2月2日～2月8日	13	139	10	3	13	0	0	0
9	フランス	メリベル	1979年1月21日～1月27日	14	113	8	5	13	0	0	0
10	イタリア	マドンナ	1983年1月16日～1月23日	15	147	9	6	15	0	0	0
11	ノルウェー	オスロ	1987年2月7日～2月14日	15	129	10	4	14	0	0	0
12	カナダ	バンフ	1991年3月2日～3月9日	16	181	9	6	15	0	0	0
13	フィンランド	ユウラス	1995年3月13日～3月19日	18	258	9	5	14	0	0	0
14	スイス	ダボス	1999年3月8日～3月14日	18	265	10	5	15	0	1	1
15	スウェーデン	スンツバル	2003年2月28日～3月8日	21	247	14	15	29	2	0	0
16	アメリカ	ソルトレークシティ	2007年2月3日～2月10日	23	298	17	22	39	3	0	1
17	スロバキア	ハイトラウス	2011年2月10日～2月20日	中止	中止						
18	ロシア	ハンティ・マンシースク	2015年3月28日～4月5日	27	344	22	26	48	3	1	1

第18回冬季デフリンピック競技大会 日本選手団参加報告書

発行日：2015年12月1日

発行：一般財団法人全日本ろうあ連盟

〒162-0801 東京都新宿区山吹町130 SKビル8F

TEL 03-3268-8847・FAX 03-3267-3445

ホームページ <http://www.jfd.or.jp/>

Eメール jfd-sc@jfd.or.jp

編集：一般財団法人全日本ろうあ連盟 デフリンピック派遣委員会

編集協力：一般社団法人日本ろう者スキー協会

印刷：日本印刷株式会社



第18回冬季デフリンピック競技大会金メダル